

# 第 11 回

# 日本聴覚障害学生 高等教育支援 シンポジウム

2015年12月19～20日  
会場：クローバープラザ



## 報 告 書

PEPNet-Japan

- 主催 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan)  
国立大学法人筑波技術大学
- 共催 国立大学法人福岡教育大学
- 協力 社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会  
特定非営利活動法人障がい者相互支援センター MCP
- 後援 文部科学省 / 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) / NHK 福岡放送局 /  
FBS 福岡放送 / 九州朝日放送 / RKB 毎日放送 / TVQ 九州放送 / 朝日新聞社 /  
読売新聞社 / 毎日新聞社 / 産経新聞社西部本部 / 西日本新聞社



# もくじ

1. はじめに	2
2. 開催要項	4
3. プログラム	6
4. 報告	
1) アフタヌーンセッション	10
聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2015	
聴覚障害学生支援に関する機器展示	
九州・沖縄地区の大学における聴覚障害学生支援に関するパネル展示 および PEPNet-Japan 活動紹介、PEPNet-Japan 連携大学・機関活動紹介	
相談コーナー トーク&トーク	
2) ミニセミナー	
「大学における情報保障で音声認識技術を活用するには —効果と課題、導入のポイント—」	18
「やってみよう！ 連係入力—基本的な設定と入力体験—」	24
「解説！ 就職に向けた準備—模擬面接を通して—」	29
「補聴システムを使ってみよう！—システムの概要・導入事例・活用ポイント—」	32
3) 分科会	
分科会 1 「基礎講座 聴覚障害学生支援再入門 —合理的配慮の考え方にもとづいて—」	40
分科会 2 「合理的配慮の時代に求められる聴覚障害学生の構えと技術」	49
分科会 3 「一緒にスキルアップ Part2 —ノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳—」	59
分科会 4 「チバリヨー！ 最初で最後の九州・沖縄開催としないために —地区の実践から学ぶ—」	73
4) 全体会	
特別企画 公開事例検討会 「どうする？ どうなる？ 合理的配慮—事例から読み解く障害者差別解消法—」	84
5. 聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト受賞ポスター	89

 はじめに 

平成 27 年度、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）は、新たに沖縄大学を連携大学に迎え、事務局を務める筑波技術大学を含め全国 23 の大学・機関のネットワークとなりました。本ネットワークは、聴覚障害学生支援のさらなる発展を目指し、連携大学・機関間で協力して、聴覚障害学生支援に関するノウハウを積み重ね、先駆的な事例の開拓を行っています。また、本ネットワークの活動の成果をより多くの大学・機関に向けて発信するとともに、全国の高等教育機関における支援実践についての情報交換をすることを目的として、年に 1 回シンポジウムを開催しています。

今回は、共催校の福岡教育大学と協力し、初めて九州地区で開催することができました。全国の大学教職員、学生等 419 名（実行委員等関係者含む）が参加し、中でも九州・沖縄地区から 100 名近くのご参加をいただくことができました。大規模なコンサートと日程が重なってしまい、参加者の皆様には宿泊施設の取りにくい中、遠方からも大勢の方々にご参加いただき、誠にありがとうございました。

今回は会場の都合もあり、プログラムを 2 日間に分けて開催しました。1 日目はアフタヌーンセッションが盛大に行われ、オープニングにはじまり、聴覚障害学生支援に関連した 4 つのミニセミナーや、個別にじっくり話せる相談コーナー、聴覚障害学生支援に関する最新の技術に触れられる機器展示など、さまざまな催しで大変賑わいました。特に毎年注目が集まる「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト」では聴覚障害学生支援に熱心に取り組んでいる 17 大学・団体からの応募があり、それぞれ工夫を凝らしたポスター発表が行われ、特に注目度の高かった発表が表彰されました。受賞ポスターは本報告書にも掲載しております。また、夜には筑波技術大学学生が企画を担当した「学生交流企画」を行い、聴覚障害学生や支援学生約 80 名が参加し、ディスカッション等で盛り上がりました。

2 日目の午前は、4 つの分科会（基礎講座「聴覚障害学生支援再入門—合理的配慮の考えにもとづいて—」、「合理的配慮の時代に求められる聴覚障害学生の構えと技術」、「一緒にスキルアップ Part2—ノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳—」、「チバリョー！最初で最後の九州・沖縄開催としないために—地区の実践から学ぶ—」）が行われ、いずれの企画でも活発な意見交換が行われました。午後に行われた全体会では、ご来賓としてお越しいただいた文部科学省高等教育局学生留学生課課長補佐小代哲也氏からご挨拶を頂戴し、その後、特別企画として公開事例検討会「どうする？どうなる？合理的配慮—事例から読み解く障害者差別解消法—」が行われました。特別企画は本ネットワークの白澤麻弓事務局長が司会を担当し、講師として藤木和子氏（弁護士）、池谷航介氏（大阪教育大学）、松岡克尚氏（関西学院大学）、村田淳氏（京都大学）をお迎えし、



熱い事例検討がステージ上で繰り広げられました。その他の時間も、会場のあちこちで活発な意見交換や交流が行われ、2 日間のシンポジウムは大変盛況のうちに幕を閉じました。

今回報告書の作成にあたっては、企画コーディネーターや講師の皆様のご協力を賜りました。シンポジウムにご参加された方はもちろん、残念ながらいらっしゃれなかった方にも、2 日間の熱気を少しでもお伝えできましたら幸いです。

本シンポジウムの開催にあたりましては、共催校の福岡教育大学をはじめ、多方面から協力いただきました社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会、特定非営利活動法人障がい者相互支援センターMCP、またご後援賜りました文部科学省、独立行政法人日本学生支援機構、その他報道各社の皆様方に多大なるご協力をいただき、誠にありがとうございました。また、企画コーディネーター、講師、PEPNet-Japan 連携大学・機関の皆様、情報保障をご担当くださいました方々など、本シンポジウムは大変多くの方々が支えてくださいました。また、ご参加頂きました皆様にもこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）事務局

## 開催要項

- 名 称 : 第 11 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム
- 目 的 : 筑波技術大学に事務局を置く日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）では、平成 16 年から、特に聴覚障害学生への支援体制が充実し、積極的な取り組みを行ってきている大学・機関と共同で、聴覚障害学生支援に関するノウハウを積み重ね、先駆的な事例の開拓を行ってきた。一方、我が国では平成 28 年 4 月から障害者差別解消法が施行されることとなり、障害者への不平等な差別的取扱いが禁止され、高等教育機関においても、国公立大学では合理的配慮の提供が法的義務、私立大学で努力義務となる。本シンポジウムでは、そのような情勢を鑑み、全国の大学における聴覚障害学生への支援実践に関する情報を交換するとともに、PEPNet-Japan の活動成果をより多くの大学・機関に対して発信することで、今後の高等教育機関における聴覚障害学生支援体制発展に寄与することを目的とする。
- 日 時 : 2015 年 12 月 19 日（土）14 時～17 時（受付 13 時 30 分～）  
2015 年 12 月 20 日（日）10 時～15 時（受付 9 時 30 分～）
- 会 場 : クローバープラザ（福岡県春日市原町 3-1-7）
- 対 象 : 大学、その他高等教育機関に所属する教職員  
大学等に在籍する聴覚障害学生  
大学等に在籍する聴覚障害学生を支援する情報保障者  
その他高等教育機関における障害学生支援に関心のある方々
- 主 催 : 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）  
国立大学法人筑波技術大学
- 共 催 : 国立大学法人福岡教育大学
- 協 力 : 社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会  
特定非営利活動法人障がい者相互支援センターMCP



後 援 : 文部科学省  
独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO)  
NHK 福岡放送局  
FBS 福岡放送  
九州朝日放送  
RKB 毎日放送  
TVQ 九州放送  
朝日新聞社  
読売新聞社  
毎日新聞社  
産経新聞社西部本部  
西日本新聞社

参 加 費 : 無料

大 会 長 : 寺尾 慎一 (福岡教育大学)

実 行 委 員 長 : 石原 保志 (筑波技術大学)

事 務 局 長 : 白澤 麻弓 (筑波技術大学)

幹 事 : 萩原 彩子 (筑波技術大学)

実 行 委 員 : 須藤 正彦・佐藤 正幸・小林 正幸・大杉 豊・山田 重樹・  
三好 茂樹・河野 純大・磯田 恭子・中島亜紀子・石野麻衣子・  
五十嵐依子 (筑波技術大学)  
平田 哲史・相澤 宏充・太田 富雄・牛尾 憲一・柴田 和巳・  
松永亜矢子・内田 佳織 (福岡教育大学)



## プログラム

12月19日（土）

《アフタヌーンセッション》14:00～17:00

＊オープニング

＊聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2015

＊相談コーナー “トーク&トーク”

＊ミニセミナー・ワークショップ

「大学における情報保障で音声認識技術を活用するには  
ー効果と課題、導入のポイントー」

講師：三好 茂樹（筑波技術大学／PEPNet-Japan 運営委員）

「やってみよう！連係入力ー基本的な設定と入力体験ー」

講師：宇都野 康子（筑波技術大学）

「解説！就職に向けた準備ー模擬面接を通してー」

講師：石原 保志（筑波技術大学／PEPNet-Japan 運営委員長）

折笠 紀恵（筑波技術大学）

「補聴システムを使ってみよう！ーシステムの概要・導入事例・活用ポイントー」

講師：加藤 哲則（愛媛大学／PEPNet-Japan 運営委員）

佐藤 正幸（筑波技術大学／PEPNet-Japan 事務局員）

＊聴覚障害学生支援に関する機器展示

＊PEPNet-Japan 連携大学・機関活動紹介展示

＊九州・沖縄地区大学における聴覚障害学生支援に関するパネル展示 など



**12月20日（日）**

《分科会》10:00～12:00

■ 分科会1「基礎講座 聴覚障害学生支援再入門ー合理的配慮の考えにもとづいてー」

企画コーディネーター：磯田 恭子

（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 助手／PEPNet-Japan 事務局員）

司 会 ： 磯田 恭子（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 助手／  
PEPNet-Japan 事務局員）

講 師 ： 桑原 斉（東京大学 バリアフリー支援室 准教授）

藤原 隆宏（関西大学 学生相談・支援センター コーディネーター）

小谷 佐智子（大阪教育大学 学務部学生サービス課学生支援係  
障がい学生修学支援ルーム 職員）

■ 分科会2「合理的配慮の時代に求められる聴覚障害学生の構えと技術」

企画コーディネーター：大杉豊（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 教授）

司 会 ： 小林 洋子（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 助教）

講 師 ： 土橋 恵美子（同志社大学 京田辺校地学生支援課  
障がい学生支援コーディネーター）

長野 留美子（関東聴覚障害学生サポートセンター コーディネーター）

中村 友香（団体職員）

■ 分科会3「一緒にスキルアップ Part2

ーノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳ー」

企画コーディネーター：萩原 彩子

（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 助手／PEPNet-Japan 事務局員）

司 会 ： 萩原 彩子（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 助手／  
PEPNet-Japan 事務局員）

講 師 ： 松崎 丈（宮城教育大学 特別支援教育講座 准教授）

吉川 あゆみ（関東聴覚障害学生サポートセンター コーディネーター）

田中 啓行（関東聴覚障害学生サポートセンター コーディネーター）



■ 分科会4 「チバリョー！最初で最後の九州・沖縄開催としないために

ー地区の実践から学ぶー」

企画コーディネーター：太田 富雄（福岡教育大学 障害学生支援センター 教授）

司 会 ： 太田 富雄（福岡教育大学 障害学生支援センター 教授）

講 師 ： 横山 正見（沖縄大学 学生支援課 障がい学生支援コーディネーター）

木村 素子（宮崎大学 教育文化学部特別支援教育講座 准教授）

佐々木 順二（九州ルーテル学院大学 人文学部心理臨床学科 准教授）

早川 就（福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校 主幹教諭）

《全体会》13:00～15:00

\*式典

\*特別企画 公開事例検討会（福岡教育大学 障害学生支援センター 共催）

「どうする？どうなる？合理的配慮－事例から読み解く障害者差別解消法－」

司 会 ： 白澤 麻弓

（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 准教授／

PEPNet-Japan 事務局長）

講 師 ： 藤木 和子（藤木総合法律事務所 弁護士）

池谷 航介（大阪教育大学 教職教育研究センター 特任准教授）

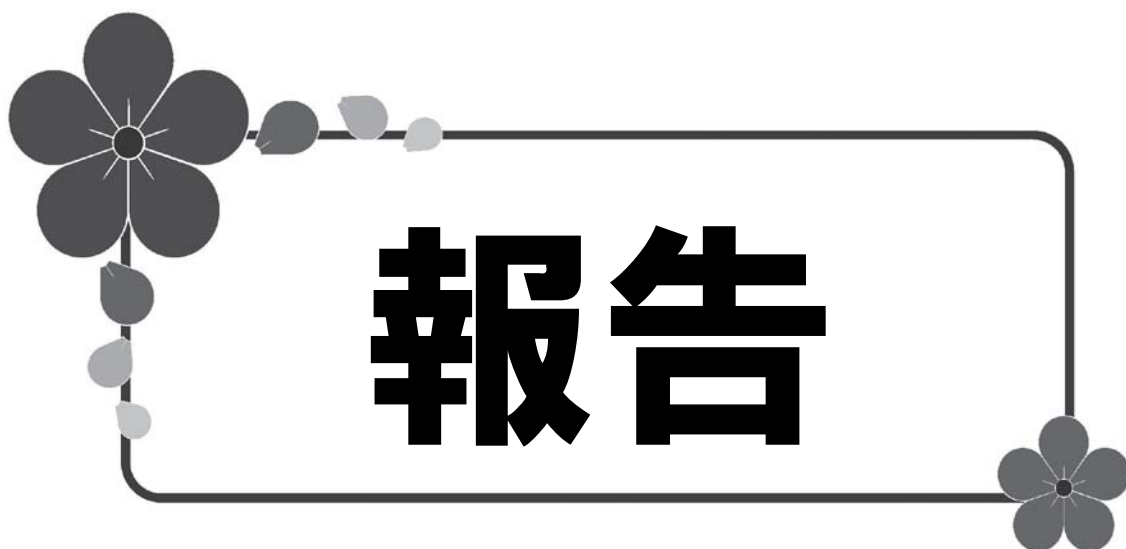
松岡 克尚（関西学院大学 人間福祉学部 教授）

村田 淳（京都大学 学生総合支援センター 助教）

\*聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト2015 表彰式

\*閉会





### 【アフタヌーンセッション】

本シンポジウムでは、例年昼休みに2時間程度で行っていたランチセッションを3時間半に拡大し、アフタヌーンセッションとして実施した。一会場内でコンテスト企画、各種展示、ミニセミナー、相談コーナーなどを展開し、参加者同士が直接情報交換したり、各自の興味・関心に合わせて情報収集したりする機会を提供した。ここでは企画の内容について、概略を報告する。

### 「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2015」

本コンテストは全国の高等教育機関や団体が日頃行っている聴覚障害学生支援に関する取り組みを発表し、参加者から多くの票を得た複数の取り組みを表彰する企画である。

8回目を迎えた今回は全国17の大学・団体から応募があり、情報保障の新たな方法をはじめ、学生同士の繋がりを意識した取り組み、地域を巻き込んだ活動など、様々な内容が発表・紹介された。例年は、参加者がポスターを展示したブースに足を運び、説明を聞くという方法であったが、今回は各大学・団体に30秒のPRタイムを用意し、ステージから参加者全員に対して各自の取り組みを紹介する新たな試みを行った。

参加者には2枚の投票用紙を配り、参考になった取り組みや今後の発展を期待する取り組みに投票してもらった。また、投票用紙の裏面にコメント欄を設け、投票した大学・団体への応援メッセージを受け付けた。



写真 実践事例コンテストの様子

左上：30秒PRでは趣向をこらした発表が多く見られた  
右上：発表ブースは常時盛況で、随所で意見交換が行われていた  
下：取り組みの内容が伝わるよう、様々な資料が準備されていた

投票の結果、以下の通り各賞が授与された。なお結果発表ならびに表彰では、PEPNet-Japan 関係者ならびに来賓の方々にプレゼンターをお願いした。

PEPNet-Japan 賞	大阪教育大学 障がい学生修学支援ルーム
準 PEPNet-Japan 賞	群馬大学
グッドプラクティス賞	愛知教育大学 情報保障支援学生団体「てくてく」
新人賞	金沢星稜大学 障がい学生支援チーム
プレゼンテーション賞	亜細亜大学 FD グループ

奨励賞

札幌学院大学／松山大学 障がい学生支援団体 POP／東海大学 外国語教育センター／  
関西学院大学 総合支援センターキャンパス自立支援室／大学間連携共同教育推進事業  
選定取組「学都いしかわ・課題解決型グローバル人材育成システムの構築」障がい学生  
等支援グループ（石川県障がい学生等共同サポートセンター）／東京学芸大学／  
沖縄大学 障がい学生支援／愛媛大学 障がい学生支援ボランティア（CBP）／  
千葉大学 ノートテイク会／東北福祉大学 障がい学生サポートチーム／  
特定非営利活動法人ゆに／宮城教育大学 しょうがい学生支援室 聴覚しょうがい部会  
学生運営スタッフ

「PEPNet-Japan 賞」は大阪教育大学 障がい学生修学支援ルームに授与された。学生同士が主体性を持ちながら連携し、「共に気持ちよく学びあう活動」について、ICT を利用しながら多くの参加者に声を掛け、丁寧に説明をする様子が印象的であった。

「準 PEPNet-Japan 賞」は 2 年連続で群馬大学が受賞した。支援体制が整うことで生じる課題や悩みについて、聴覚障害学生や健聴の学生がそれぞれの立場で解決策を検討した取り組みが紹介され、多くの関心を集めた。

「グッドプラクティス賞」には、本コンテストが開始した当初から 8 回連続で参加している、愛知教育大学 情報保障支援学生団体「てくてく」が選ばれた。ブースでは学生同士や、学生と授業を繋ぐためのチーム「つなぎ隊」の取り組みが発表された。

「新人賞」は、初参加の金沢星稜大学 障がい学生支援チームが受賞した。情報保障の理解を求める話し合いやノートテイクスキル向上のための研修会などを発表した同大学に対し、今後の活動への期待が多く寄せられての受賞となった。

「プレゼンテーション賞」には、亜細亜大学 FD グループが選ばれた。日本手話や筆談、音声など、様々なコミュニケーション方法を使いながら、すべての参加者に伝わる発表となるよう気を配っている様子から受賞が決まった。

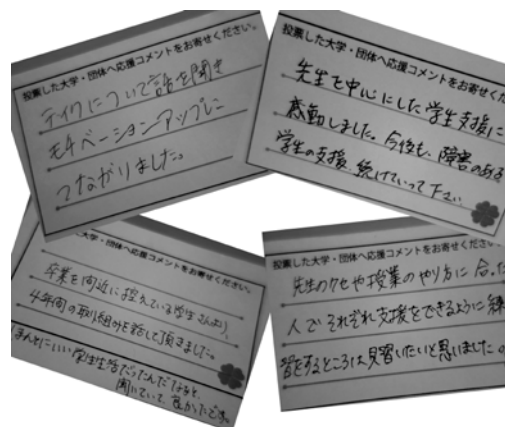


写真 寄せられた応援コメント

上記 5 大学のポスターは巻末に掲載しているほか、すべてのポスターは PEPNet-Japan のウェブサイト (<http://www.pepnet-j.org/>) に掲載している。

今回は地方開催のため、コンテストの参加大学・団体数も減少するのではないかという当初の危惧があったが、実際には例年とほぼ同数の参加があり、本コンテストの存在が全国に広く認知されていることがうかがえた。

また、今回は新たに 30 秒 PR の時間を設けた。これまで「時間が短く、すべてのブースを回って話を聞くことが難しい」との声が聞かれていたが、この時間を設けたことにより、僅かながらも参加者がすべての取り組みを見聞きする時間が確保できたのではないかと考える。

また、投票用紙に応援コメントの記入欄を設けたことも新たな試みであった。これにより、参加大学・団体に対するフィードバックが今までに増して可能となった。今回集まった応援コメントが、今後の活動の参考材料として活用されていくことを願う。

本コンテストは例年盛況であり、今回もアフタヌーンセッションの中で広いスペースを準備して実施した。しかしながら、当日は参加者とそれに対応する発表者が随所で話し込むことにより、他の企画や展示への動線を塞いでいる箇所も見受けられた。この改善に向けて、会場の規模と参加者の動線を意識したレイアウトを検討・実施したい。

あわせて、参加者や発表者がより充実感を得られる企画になるように、新たな取り組みを加えながら引き続き本コンテストを実施していきたい。

(報告者：筑波技術大学 五十嵐依子)



写真 表彰式の様子



## 「聴覚障害学生支援に関する機器展示」

本企画では、聴覚障害のある学生に対する情報保障やコミュニケーション支援に関する機器およびシステムの展示を行った。筑波技術大学の教員の開発による各システムの紹介のほか、コミュニケーション支援のためのシステム開発を行っている企業4社による展示も行われた。当日は、多くの参加者でブースが埋め尽くされ、システムの運用方法について開発者に熱心に質問したり、実際にデモンストレーションを見たり利用体験をして感想を話し合う様子が見られた。展示を行った企業担当者からは、支援に携わる大学教職員が最新の情報を持ち帰ろうと熱心に情報収集する様子が、非常に印象的だったとの感想も聞かれた。

当日紹介されたシステムと発表者は以下の通りである。

- ・筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター 小林正幸教授  
シースルーメガネ型リアルタイム字幕提示システム
- ・筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター 三好茂樹准教授  
スマートフォンを活用した「モバイル型遠隔情報保障システム」  
遠隔情報保障システム「T-TAC Caption」
- ・筑波技術大学産業技術学部 若月大輔准教授  
ウェブベース遠隔文字通訳システム「captiOnline」
- ・フォナック・ジャパン株式会社 (デジタルワイヤレス補聴システム Roger 他)
- ・株式会社アイセック・ジャパン (情報保障サービス e-ミミ)
- ・シャムロック・レコード株式会社 (UD トーク)
- ・株式会社富士通ソーシアルサイエンスラボトリ  
(聴覚障がい者参加型コミュニケーションツール「LiveTalk」)

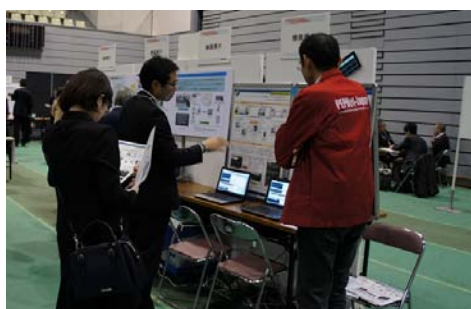


写真 開発者に質問する参加者

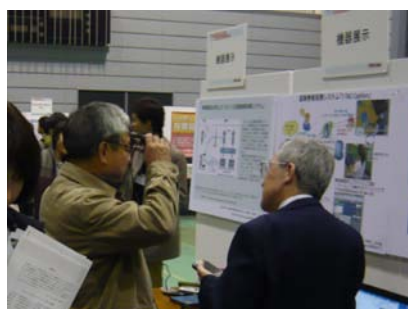


写真 機器の利用体験をする参加者



写真 企業による展示の様子

(報告者：筑波技術大学 中島亜紀子)

「九州・沖縄地区の大学における聴覚障害学生支援に関するパネル展示」および  
「PEPNet-Japan 活動紹介」、「PEPNet-Japan 連携大学・機関活動紹介」

今回のシンポジウムは初めて九州地区での開催となったことから、九州地区、沖縄地区で障害学生支援に取り組む大学の様子を全国の参加者に紹介するための展示スペースを設けた。九州地区から9大学、沖縄地区から3大学が展示に参加した（参加大学は以下一覧を参照）。

また、PEPNet-Japan の連携大学・機関が実施している聴覚障害学生支援の活動内容をパネルにまとめ、展示・紹介する「PEPNet-Japan 連携大学・機関活動紹介」のブースを設けた。今回は、連携大学・機関が特に力を入れている取り組みを紹介するための特設スペースを置き、宮城教育大学、大阪教育大学、愛媛大学が、独自のパネル展示で活動の様子を紹介したり、資料を配布したりした。

「PEPNet-Japan 活動紹介」のブースでは、これまで PEPNet-Japan が作成してきた成果物や、現在進めている事業の紹介パネルが展示され、参加者に活動の近況を知っていただくことができた。

■九州地区・沖縄地区の大学における聴覚障害学生支援に関するパネル展示 参加大学  
九州大学／九州産業大学／筑紫女学園大学／熊本大学／熊本学園大学／熊本保健科学大学／九州ルーテル学院大学／宮崎大学／長崎大学／沖縄国際大学／琉球大学／名桜大学  
（福岡教育大学／沖縄大学は、PEPNet-Japan 連携大学・機関活動紹介ブースに展示）

■PEPNet-Japan 連携大学・機関の活動紹介（特設）

・宮城教育大学

「音声認識技術を活用した授業コミュニケーション支援の実践 ～UD トークの運用事例～」

・大阪教育大学「学生主体活動の重要性～大阪教育大学の歩みと現状～」

・愛媛大学「愛媛大学松山大学連携事業 学生・教職員による障がい学生相互支援プログラム」

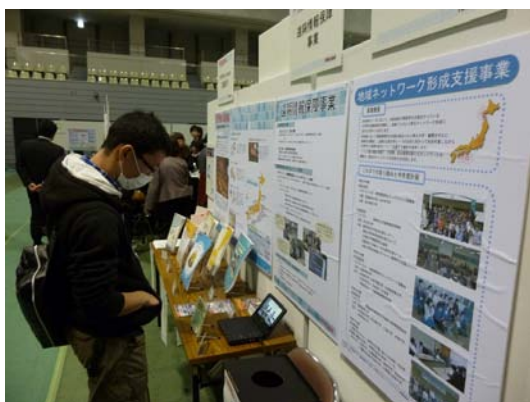


写真 PEPNet-Japan 活動紹介ブースの様子



写真 九州・沖縄地区および連携大学・機関紹介

（報告者：筑波技術大学 中島亜紀子）

## 「相談コーナー トーク＆トーク」

本企画では、参加者の方々が日ごろの支援業務や大学生活の中で抱えている個々の悩みや課題について、具体的な解決策を持ち帰っていただくため、聴覚障害学生支援の専門家や現役の支援担当職員等、支援の知識や経験が豊富な方と個別に相談ができる場を設けた。本シンポジウムで4回目の実施となり、今回は参加者の相談ニーズにより丁寧に応じることができるよう、受付を設けて相談したい内容や直面している課題を聞き取り、内容に応じて講師を紹介する方法を取り入れた。講師陣は、幅広い相談内容に対応できるよう、PEPNet-Japan 運営委員や聴覚障害のある大学教職員、障害学生支援を担当している教職員など様々な立場や専門性を有する17名に担当いただいた。

### 講師一覧

- ・新國 三千代（札幌学院大学／PEPNet-Japan 運営委員）
- ・高橋 明美（みやぎ DSC／PEPNet-Japan 運営委員）
- ・金澤 貴之（群馬大学／PEPNet-Japan 運営委員）
- ・倉谷 慶子（関東聴覚障害学生サポートセンター／PEPNet-Japan 運営委員）
- ・田中 啓行（関東聴覚障害学生サポートセンター）
- ・杉森 公一（金沢大学／PEPNet-Japan 運営委員）
- ・武田 真代子（同志社大学）
- ・田坂 祥子（同志社大学）
- ・平田 万貴（同志社大学）
- ・池谷 航介（大阪教育大学）
- ・井坂 行男（大阪教育大学／PEPNet-Japan 運営委員）
- ・小谷 佐智子（大阪教育大学）
- ・太田 琢磨（愛媛大学）
- ・加藤 哲則（愛媛大学／PEPNet-Japan 運営委員）
- ・石原 保志（筑波技術大学／PEPNet-Japan 運営委員長）
- ・佐藤 正幸（筑波技術大学／PEPNet-Japan 運営局員）
- ・中島 亜紀子（筑波技術大学／PEPNet-Japan 事務局員）

## 相談内容と相談者

相談者数 20 名（大学教員 5 名、大学職員 11 名、学生 1 名、その他 2 名）

相談件数 17 件（※相談 1 件につき複数の相談者で来場したケース有り）

主な内容：聴覚障害学生への支援体制の立ち上げについて

実習や実技を伴う専攻での情報保障支援について

大学における情報保障の支援全般について

高等学校における情報保障支援について

補聴システムについて

聴覚障害学生の留学について

コーナーを開設していた約 3 時間のあいだに 20 名の相談者が来場し、講師から丁寧な助言を受けていた。以下に、相談内容と対応例の一部を紹介する。



Q: 手話通訳者による情報保障を希望する学生がいるのですが。

【大学職員】

A: 大学の授業は時間数（コマ数）も多く内容も幅広いので、手話通訳者を確保する難しさがあります。地域の手話通訳派遣団体などと日頃から関係性を作っておくことが大切です。また、授業内容によっては、ノートを取りながら勉強する都合上、パソコンノートテイクが有効な場合もあり、授業に応じて支援方法を検討するとよいでしょう。



Q: 今、学内に障害学生支援の体制を作っています。委員会の設置や対応要領の作成を控えていますが、体制構築に向けてアドバイスをお願いします。

【大学職員】

A: 平成 28 年 4 月から障害者差別解消法が施行されます。ここで大学にとって対象となるのは障害のある学生に限らず、大学の施設を利用する地域の方も念頭に置く必要があります。学生支援の担当課だけでなく全学組織を巻き込んで、体制を作ることが大切です。教授会に合わせて FD を開催するのも、共通認識作りに役立ちます。





【聴覚障害学生】

Q: 将来、アメリカに留学して勉強したいと思っています。  
留学する方法や、アメリカの大学の様子を教えてください。

A: ギャローデット大学やロチェスター工科大学など、聴覚障害者が学ぶための環境を整備した大学があります。ただ、それ以外の大学で情報保障を活用して勉強する聴覚障害学生もたくさんいます。留学のための奨学金を得られる機会もあるので、勉強したい内容に合わせ、留学先や方法を考えてみてください。



【大学教員】

Q: 聴覚障害学生が在籍していますが、本人から支援を求める申し出が特にありません。情報保障が必要ではないかと思うのですが、どう対応すればいいのでしょうか。

A: まず学生本人が、自己のニーズを把握する必要があります。本人が今は何を必要としているのか、継続的に話し合いの場を持って確認し、見直しながら対応していきましょう。



今回は、来場者から相談の内容や大学の状況を聞き取った上で対応者を紹介し、場合によっては複数名の講師に対応していただくケースもあった。その結果、一つひとつの相談にじっくり回答されている様子が見られたほか、シンポジウム終了後も継続して相談できる関係性ができたケースも見られた。

シンポジウム全体としては、参加者のニーズや全国的な状況を踏まえてさまざまな企画を用意しているが、中でもこの「相談コーナー」は、参加者が抱える個別的な課題や困難を直接投げかけられる場として定着してきた。今後も、参加者一人ひとりが少しでも多く有益な情報や知識を各自の現場に持ち帰っていただけるよう、より効果的な運営方法を検討していきたい。

(報告者：筑波技術大学 中島亜紀子)

## 【ミニセミナー】

「大学における情報保障で音声認識技術を活用するには  
—効果と課題、導入のポイント—」

報告者：筑波技術大学 三好茂樹

### 企画趣旨

本セミナーでは、近年実用化が進んでいる音声認識の技術を活用した情報保障システムについて、基本的な知識をレクチャーする。システムの特徴、大学での導入事例や運用に当たっての留意点を、総合的な視点で解説する。

### 内容

#### 1. 音声認識技術とは

最近「音声認識」という言葉をよく耳にするようになり、皆さんも音声認識を使った情報保障にどれだけの効果があるものかという期待を抱いていると思う。

音声認識とは、人の音声をコンピュータに認識させて、話し言葉を文字に変換する技術のこと。パソコンやタブレット内で音声自動的に処理されて文字が提示されるが、リアルタイムと言っても少し間があいてから、文字が表示される。そしてこの文字変換技術は



写真 講演する筆者

100%正しいものではなく、誤字脱字がどうしても入ってくるのが現状と言える。

現在、音声認識には主に 2 つの仕組みがある。一つはコンピュータの中だけで処理されるもの、もう一つはクラウドサービスで処理、つまりインターネット上で音声データの文字変換の処理がされるものになる。よく、手元にある端末の能力が認識率を左右すると誤解されがちだが、コンピュータが大きいから処理能力が高いとか、タブレットが小さいから誤字脱字が多いというような問題ではない。

#### 2. 認識率と内容理解の関係

音声認識の結果が常に 100%正しいなら何の問題ないが、機械で認識するのでどうしてもエラーが発生する。認識率は、どのようなソフトウェアやアプリケーションを使うのか、また発話する健聴者がどのような声の特性を持っていてどんな話し方をするのかに関わっている。

最大では 90%程度まで認識できるとされているが、100%には達していない。日本語は同音異義語の割合が高いため、英語と比較すると認識率が低くなる傾向があり、コンピュータに登録されていない語が話された場合も、誤認識になる。



### 3. エラー（誤認識）を含んだ認識結果の例

たとえば成績の場合、90%台といえば評価としては A や A+ のハイレベルに相当するかもしれないが、音声認識での 90% は、読んでその内容を理解するにはなかなか厳しい状態になる。では、認識率 90% の文章とは実際にはどのようなものか。ここに認識率 80% と 90% のテキストを用意しているので、少し時間を取って読んでいただきたい（スライド提示）。

読んで頂いてわかる通り、80% のほうは、文字数は多くても意味が分からないものもある。90% では少しわかりやすくなるが、この程度と考えてほしい。

例えば、両方の例文に、「文法的なエラー」を「ボイラー」という誤変換が含まれていたが、これは漢字変換の誤りではなく音韻的な認識のエラーと言える。こうした誤認識は、聞こえる人、つまり音韻的な知識があれば正しい語を類推できるかもしれないが、難聴者が理解しやすい文であるかと考えると、字幕の精度は少なくとも 90% 以上は必要といえることができる。

### 4. 利用場面による 2 種類の活用方法

音声認識技術の使い方として、今は 2 種類の方法がある。

一つは「直接方式」で、話し手がタブレットやパソコンに直接声を認識させる方法。これは、少人数でのミーティングや 1 対 1 の対話場面では十分機能する。もし提示された文に誤字脱字が含まれていても、話し手本人がその場で修正できるので、コミュニケーションを成立させることができる。

一方、大学の授業のような場面では、話し手自身が表示文を修正するような配慮は難しいため、もう一つの方法である「リスピーク方式」が用いられるべきである。リスピーク方式では、先生が発話した内容をリスピーカーが聞きながら正しい発音で復唱し、コンピュータに認識をさせる。リスピーカーを置くことで比較的正しい字幕に変換されて出てくるが、その中にも誤字は含まれているので、それを修正者が修正した上で学生に提示する。この方法の特性として、上記の通り直接方式とは違い最低 2 人の人手が必要になる。また、発話から文字の出力まで 5~6 秒の遅延が出ており、現状ではパソコンノートテイクのほうが速いと言える。パソコンノートテイクでは速い場合、2~3 秒で字幕に表示できる。

使用場面で考えると、講義形式には向いているが、最近では大学の授業でも学生とのコミュニケーションが重視されており、対話が多い場面では音声認識の活用は困難かもしれない。リスピーク方式に伴う字幕の遅延を許容できるかどうかのポイントになると思われる。但し、論理的な展開を重要視するような大学院や専門課程の授業では、音声認識を活用して厳密な情報保障をすることで、聴覚障害学生から適切な反応を引き出すことができ、利用する意味があると言えるかもしれない。



#### 4. まとめ

アメリカでは、音声認識技術を使った情報保障が、すでに大学で導入されている。情報保障支援の先進国であるアメリカでも、効率的かつ効果的に字幕提示を行うために、リスピーカーを置き人手を使って、音声認識技術を活用している。日本国内の場合も、このような方式を経て、将来的に直接方式に向かう可能性が高いと思われる。現時点で、大学等の授業で用いる場合には、現在行われている主な情報保障手段、つまりパソコンによるノートテイクと比較し、音声認識を利用する利点は何であるかを見極めていくことが重要である。

さらに、技術の発展は日進月歩であり、「今はまだ実用的でない」と思っている、すぐに使えるようになることもある。数年後にも期待しつつ、ぜひ現在の技術の様子も知って、活用していただきたい。



## PEPNet-Japanシンポジウム ミニセミナー

### 大学における情報保障で 音声認識技術を活用するには

—効果と課題、導入のポイント—

国立大学法人  
筑波技術大学  
障害者高等教育研究支援センター  
三好茂樹

## 音声認識技術とは？

人間の音声をコンピュータに認識させて  
話し言葉を文字に変換する技術



## 現在の仕組みは？



## 音声認識技術の認識率と内容理解の関係

認識率（正しく字幕化できる割合）：

「利用するアプリ」と「発話する健聴者」との組み合わせによって

50%台～90%台 となり、まちまち！

【誤認識文章例】

## エラー（誤認識）を含んだ認識結果の例

一件、市販されている音声認識ソフトとパソコンの組み合わせで気軽に住んでいる。試してみると、場合によってはそこそこの字幕制度で提示できていると庁舎を感じる。松田の、話沖縄、字幕を見ると、あまりわかりにくさは関係ないため、しかし聴こえる者が考える事、音声認識による沈黙は若やしない。

音声を沖縄金額を見ることが、地獄の運用を見ることが、全く字幕の分かりやすさに対する以上異なる。特に選定の聴覚障害学生にとっては、後世に頼ったと石が困難であるため、5認識の最も意味の類推が聴こえる学生本当容易ではない。5意識が仮にほとんどなかったとしても、そもそも話し言葉をそのまま文字化した字幕は、分かりやすいものではない。話し言葉には書き言葉にはあまり見られないボイラーが多く含まれている。

80%

## エラー（誤認識）を含んだ認識結果の例

一件、市販されている音声認識ソフトとパソコンの組み合わせで気軽にできそうに見える。試してみると、場合によってはそこそこの字幕制度で提示できていると庁舎を感じる。松田の、話を聞きながら、字幕を見ると、あまりわかりにくさは関係ないため、しかし聴こえる者が考えるほど、音声認識による沈黙は分かりやすくない。

音声を聞きながら金額を見ることが、地獄の運用を見ることが、全く字幕の分かりやすさに対する印象が異なる。特に選定の聴覚障害学生にとっては、音声に頼った類推が困難であるため、5認識の最も意味の類推が聴こえる学生本当容易ではない。5認識が仮にほとんどなかったとしても、そもそも話し言葉をそのまま文字化した字幕は、分かりやすいものではない。話し言葉には書き言葉にはあまり見られないボイラーが多く含まれている。

90%

### エラー（誤認識）を含んだ認識結果の例

一見、市販されている音声認識ソフトとパソコンの組み合わせで気軽にできそうに見える。試してみると、場合によってはそこそこの字幕精度で提示できていると聴者は感じる。なぜなら、話を聞きながら、字幕を見ると、あまりわかりにくさは感じられないため、しかし聴こえる者が考えるほど、音声認識による字幕は分かりやすくない。

音声を聞きながら字幕を見ることと、字幕のみを見ることでは、全く字幕の分かりやすさに対する印象が異なる。特に先天の聴覚障害学生にとっては、音声に頼った類推が困難であるため、誤認識の元の意味の類推が聴こえる学生ほど容易ではない。誤認識が仮にほとんどなかったとしても、そもそも話し言葉をそのまま文字化した字幕は、分かりやすいものではない。話し言葉には書き言葉にはあまり見られない文法エラーが多く含まれている。

100%

### 利用場面による2種類の活用方法

認識率（正しく字幕化できる割合）：

「利用するアプリ」と「発話する健聴者」との組み合わせによって

50%台～90%台 となり、まちまち！

利用場面によって  
2種類の活用方法

直接方式

リスピーク方式

周囲の人たちの配慮やサポートで  
(間違いを指摘・直して貰いながら)

情報保障者の力で  
(高い精度が必要な場合！)

### 参考文献（2009年11月25日公開）



### 利用場面による2種類の活用方法

直接方式

こんにちは

音声認識

リスピーク方式

こんにちはあ～！

こんにちは

音声認識

聴取

発話

リスピーカー

修正者

ちょっと特殊な技能（聞きながら発話する）

### 直接方式

こんにちは

音声認識

本日展示されているシステムでも利用可能！

- ・UDトーク
- ・Live Talk

### リスピーク方式（の友だち）

こんにちはあ～！

発話

音声認識

認識率低下の危険性あり

修正者

本日展示されているシステムでも利用可能！

- ・UDトーク
- ・Live Talk

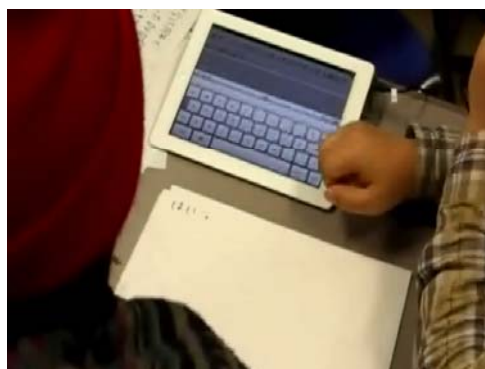
現状のパソコン通訳（連係入力）との比較を忘れずに！



筑波技術大学  
講師単独での音声認識の利用 講義



対話局面での利用例

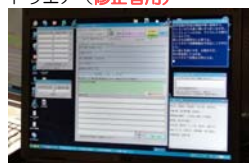
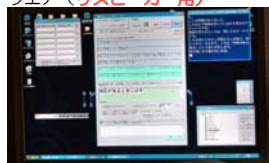


リスピーカー

修正者

SR-LAN.exe クライアントソフトウェア (リスピーカー用)

SR-LAN.exe クライアントソフトウェア (修正者用)



音声認識による情報保障実験

教室内的利用を想定した「マスクタイプのマイクロホンの使用」



音声認識技術を使った講義保障例 (アメリカ)



まとめ

- ・近年、音声認識技術は目覚ましく進化！
- ・一対一の会話や少人数でのミーティングにて、参加者の“配慮”があれば有効に機能する（直接方式）
- ・講義に対する情報保障では高い精度が要求されるので、人手を介する利用方法（リスピーク方式）がお勧め  
しかし、パソコン通訳との利点・欠点の比較も大切！
- ・これからも技術は進化を続けます！  
⇒現在の知識がすぐに古くなってしまうので時々機会を見つけてアップデートを！

たくさん質問し、体験してみてください！

## 【ミニセミナー】

### 「やってみよう！連係入力—基本的な設定と入力体験—」

報告者：筑波技術大学 宇都野康子

#### 企画趣旨

本セミナーでは、パソコンノートテイクで多く用いられる入力方法である「連係入力」に焦点を当て、そのやり方と必要なスキル、練習方法等について紹介する。あわせて、実際にパソコンを用いて参加者に入力をしてもらい、連係入力を体験することを目的とした。

#### 内容

##### 1. 連係入力の概要

###### (1) 連係入力とは？

連係入力とは、1文を2名で作りながら情報保障をする方法で、先に入力を始めた人の様子を見ながら、後から入力する人が区切りのよいところを想像してから入力する。

連係入力をスムーズに行うためには、入力者が「入力を始められそうな区切りのよい場所はどこか？」、「相手と自分が打った内容が、意味が分かるように繋がっているか？」など、常に連係相手の様子や入力された文を気に掛ける必要がある。その様子を確認するためには、常時パソコンのモニターに目を向けていられることが望ましく、それを可能にするためにはタッチタイピングのスキルが必要になる。

###### (2) 連係入力におけるルール

連係入力には基本となるルールがいくつかあり、たとえば、どちらが先に入力してどちらが後から入力するか、後から入力する人が入力を始めるタイミング、入力内容が重複したときにどちらが消すか、等が挙げられる。

これらには基本の考え方が存在するが、情報保障において、最も優先されることは、利用学生への字幕の提示であることを念頭に置き、基本の考えにとらわれすぎることなく、支援者同士が協力して連係入力に取り組んでほしい。

###### (3) 連係入力における注意点

連係入力では意識的に改行を行うことが重要になる。改行を加えることで、文が連続して表示されることを防ぎ、利用する聴覚障害学生にとって読みやすい文章表示になる。IPTalkでは入力内容の確定のほか、表示部に文章を上げる際や改行をする際にもEnterキーを利用する。Enterキーを小指で押せるようになると、入力時間の短縮が期待できる。

また、入力以外の操作などを行って、再び入力を始めるときには、入力部にカーソルが合っているかを必ず確認してほしい。カーソルが合っていないと、どれだけ打ち込んでもIPTalkに入力が反映されず、時間のロスや情報量の減少に繋がってしまう恐れがある。



## 2. 連係入力に向けた練習とスキルアップに向けて

相手の様子を見ながら自分の入力をする、という連係入力ならではの力を養う練習方法として、IPtalk を利用したチャットやしりとりなどがある。これらを行う際にも、自分の発言が終わるたびに改行を入れていくことで改行への意識付けを高めていくことができる。

また、実際の講義音声や模擬授業を題材にする際に、最初から普段通りの話速で練習しようとしても難しいことが多い。2〜3 文節ごとに話を止めたり話速を落としたりしながら、ゆっくりとした話速での連係入力に慣れてから、徐々に話速を上げたり話を止める時間を短くしていくように練習を重ねていくことが重要である。

タイピングスキルを向上させる方法として、配布資料で紹介している無料のソフトを利用する方も多い。そのほか、PEPNet-Japan がパソコンノートテイクに関する教材を複数作成しているので、それらも参考にしながらぜひ連係入力に取り組んでいただきたい。



写真 連係入力体験の様子  
(右端が筆者)

<参考資料>

日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

ワークショップ③

やってみよう！連係入力  
-基本的な設定と入力体験-



筑波技術大学  
障害者高等教育研究支援センター  
宇都野 康子

1

本日の流れ

連係入力について



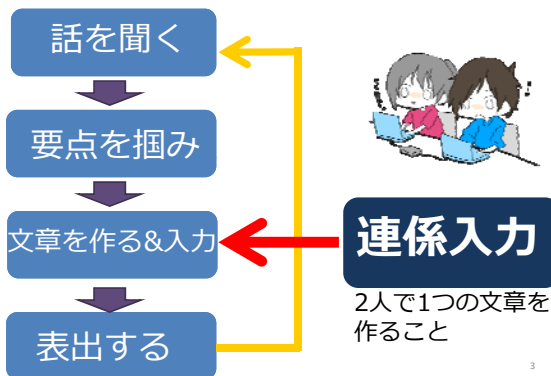
入力体験

- 連係入力の体験
- ウォーミングアップ
- 話を聞きながら連係入力をしてみよう

まとめ

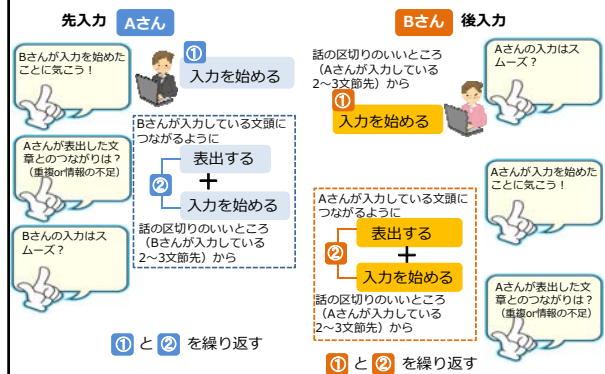
- 訂正・修正の方法
- 練習教材や練習方法の紹介

パソコンノートテイクと連係入力

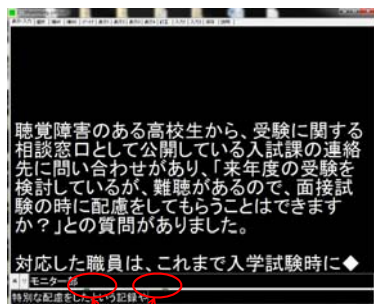


3

連係入力について



入力に入るタイミングは・・・



緑or黄緑のマークを目安に表出 (=Enter) しましょう

5

連係入力の基本ルール

●どちらが先に入力するか？

→基本：初心者が先に入力をし、経験者がフォローしながら入力する

●2人の入力文字が同じ（重複した）場合、どちらが削除するか？

→基本：同じ部分が文章の後半にあるほうが削除する

これはあくまでも基本です。

利用学生への字幕の提示（=情報保障）を優先に考えましょう。

**大切なのは「協力しながら1つの文章を作る」こと**



### ＜参考資料＞

ペアとチャットをしてみよう！

## ★チャットのルール

**1人の発言は1行使う！**

(Aさん) こんにちは。はじめまして。よろしくお願ひします。改行  
(Bさん): こちらこそ！ よろしくお願ひします。改行  
(Aさん): お昼ごはんは何を食べましたか？ 改行  
(Bさん): 私はサンドウィッチを食べました！ Aさんは何を食べましたか？ 改行

ペアと入力で  
[しりとり] をしてみよう！

### ★しりとりルール★

- 1、漢字・ひらがな・カタカナ…どれを使ってもOK！
- 2、1行に1つの単語で表示しましょう！
- 3、「ん」で終わらない！  
※もし「ん」で終わってしまったら、やりなおしてください

音声を聞きながら  
連係入力をしてみよう！



## 入力時のポイント

- ☒ 文章がきちんとつながっている
- ☒ 「、」「。」「」がきちんと入力されている
- ☒ 適度に改行が入り、見やすく整形されている
- ☒ 漢字の変換ミス等がなく、正確な情報が入力されている

## 訂正・修正の方法 (1)

F7キー

【訂正】 文を表示する

机を叩きます。(コンコンコン)いくつか叩きましたか。4回と答えればOK。そして、最後に曜日の理解。金曜日の次は何曜日ですか。水曜日と答えればOK。

★注意★  
初期設定では、「F7キー」の  
チェックは入っていません。

チェック

訂正タブ（左側のみ）

## 訂正・修正の方法 (2)

F9キ一

表出された最後の文節が表示部に戻る

F11 主一

表示されている最後の文字  
から1文字ずつ消える

机を叩きます。(コンコンコン)とい  
叩きましたか。4回と答えればOK。  
そして、最後が曜日の理解。金曜日の  
次は何曜日ですか。水曜日と

● 金曜日、西暦などはいずれかのい  
ふように、数字でなく、漢字でい  
う。再確認

① 再確認

② ①の答えは「コンコンコン」で  
OK。②の答えは「はい、叩きました」  
でOK。③の答えは「はい、叩きました」  
でOK。④の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑤の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑥の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑦の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑧の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑨の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑩の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑪の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑫の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑬の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑭の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑮の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑯の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑰の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑱の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑲の答えは「はい、叩きました」  
でOK。⑳の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉑の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉒の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉓の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉔の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉕の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉖の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉗の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉘の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉙の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉚の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉛の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉜の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉝の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉞の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㉟の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊱の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊲の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊳の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊴の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊵の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊶の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊷の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊸の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊹の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊺の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊻の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊼の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊽の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊾の答えは「はい、叩きました」  
でOK。㊿の答えは「はい、叩きました」  
でOK。

Delete

訂正タブ<sup>※</sup>（左側のみ）

## スキルアップのための練習方法

## タイピング練習：タイプウェル（フリーソフト）

フォルダを解凍したら、  
このファイルをクリック

READYボタンを押すかスペースキーを押すと練習が始まる

ここに表示されている文字を入力していく（スペースキーを忘れずに！）

<参考資料>

スキルアップのための練習方法

タイピング練習：寿司打  
(フリーソフト)



タイピング練習：e-typing  
(フリーソフト)



本日のまとめ（関係入力）

ペアが入力した文章と・・・

- ☐ 自分が入力した文章はつながっていましたか？
- ☐ 情報は漏れていませんでしたか？
- ☐ 重複した部分はありませんでしたか？
- ☐ 表出の逆転はありませんでしたか？

※ A→Bの順の文章をB→Aで表示してしまうこと

入力が遅れていく・・・

情報の抜けを防ぐためには・・・

省略できる言い回しは省いて、話に追いつく

文の区切りだけではなく、ペアの様子（タイプミスなど）にも注意する

表出するときの確認だけではなく、入力している最中もモニター部を確認する



## 【ミニセミナー】

「解説！就職に向けた準備—模擬面接を通して—」

報告者：筑波技術大学 石原保志

### 企画趣旨

聴覚障害学生に就職試験の模擬面接に挑戦していただき、その実践を通して就職準備の過程で直面する課題や、対策のポイントなどを解説する。

### 内容

#### 1. 模擬面接

初めに、就職準備を控えた聴覚障害学生（3年生）が、就職試験を想定した模擬面接に臨んだ。講師の石原と補佐の折笠（筑波技術大学聴覚障害系支援課）が面接官役を担当した。

（以下、会話はすべて音声にて行われた）

石原／まず自己紹介からお願いします。

学生／Aと申します。よろしくお願いします。

石原／あなたの専門は何ですか？

学生／教育について学んでいます。

石原／では所属は教育学部ですか？

学生／もう一度お願いします。

石原／あなたの所属は、教育学部ですか？

学生／教育学部で特別支援教育を専攻しています。

石原／ということは、免許は何の免許を？

学生／もう一度お願いします。

石原／教員免許は何を取るのですか？

学生／私の専攻では皆免許をとるので、特別支援教育と社会科を取る予定です。

折笠／なぜ社会科を選んだのですか？

学生／もう一度お願いします。

折笠／なぜ、社会科を選びましたか？

学生／特別支援を選んだのは、自分が中途難聴なので、中学の時に自分の障害のことを勉強して配慮してくれた先生にあこがれて、選びました。



写真 模擬面接の様子

#### 2. 振り返りと解説

##### 1) 学生の振り返り

口の形を読み取って話をつかもうと思ったが、「特別支援」など慣れている単語は読み取れたものの、慣れない言葉は2回繰り返してもらってやっと分かる状況だった。本番の面

接では、事前に配慮を希望して、質問を書いてもらったり、口形の読み取りができる距離での面接をお願いしたい。

## 2) 解説

口話で面接に臨もうとする聴覚障害学生は多いが、それではどうしてもすれ違いが生じる。Aさんのように口話で話していると、面接官は口の形を読み取れる人だと判断するが、実際には「もう一度お願いします」と3回お願いした。「書いてほしい」と事前に言うこともできたのではないかな。

集団面接では手話通訳を依頼できる場合があるが、個別面接では手話通訳がない場合がほとんどであるため、書くことが中心になる。口話や聴覚活用に自信がある人ほど遠慮する傾向があるが、そのことをあらかじめ知っておく必要がある。

## 3. 質疑応答

**参加者**／4月からは法律が施行され、面接の時に筆談や通訳をお願いすれば法律で認められることになるが、実際の企業側の印象はどうか。権利として要望していくのがよいと考えるか。

**石原**／改正障害者雇用促進法の厚生労働省の指針では、募集時、採用時の合理的配慮の提供について、本人から申し出があることが基本とされている。指針の第2段落に「事情を明らかにすること」とあるが、これは明らかに意思疎通ができない知的障害者に当てはまる内容と取れるので、聴覚障害者においては、まず本人の申し出が必要ということを押さえてほしい。その上で、企業が対応できるかが問題だが、ほとんどの企業は、改正障害者雇用促進法に含まれる障害者差別や合理的配慮という事柄に視点が向いていないのが現状である。どちらかというと、精神障害者が障害者としてカウントされるという変更点を重視し、そちらに着目している印象がある。これまで障害者を多く採用し配慮を講じてきた企業は別として、多くの企業は合理的配慮の提供についてまだ意識が薄いというのが現状と思われる。ただし、今後は徐々に浸透していくものと思っている。

**参加者（大学関係者）**／模擬面接を通して、聴覚障害学生が面接に臨む際の注意点を教えていただいたが、それ以外に、就職の面接に際して大学から聴覚障害学生に伝えておいた方がよい事柄はあるか？

**石原**／参考に配布した資料にもあるが、まず面接のときに、質問の内容が分からないまま答えることがないように、ということ、また質問を復唱した上で答えること、そして、合理的配慮の基盤は本人からの申し出であり、申し出には本人の意識と説明する力が必要ということ。具体的には、セルフアドボカシー（自分の障害を客観的に認識して、社会活動の参加に際し対等に参加するためにどのような配慮が必要かを自ら理解する能力）と、それに基づき自分の障害について説明する能力を培う必要



で、これらは体験を通して学ぶことが非常に重要と捉えている。さらに、他の聴覚障害学生の体験談などを聞く機会を設けることで、自分の経験を他者と共有することが可能になる。

**参加者（聴覚障害学生）**／今 3 年生で、周りから「インターンシップに参加したほうがいい」とよく言われるが、聞こえないことを企業側にどう伝えたら良いのかわからず躊躇してきた。次の春休みには参加してみたいと思うが、企業側にどう説明したらいいのか。

**石原**／障害について説明することへの不安がある、ということだが、たとえばアルバイトをしたり、大学外の人たちと一緒に何か役割を担って活動するような経験は、今までありましたか？

**参加者（聴覚障害学生）**／障害者の就労支援に関わる学生主体のグループに所属していて、社会人の先輩を招き、学生時代の経験や今の仕事の様子などを話してもらう活動等をしてきた。アルバイト先では、聞こえないことを理解してもらい、分からないときは筆談してもらっている。

**石原**／先輩の話聞くというのは、「間接的経験」を積めるということ。また、障害のことを知らない、あるいは理解がない人たちと一緒に働きながら、少しずつでも周囲の人を変えていくという経験は、必ず役に立って自信につながる。企業は障害の有無に関わらず能力のある人を採用したいと思っている。自分の障害についてしっかり説明する力があることを示せば、「この人は配慮さえあれば会社で活躍できる人材だ」と評価を得ることができる。これまでの経験を活かし、就職活動を進める中でその力を試してほしい。

#### 4. まとめ

4 月からスタートする法律は理念的な側面が強く、合理的配慮の提供に関して効果が出るまで時間がかかると思われる。しかし、5 年後になれば確実に、世の中は変化していると考えられる。聴覚障害のある学生にとっては、就職時の面接よりも就職した後のことが課題となるため、セルフアドボカシーを身につけ、紛争解決窓口などができた時にはそれも活用してほしい。

## 【ミニセミナー】

「補聴システムを使ってみよう！ーシステムの概要・導入事例・活用ポイントー」

報告者：愛媛大学 加藤哲則

筑波技術大学 佐藤正幸

### 企画趣旨

本セミナーでは、補聴器や人工内耳、そしてそれらをサポートする補聴システムの概要をレクチャーするとともに、高等教育機関での活用事例や活用の際の注意点を解説する。

なお、補聴援助システム（補聴システム：Assistive Listening Device）とは、補聴器・人工内耳の活用を効果的にし「きこえ」の環境を向上させるために併用するシステムと、視覚情報（光など）触覚情報（振動）に代替するシステムがある。ここで取り上げる FM（デジタルワイヤレス）補聴システムは、「きこえ」の環境を向上させるために併用するシステムにあたる。代替するシステムは振動式アラーム時計、フラッシュ利用の火災報知器などがこれにあたる。

本セミナーでは「補聴システム」という言葉を用いているが、FM 補聴システムを中心に取り上げているため、この表現とした。

### 内容

#### 1. 補聴システムとは（担当：加藤哲則）

##### （1）補聴器・人工内耳のしくみと限界

補聴器がもつ主な役割は、小さな音を増幅することと大きな音を大きく増幅させないことである。補聴器に内蔵されたマイクに音が入力され、増幅されてスピーカから出力されている。

補聴器には様々な形態があり、以前は箱形と呼ばれるタイプが主流であったが、現在の学生は、耳掛け型や耳穴型のタイプをよく利用している。

補聴器以外の補聴システムとして人工内耳がある。これは、マイクを通して入力された音声をスピーチプロセッサで電気信号に変換し、内耳の中の蝸牛に埋め込まれた電極に伝えることで、蝸牛内部の神経を直接的に刺激する。この刺激が脳に伝わることで、音として認識するシステムである。

補聴器や人工内耳はいずれも万能ではない。また、聴覚障害者のきこえには、聴きたい音（S）と聴きたくない音（N）の音量の差が大きな影響を及ぼす。そのため、補聴器や人工内耳の装用効果をより高くするためには、聴きたい音と聴きたくない音の比（SN 比）を良くして補聴器や人工内耳のマイクに届けることが重要となる。



写真 筆者（加藤）



## (2) 補聴援助システム

SN 比を良くして、補聴器や人工内耳を援助するシステムとして 4 つ紹介する。

### ①誘導コイルを利用した集団補聴システム

床に敷いた電線（ループ）がつくる磁場を通して補聴器に音を伝えるシステム。磁場が重なると混信するため、隣り合う部屋等で同時に使用する際には注意が必要である。

### ②赤外線補聴システム

マイクに入力された音が、赤外線によって受信機を通じて補聴器等へと送る仕組み。赤外線は障害物によって遮られるため、隣接する部屋で使用しても混信しない。

### ③FM 補聴援助システム

マイクに入力された音声を FM 電波やデジタルワイヤレス方式で受信機を通じて補聴器等に送る仕組み。近年多く用いられており、比較的距離があっても音を伝えることができること、人工内耳へも送ることができるなど、メリットが多い。

### ④サウンド・フィールド・システム

我が国では比較的新しい補聴援助システムで、マイクとスピーカで構成され、FM 電波やデジタルワイヤレス方式で使用する FM 補聴援助システムの一つである。最近では音の反射・減衰を抑える線音源スピーカが広まっている。

## 2. 補聴援助システムを使ってみよう 導入 活用事例編（担当：佐藤正幸）

### (1) 補聴援助システム利用の目的と選択基準

補聴器や人工内耳はマイクに入ったすべての音を増幅するため、必要のない雑音も増幅されてしまうことがある。そのような状況を回避するためには、聴きたい音声だけを拾って、FM 電波もしくはデジタルワイヤレス方式で補聴器や人工内耳に直接送ることがある。その際に補聴援助システムが効果を発揮する。

ここで注意したいのは、情報保障として補聴援助システムを利用する対象者は、聴力レベルだけでは一律で決まらないということである。軽度難聴や中等度難聴であっても、ノートテイク等の文字通訳の方がよいという学生もいる。学生の様子を見たり、本人からのニーズを聴いたりしながら補聴援助システムの利用を判断していかねばならない。また、補聴援助システムを使うかどうかを判断するにあたっては、その利用によってストレスなく情報を得られるかどうかのポイントの 1 つとなる。



写真 筆者（佐藤）

### (2) 補聴援助システムの活用事例と注意点

補聴システムが活用できると考えられる場面は多岐に渡る。過去には、教育実習におい



て、児童・生徒の発言内容を聴く際に本システムを利用した学生もいた。補聴器が音を拾える範囲は半径約 4m といわれているが、小学校などの教室は 25m ほどの奥行きがある。そのような場面では補聴器だけでなく、補聴援助システムを併用して補聴器に音を届けるような工夫が必要になる。マイクには様々な形や機能があるので、用途や目的に応じて使い分けることが重要である。

また、聴覚障害学生がエアロビクスを行う際に、低音域を明瞭にする通常のスピーカと高音域を明瞭にするサウンド・フィールド・システムを併用して音楽を流したという事例もある。

様々な特徴がある補聴援助システムだが、そのどれもが完全に音情報を保障するものではないということには留意してほしい。必要に応じて、聴覚障害学生に対して資料を事前に提供したり、教員や周囲の学生に使い方や必要な協力を説明したりしていくことも重要になる。また、学生のニーズによっては、ノートテイクを派遣して、補聴システムの活用と補助的なノートテイクを併用するなどの工夫も講じるなどの対応が必要になるだろう。



日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム  
ワークショップ 補聴システムを使ってみよう！

20 Dec 2015  
Fukuoka

## 補聴システムとは

愛媛大学 教育学部 特別支援教育講座  
加藤 哲 則  
Akinori KATO, Ph. D



Special Support Education Teacher Training Course, Faculty of Education, Ehime University

## 人工内耳

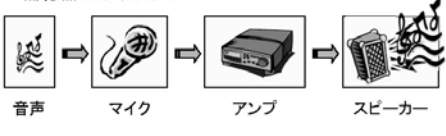
- 内耳の蝸牛に直接電極を埋め込む
- マイクで拾った音をスピーチプロセッサで電気信号に変換
- 電極から蝸牛内部の神経を直接刺激



4

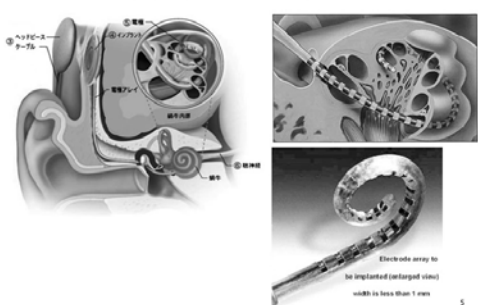
## 補聴器とは

- 補聴器とは、どんな機械？
  - さまざまな音を大きく増幅する機械
  - 大きな音を出さないようにする機械
- 補聴器のしくみは？



2

## 人工内耳インプラント



3

## 補聴器 形状による分類



3

## 補聴器・人工内耳は万能ではない

- 離れば……きこえにくくなる
- 周りが騒がしいときには……きこえにくくなる
- 聴きたい音(信号:S)と聴きたくない音(騒音:N)の比(SN比)が、装用者のきこえに影響を及ぼす
- 補聴器・人工内耳装用者の場合は、健聴者に比べてSN比の良い環境が必要

↓

■ 補聴器・人工内耳 + 補聴援助システム

5

PEPNet Japan 第11回シンポジウム  
補聴システムを使ってみよう！

19/Dec/2015  
Fukuoka

## 補聴援助システム (1)

- 誘導コイルを利用した集団補聴システム
  - 床にループと呼ばれる電線を敷いて電磁場を作って、補聴器の誘導コイルへ音を伝搬
  - 隣接する部屋で使用すると干渉が起こりやすい
- 赤外線補聴システム
  - マイクと受信機間を赤外線を使って音声を伝搬
  - 障害物があると伝搬しないので、隣接する部屋での使用でも相互干渉しない
  - 屋外での使用が出来ない

7

## 最近のサウンド・フィールド・システム

P社 DSFシステム

- スピーカ: Digi Master 5000
  - コーン型ユニットを12個縦配列した線音源スピーカ
  - スタンドによる床置きと壁掛けが可能
  - スピーカー1台で100㎡対応
  - 外部入力端子付
  - ファームウェアの更新可能
  - FM/2.4GHz帯デジタル無線方式に対応



10

## 補聴援助システム (2)

- FM補聴援助システム
  - 送信マイクと受信機で構成
  - マイクと受信機間をFM電波で伝搬する
  - 伝搬距離は30～50m
  - 周囲の雑音や反響・残響の影響を軽減
  - 人工内耳も使用可能
  - 2.4GHz帯のデジタル無線方式も使用



8

## 補聴援助システム (3)

サウンド・フィールド・システム

- ワイヤレスマイクとスピーカで、SN比を改善



9



## 補聴システムを使ってみよう 導入 活用事例編

筑波技術大学  
障害者高等教育研究支援センター  
佐藤 正幸

周りがうるさいとよくわからない 気がつかない



うるさいところでは  
よくきこえない。

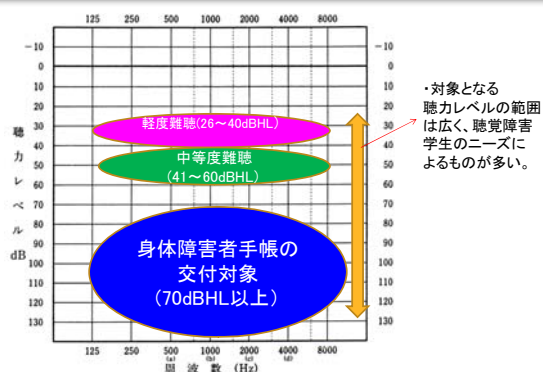
1対1だと、よくわかるように  
みえるけれども……？！

きっかけは？

- 講義中、先生の音声が届き取れない……
- グループディスカッションに参加できない……

など。

対象となる聴力レベルは？



活用にあたってのポイント

- 機器に関する情報提供
- 活用することによって本人にメリットがあるか
  - a. 使い易いか？
  - b. 利用することでストレスなく情報が入るか？
- 様々な場面での試用

## 考えられる活用場面

- 少人数でのグループディスカッション
- 大講義室での講義受講(講義室にある音響システムに 補聴システムの送信機を接続する。)
- 教育実習での授業、打ち合わせなど
- インターンシップでの活用

## デジタルワイヤレス FM補聴システムの活用例



教育実習

## 教育実習での活用体験 Mさん

### Q教育実習中、どのような場面で利用したか。

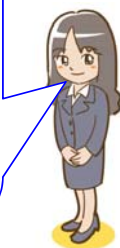
授業中生徒の発言を聴いたり拾ったりする時は生徒にロジャーペンを持ってもらったり、向けたりしました。授業以外でも朝や帰りの集いなどでは、他のクラスの生徒や実習生にもマイクを持ってもらいました。

### Q何故、必要と感じたか。

遠くにいる生徒の声を拾うのは難しく、また近くでも確実に聞き取れる訳ではないため、ロジャーペンが必要だと感じました。

### Qどのような効果があったか。

はっきり聞き取ることができました。またロジャーペンを使うことで、先生や生徒にも私が聴覚障害を持っているという認識を少なからず持つてもらえたのではないかと思います。



## 教育実習での活用体験 Iさん

### Q教育実習中、どのような場面で利用したか。

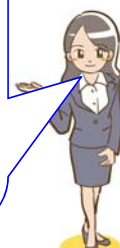
職員朝礼、検討会、担任の先生との打ち合わせ

### Q何故、必要と感じたか。

教育実習を行っていく上で必要な情報がたくさんあり聴きたいと感じました。インスパイロはマイクの位置を調整したり首にかけたりと装着に時間がかかりますが、ロジャーペンは持つだけなのでたくさんの先生がランダムに話す環境でも活用できるのではないかと感じました。

### Qどのような効果があったか。

ロジャーペンを回すだけでなく他の先生方が抵抗なく装着してくれました。また、洋服にひっかけることもできるので手話をしながら話してくれる先生からはインスパイロ同様手話も音声も受け取ることができました。



## 教育実習での活用体験 Aさん

### Q教育実習中、どのような場面で利用したか。

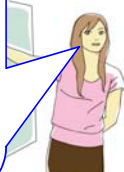
全体への連絡の際、説明や話をする先生にロジャーペンを渡して話してもらいました。

### Q何故、必要と感じたか。

軽く、セッティング?(胸元のポケットに入れるのみで準備完了)&FMマイクのように途中で外れたりしないのが早くでき、使い易いので、必要と感じました。

### Qどのような効果があったか。

FMマイクと比べ、よりクリアに声を聞けたと思います。



## DSFシステムの活用例



健康・スポーツ科目におけるフィットネス  
DSFによる高音域の聴覚補償



### 活用支援にあたって留意して頂きたいこと

- FMシステム、デジタルワイヤレスシステムは、完全ではないこと。
- 必要に応じて、資料の事前提供
- 活用にあたって、活用方法、協力の周知を図ること。
  - 例えば、発言が同時にならないようにする。
  - 発言の際は、名前を言うこと。
- 場合によっては補助的にノートテイク支援を。

ありがとうございました。  
Greatful Thanks !

## 【分科会1】

基礎講座 聴覚障害学生支援再入門—合理的配慮の考え方にもとづいて—

報告者：筑波技術大学 磯田恭子

### 企画趣旨

高等教育機関に進学する障害学生は年々増加している状況であり、受け入れる大学側も障害学生が障害のない学生と同等の学びが得られるよう環境整備に取り組んでいる。障害学生への支援担当部署を設置する大学も増える中、平成28年4月からはこれまでの大学独自のサービスとしてではなく、障害者差別解消法に基づき国公立大学は法的義務として、私立大学は努力義務として合理的配慮の提供が求められることとなる。このことにより、支援体制が十分でない大学においても、障害学生からの申し出に応じた建設的対話を経て支援内容の決定・支援提供が求められることとなる。

この中で聴覚障害学生の修学支援においては、講義中の音声情報を文字情報として伝える情報保障支援が中心となり、支援を担う人材も定常的に確保・養成することが求められる。しかしながら、支援を必要とする聴覚障害学生を初めて受け入れる大学や、聴覚障害学生の在籍が途絶えている大学など、支援ノウハウが十分に蓄積されていない大学も少なくない。

そこで、聴覚障害学生支援に求められる支援への姿勢・大学に求められる対応等について、3大学の事例を元に改めて確認をするとともに、参加者とのディスカッションにより今後求められる事は何かを考えて行くべく、本分科会を企画した。

### 内容

最初に桑原斉氏（東京大学バリアフリー支援室 准教授、精神科医）より、「合理的配慮提供に関する考え方」をテーマに東京大学での事例を元に全学的な支援体制ならびに合理的配慮をどのように考えていくべきかについてご報告を頂いた。

まず、東京大学では合理的配慮について以下の3つの点を整理して運用している。

1. 特定の場合において必要とされること
2. 適当であること
3. 過度の負担を課さないこと

障害者権利条約の中では不均衡についても書かれているが、これは過度な負担とあわせた検討が求められており、また合理的配慮の提供と不当な差別的取り扱いとは、実際には一体運用しないと差別を防止することができないものである。差別には大きく分けて（1）直接差別（2）関連差別（3）間接差別（4）合理的配慮の不提供、の4つがある。間接差別の禁止は環境整備にあたるところで、今の障害者差別解消



写真 桑原氏



法の中では扱いが曖昧になっている。関連差別については、障害によりある種の困難があり、その結果として異なる取り扱いをせざるを得ないというケースの場合に、「不当な差別的な取り扱いの正当な理由」がやむを得ず成立するということがある。具体的には、第三者の権利利益を侵害する場合が想定されよう。精神疾患を有する学生で試験中にも声が出てしまうことで、試験に集中できなくなる学生がいるなど、周囲の学生に何らかの影響があることが明らかである時に、他の学生と同じ教室で試験を受けても良いのか？ということで、正当な扱いとして異なる取り扱いをすることがあり得よう。合理的配慮の運用自体を考えたときには、これらを一体として運用しなければならない。

合理的配慮は結構シンプルなものだと思っており、相手が誰かなどという話ではなく、教育・研究等大学が事業として提供しているものは全てが対象となるため、大学がやっていることかどうかで区別すべきことだろう。そのため、授業に関する合理的配慮は当然提供しなければならない、意思表示があった上で必要性和適当性と過度の負担を考えて、周囲等への権利利益の侵害が特にない場合に配慮が提供され、不利のない状況で活動参加がなされるというプロセスがインタラクティブに行われることが、相互理解の本質であると考えている。

この合理的配慮を大学でいかに実践していくのか。まず必要性については、「特定の障害及び、特定の状況のために支障が生じており、特定の配慮により支障の改善が想定されること」が求められている。この「特定の障害」には **impairment**（機能障害）と **disability**（能力障害）の2つの側面が含まれている。個々により制限のかかる領域は異なってくることを踏まえて、どのような部分がバリアなのかを大学側は検討することになる。例えば、手話を使用する聴覚障害学生に対して授業に手話がついていないことがバリアであるのなら手話通訳をつけよう、というのが「必要性」という考え方。この必要性を障害学生本人が全て説明することは難しいため、障害についての専門知識がある者が間に入り、誰にでも理解されるように必要性の確認をする作業をしなければならない。「必要性」を考える時に、**needs** と **wants** の切り分けが必要である。**needs** については、必要性を正しく確認するための過程であり、そもそもそこを交渉しないという考え方はそぐわない。異なった配慮でニーズを満たせる場合に、大学側にかかる負担が異なっている場面においては、**wants** という形で検討していくための交渉が考えられることになろう。適当であるという要件に関しては、教育という側面に関して判断をしないといけないため、授業担当の個々の教員への確認が求められる。

過度の負担ということに関しては、これは東京大学として本当に可能かどうかという話になる。費用面で解決可能な問題はある程度対応できるが、発達障害の学生への配慮などは教員に対して結構負担をかけることが多いため、その労務が教員にとってどのくらい過度の負担になっているのかということは、教員側が考えなければいけない事である。その他に権利利益の侵害については、非常に慎重にやらなくてはならない事である。教員側が「ちょっと迷惑だからダメ」という感じだと、それは逆に障害のある方に対する権利侵害

になってしまう。今の時点ではこの部分についての明確なコンセンサスが学内にないため、個別に考えていかなければならない。

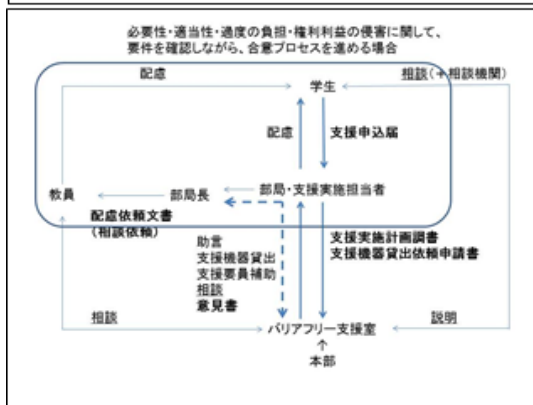
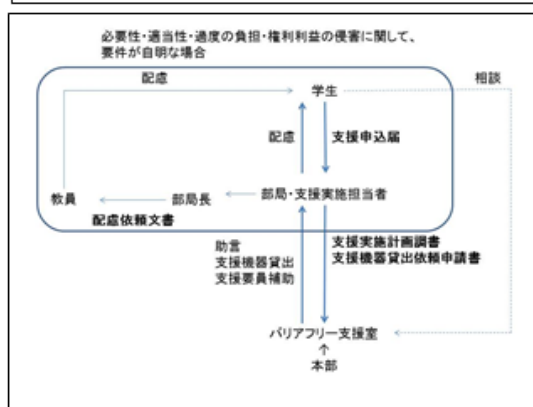
次に支援体制について。東京大学では支援の三角形という相談体制を採用している。財政措置については本部が担当し、人的な支援に関しては部局・各学部が担い、必要なノウハウをバリアフリー支援室が提供するというシステムになっている。身体障害学生への支援については、部局の支援実施担当者と担当教員が相談をすることで理解が得られて、部局内での対応で完結していることが多い。発達障害や精神障害については、教員と学生本人が交渉をすることがベストではあるが、必要性和学術的要件それぞれの確認が必要となるため、学生と支援室が面談をした後に、教員に対しての学術的要件の確認をバリアフリー支援室が行う、という仕組みが必要になる。さらにそれが部局にとっても負担になっていないかを、支援室が部局と相談をする。これらの一連の相談の仲介役として、支援室が入る仕組みになっている。こうしたプロセスを経ないで必要性和学術的要件の判断を進めていたら、合理的配慮は曖昧でいいのだ、と思われてしまうだろう。しかしながら、このプロセスを一つひとつの授業や試験でコツコツとやっていけば、ある程度明確にはできると考えている。

実際に進めていく上での課題としては、東京大学ではこれまで何となく困らずに出来てきた学生も多く、自分の障害のことやニーズをあまり理解せずとも、大学側がいろいろと配慮をしていくことがあるが、それでは社会に出た後は厳しいだろう。学生には意思表明をするのは法律に基づいたプロセスであるということ、正しく必要性を伝えるための専門的な知識を持って欲しいと考えている。

学術的要件が適当かどうかの問題は教員の任意になる、という点は課題があるのではないのか。現状では裁判をしても教員が学術的要件であると主張すれば勝ってしまう仕組みになっている。過度の負担ということに関しては、全学的に負担を共有し、過度じゃない範囲で資源を部局に配分するシステムが必要であると考えている。人的支援については、

## 相談体制

- ・本部
  - －バリアフリー支援担当理事
- ・バリアフリー支援室
  - ・バリアフリー支援室長
  - ・本郷支所長、駒場支所長
  - ・バリアフリー担当総長補佐
  - ・バリアフリー支援室員
  - ・バリアフリー支援室専任職員(教育・学生支援部)・教員
- ・部局(34)
  - －支援実施担当者(職員・教員)



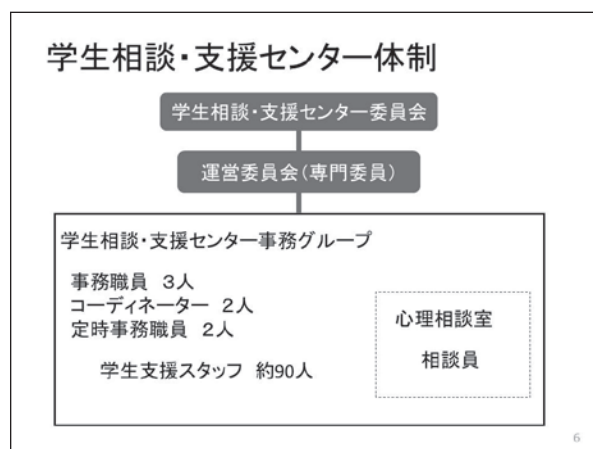
桑原氏当日資料より引用(相談体制)

例えばパソコンノートテイクを担う学生は全学で共有するシステムができているが、別室試験の試験監督などの人的負担を全学でカバーする仕組みがないのが、本学でのネックになっている部分である。過度の負担・権利利益の侵害も含めて、今後判例が定めていくことになり、本学では紛争の調停に関するバックアップシステム、第三者委員会を構築している。全学的な検討プロセスを持たずに部局の中で過度の負担だと判断し主張してしまうと、訴訟が起きたときにはコンプライアンス違反となってしまうためである。

最後にイコールアクセスについて。合理的配慮は、活動参加を最適化するために配慮するという仕組みなので当然実施する。けれども実際には活動参加の能力（例：手話ができない人ができるようになる）が向上することで活動参加は広がる。そのような能力をスキルアップするためのトレーニングも本当は必要だと考えているが、この部分は合理的配慮が担うのではないことを明確に切り分けられないと、合理的配慮の概念自体が曖昧になってしまう。本当にイコールアクセスを考えるのであれば、このトレーニングというパートもどこかが担う余地があるのではないだろうか。このように、同じ **impairment** があり、能力向上を含めた包括的なシステムでイコールアクセスを検討したい、というのを次のステップとして考えている。

次に藤原隆宏氏（関西大学学生相談・支援センター コーディネーター）より、「聴覚障がい学生の主体形成を支援する支援—関西大学の実践から—」をテーマにご報告を頂いた。

まず学内体制については、3年前から学生相談・支援センター（以下、センター）が学生への相談・支援を担っている。このセンターは総合相談と身体障害および発達障害を含む精神障害の学生への修学支援の2つの役割を持っている。カウンセリングは同センター内の心理相談室が担っており、最初の面談の時から修学支援担当者も同席することで、その後も円滑な支援に繋がることもある。障害学生支援の一番のポイントは最初の面談にあると思っている。支援のニーズがある場合には、まずは学部の教務担当者とセンター担当者が同席して面談をし、必要な支援についてセンターの名前で学部に伝える。その後学部から授業担任教員にサポート依頼や配慮依頼をする、という流れで支援を行っている。並行してセンターでは支援スタッフの育成および調整・派遣を進めている。本学の聴覚障害学生の多くは普通高校出身のため、高校できちんと情報保障を受けてきていないという印象を持っている。最初の面談にニーズの表明がない場合でも、何かあればいつでも言うて良いのだと明確に伝えておくことが大切である。特に、支援は不要と言っているのは、これまで支援の



藤原氏当日資料より引用（支援センター体制）

利用経験がないのか、本当に支援がなくても大丈夫なのかというあたりを、支援者側が見極めることが必要であり、最初の面談で丁寧に時間をとり、じっくり話を聞くことで、信頼関係が構築できればその後の相談や支援はスムーズに進むものと思っている。

支援が始まってからのモニタリングを本学では非常に大事にしている。支援者のマッチングをして終わりではなく、機会を見つけてできるだけ授業前後に教室に顔を見に行く機会をつくるようにしている。普段はわざわざセンターに相談しないようなことも、顔を見たことで伝えてくれることも多くあり、結果的に支援の質を高めることにつながったりすることも多いように思う。また、教室に行くことで周りの学生の雰囲気なども感じられるため、その意味でもモニタリングは大切だと思っている。

その他には、振り返りをきちんとすることが大事であろう。聴覚障害学生との個別の面談を実施しているが、その際に授業に入っている支援学生のことも教えてもらっている。それはスタッフを評価することが目的ではなく、良い支援方法についての意見を聞き支援学生全体にフィードバックすることを目的にしている。その他学生にアンケートを実施したり、学期末の懇談会で意見交換をして振り返りを行っている。

こうしたコーディネートの際に心掛けていることについて。  
1つ目が、聴覚障害学生自身が意思の表明をするのを待つという姿勢。障害者差別解消法でもそうだが、言ってこなければ何もなくてもいい、という理解にとられると困る。意思表明をしたらこちらはすぐにその対応ができる準備はできていますよ、という「積極的な待ち」の姿勢で意思の表明をしてもらうことを待つことが必要だと思っている。2つ目は、意思が表明しやすい環境をつくること。これらは一体のものと考えている。高校まではなんとなく授業を理解してきたような気になっており、実は授業が始まってみると十分情報保障がされていないこともある。ところが本人があまりそのことに気づいていないことがある。そうしたときに、できるだけ機会を見てグループワークはどうしているの？語学の授業は？など具体的な場面を挙げながら話を聞くようにしている。実は十分理解できていなかったのだと、本人が気づくようなサポートをしながら、いつで相談をしやすい環境を作っておくことも必要だと思う。



写真 藤原氏

3つ目が、聴覚障害学生に選択を委ねる、ということ。例を挙げると、パソコンノートテイクを使うかどうかすごく悩んでいた学生が、すでにパソコンノートテイクを利用していた学生に話を聞き、その後実際に授業の教室へ行ってパソコンノートテイクの様子を見て、その上で自分もパソコンノートテイクを利用したいと意思表明してくれたケースがある。この過程でコーディネーターは何をしたかというと、すでにパソコンノートテイクを利用していた学生と話をする場を作ったことと、授業の見学の依頼を先生にしたことぐらいである。パソコンノートテイクにするかどうかを決めたのは本人である。本人がどう決めるのかを支えることが必要だと思っている。4つ目、5つ目は、困ったことがあった



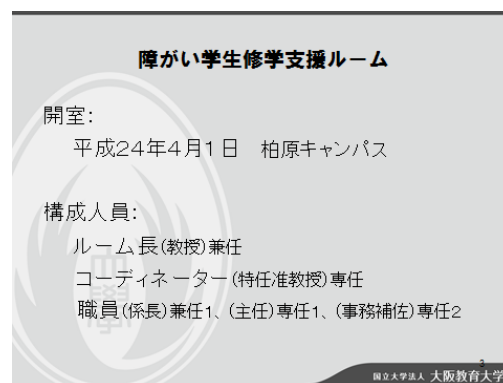
ら当事者に聞いて相談すること。支援学生から手書きノートテイクで授業を開始してみたけれど、情報量が多いのでパソコンノートテイクのほうがいいのではないかと相談があった時に、利用学生に対してその話を返していく、そういう丁寧なやりとりが必要だと思っている。本学は学内支援組織が先に出来たために、学生がボランティアな気持ちの中で、支援の仕組みを作り上げてきた歴史を有していないことが弱みだと思っている。なので、利用学生や支援学生に相談して返していくことで、当事者性のような意識を持ってもらいたいと思いながらやっている。

最後に聴覚障害学生の声をも2つ資料に載せている。この2人に共通するのは、修学支援の制度を利用することによって「周りの人に支えてもらってもいいのだ」ということを自分の中に獲得していったこと。支援制度を使うことの第一の目的は授業の保障をできることではあるが、こうしたプロセスの中で学生自身が周囲の人に依頼をしていくことも、特別なことではなく「そうしていいんだ」と実感してもらえたことが非常に大きいと思っている。

続いて小谷佐智子氏（大阪教育大学学生サービス課学生支援係 障がい学生修学支援ルーム 職員）より、「共に気持ちよく学び合うルームをめざして」をテーマに、支援学生の活動をどのように盛り上げているのかをお話頂いた。

学内支援体制は、障がい学生修学支援ルームが平成24年4月1日に開室した。常駐の職員は4名おり、事務方の職員と、コーディネーターは任期付きの教員という形で構成され、ルーム長を含め教職員がチーム一丸となって業務を進めている。日々の支援の調整や謝金の処理は事務方が担い、判断が必要な事柄や新しい取り組みを始める時にはコーディネーターを中心に進めるという役割分担がされている。学内の職員の場合には異動があり、障害者支援の知識がないまま配属される可能性があることは課題かもしれないが、常駐の職員がいることで大学の事務組織とダイレクトにつながっており、予算面などでスムーズに運営できている所もある。支援ルームの事務室の前には、20名位の学生が自由に集まれる交流スペースがあり、学生の居場所として大切な場所となっている。

支援ルームは「共に気持ちよく学び合う活動」の考えのもと、活動を進めている。教員養成大学で特別支援教育講座があるため、以前から聴覚障害のある学生が毎年何人かは在籍していた。支援ルームが開室するまでは謝金は教務課から支払われていたが、学生サークルがコーディネートも担いノートテイクによる支援をしていたことから、学生の主体的な活動という伝統が下地にあったといえる。半面、学生サークル中心の活動から大学組織の運営に移行する面での難しさもあった。



小谷氏当日資料より引用（支援ルーム体制）

支援学生への研修方法については、基礎研修は障害者支援入門の授業動画を各自見て学ぶ研修を行い、その次に実際に体験をする研修を行うという流れになっている。研修を経て支援学生になった後も、前後期の最初のガイダンスは全員受講を課している。

支援学生主体の行事は色々と実施している。具体的には、やる気のある学生がやりたい分野のチームに入って活動をする学生スタッフ制度を設けている。学生代表は2年生の後期から1年間担うことを基本としている。利用学生にもリーダーを1名選出してもらい、月に一度のリーダー会議に参加してもらっている。学生スタッフ活動も支援活動の一環として位置付けており、成果物作成や研修会講師には可能な限り謝金を支払っている。代表的なものは新人研修であり、一緒に支援する仲間を育成するということを念頭において、学生スタッフに研修を構成してもらっている。学生スタッフも当然学業が優先であるが、やりたい学生には活躍の場を提供しようということで、企画を発案した人に主に進めてもらっている。こうした活動は義務にしないことが大切であると考えている。

実際の企画立案の例を紹介すると、手話の研修スタッフから研修会をしたいと考えており、指導に協力してくれる学生の人数は多いけれども授業の空き時間がなく、皆が集まって行うのは難しい、かといって昼休みだけだと時間が足りないという相談があった。支援ルーム職員と話をする中で、全員が集まれないのなら個別にやったらいいのでは、というアイデアが出てきた。職員から1対1の指導だったら時間的にも調整できるし個人のレベルに合わせた勉強ができるのではと助言をしたところ、さらに学生からのアイデアで、ペアごとに手話スキルが伸びた場合のご褒美があったら、よりやる気が出るのではという話になった。それで設けたのが、「手話 wonderful（しゅわんだふる）特待生制度」である。くじ引きで指導のペアを作り、3ヶ月間指導を行った後にもう1度ペアをかえて指導する、という取り組みを半年間実施した。最後にはそれぞれのペアでプレゼンをし、皆で投票をして、優秀ペアの表彰を行った。

この取り組みの結果、学生同士で話をする機会が増えたとか、先生役には聴覚障害のある学生もいたので支援学生・利用学生共に支援ルームに足を運びやすくなったようだ。一番大きかったことは、いつも支援をされている利用学生が先生役になることで、「ありがとう」と言われる立場になったこと。このことも支援ルームの「共に気持ちよく学び合う活動」に繋がったと思う。このように学生主体の企画が生まれてくる。

支援活動の教育的効果ということで、教員としての素養の充実が挙げられよう。インクルーシブ教育に対応できる教員、支援学生・利用学生ともにお互いの個性や、個々の求めるものがあることを認め合い、人権感覚を身に着けることに繋がっていると考えている。さらに活動証明書の発行や、広島大学を中心に進めているアクセシビリティリーダー育成プログラム（[http://www.achu.hiroshima-u.ac.jp/?page\\_id=379](http://www.achu.hiroshima-u.ac.jp/?page_id=379)）への参加も行っている。こうした学生スタッフ活動を通じて、自分の意見で何かをやり遂げるには、教職員との調整・仲間の協力・資料作成・プレゼン能力など、色々なことを経ることになる。それが就職活動の中で評価されたのではないかと話していた学生もいる。



障害者差別解消法施行後は、学生のボランティアに頼る時代ではなくなっていく。法的義務として大学の進めるべき合理的配慮・学生支援は粛々とやっていくことだが、それにプラスするものとして、学生の主体的な活動を本学では位置付けている。その活動に学生の資質向上を促進したり、楽しさ・やりがいをプラスすることで、大学の支援と学生の主体的な活動が協力・連携することで、相乗効果として良くなっていくものだと思っている。このような活動は学内の支援だけではなく、学外や地域で支援できるような方向性も持っているのではないだろうか。



写真 小谷氏

最後に活動が続けて行く中で日々笑いがあればいいと思っている。また、学生の育成には時間と手間がかかる。支援ルーム前の交流スペースという居場所があることが利用学生・支援学生両方にとって大切で、ここで別の専攻の友人などのつながりが生まれ、活発な活動につながっている。また、学生はアイデアの宝庫で我々も学ぶことが非常に多いし、褒めることで自信がついて伸びていくくれる。活動へのアイデアが出てきた時には、限られた時間・設備・金額・制約の中で活動することは重要だということを話している。実現できない場合は、どうしてできないのかの理由を説明するようにしている。

全国の障害のある学生支援の場が、合理的配慮というものにがんじがらめにならず、楽しそうなどころだなと思われたり、自分も一緒に活動したいと言われる場所になることを期待している。

各講師からの事例報告の後は、参加者との質疑応答を行った。その一部を紹介したい。

**質問**／危険物を取り扱う授業をレポートで代替えすることは、ダブルスタンダードではないのか。

**桑原**／ダブルスタンダードという言葉の使い方の問題にもなる。色々なやり方があるという意味では、ダブルスタンダードというやり方があっても構わないと思う。その危険物を誰かほかの人が取り扱うことで実験が遂行できればそれで構わないし、レポートで実験と同等の学術的要件を満たせば、それで構わない。2つのやり方があることは当然許容すべきであり、その中で配慮を選択していくという活動になる。ダブルスタンダードで良いのか良くないのかということは、要は学術的要件の本質を満たしているかないかということで判断すべきこと。その単位を得るためには実験で危険物を取り扱うこと自体が学術的要件であると、そのように教員が明確に言うのであれば、それは確かに本当の意味でのダブルスタンダードになるので、レポートへの代替えということとはできないと思う。ただし、実際に大学の授業で危険物を取り扱うこと自体が学術的要件の本質であるという場面は、そんなには多くはないと思うので、教員が自信を持って言えるのかが問題かと思う。

教員の中には、特別な配慮はほかの学生への不公平じゃないかとおっしゃる方もいるが、

それに対して教員からの理解・協力を得るために押さえておくべきポイントは2つある。

1つは、法律を説明するというプロセスで、直接会って説明しなければならないと思っている。現在学内で対応要領を作っているが、非常にシンプルにしている。対応要領を教員に示すことで、「特別な配慮が必要だということが大学でも認められている」ということを、不公平ではなく法律に沿った対応なのだというを教員に理解してもらうことが必要となる。もう1つは、理を尽くすということ。必要であるということに関する専門的な知見も含めた理屈と、適当であるということの確認と、過度の負担であるかということを確認しているというそのプロセスを明快に説明すると、大体は理解を示してくれる。それを踏まえた上で、学術的要件に抵触するからこの配慮はだめだが、この配慮なら可能というような建設的な対話もできるかなと思っている。

質問／コーディネーターとして採用される際の資格条件は何かあったのか。

藤原／社会福祉士の資格を持っている。障害者差別解消法では環境調整の部分で求められていることも多いので、ソーシャルワークの知見は非常に有効だと思っている。

質問／支援方法はどのように決定するのか、希望された支援方法は全て提供すべきなのか。

藤原／本学でも手話通訳の希望があっても応えられないことのほうが多い。その場合には、希望はもちろん聞いているが、なぜその方法が良いのかの理由も聞いた上で、希望通りにはできないことを説明するとともに、別の方法を提示して相談をしている。授業のやり方によっても、できるだけ柔軟に方法を考えるようにしている。利用学生がどれを選択するのが一番良いのかを悩む場合には、実際にいろいろな方法を試してもらって決めて行くというやりとりが大事だと思っている。

質問／学生スタッフの居場所作りとネットワーク作りができてきているのは、どういう要因が強かったのか。

小谷／初代コーディネーターの先生の想いがとても強かった。色々な利用方法が出来る場所として作っており、支援に関係していない学生にも気軽に立ち寄れる場になっている。

## 到達点と課題

本分科会を通して、いずれの大学も障害者差別解消法を見据えた先駆的な実践をすでにされていること、法の制定以降もより良い支援のあり方に向けて現状の課題解決に取り組まれていることが伺われた。また、合理的配慮提供に向けた学内調整・学生との面談・教員との対話なども、決して負担として捉えるのではなく、障害学生への修学支援が全学的に理解を得られる良い機会になっていること、発展的な支援に取り組める好機と考えている様子であった。こうした事例は、これから本格的な対応を検討されている関係者にとって大きな助けとなるに違いない。

時間の関係上、ディスカッションを深めることができなかったのが残念ではあるが、今後もこうした事例および各大学の課題共有の機会を設けていくことで、日本全体の障害学生支援の発展に寄与することを期待したい。



## 【分科会 2】

### 合理的配慮の時代に求められる聴覚障害学生の構えと技術

報告者：小林洋子・管野奈津美（筑波技術大学）

#### 企画趣旨

2016 年 4 月に施行される障害者差別解消法は合理的配慮の不提供を禁止している。しかし、聴覚障害学生自身が動かない限り何も変わらない。本分科会では大学のゼミで通訳がいない状況下、支援を依頼する場面を設定し、どのように動いたら良いか、どのように教員や学生と相談を進めたら良いか、グループディスカッションやロールプレイを通して、聴覚障害学生が意思を表明するにあたって必要な構えや技術について議論することを目的に開催した。

聴覚障害学生を中心に 3 つのグループに分かれて、ディスカッションを行い、2 回に分けてロールプレイを実施した。テーブルにミーティングシート（ホワイトボードと同じ機能を持つシート）を用意し、マーカーで書き込んで筆談できる環境を整えた。なお、討議中、情報保障はつけず、聴覚障害学生同士、手話もしくは音声で話し合っても良いとした。ただし、グループ内の全員が目で見えて理解できるように話し合った内容をなるべくホワイトボードに書き込むように指示を出した。討議中、グループ以外の参加者（教職員、支援学生等）には、自由にディスカッションスペースの周りを歩いて見学できるよう配慮した。

#### 討論の柱

- ① 大学における教員・学生・聴覚障害学生それぞれの立ち位置を考える。（社会認識）
- ② 自分の状況を的確に説明し、要望をいかに伝えるかを考える。（個人認識）
- ③ そのために必要な知識（合理的配慮）と経験（友人の経験を含む）をいかにして得るかを考える。

#### 内容

##### 1. 導入

冒頭で司会の小林から、本分科会の企画趣旨と進行についての説明を行った後に、登壇した講師の紹介を行った。2002 年から障害学生支援室のコーディネーターとして障害学生支援に関わっている同志社大学の土橋恵美子氏、情報保障の概念が広まっていない頃から大学における支援体制の向上を目指して活動されてきた関東聴覚障害学生サポートセンターの長野留美子氏、福岡



写真 分科会の様子

出身で福岡の大学を卒業し、現在は社会人としてご活躍されている聴覚障害当事者・中村友香氏の3名である。また、ロールプレイのときに教員役を担当いただく筑波技術大学の石原保志教授にもご登壇頂いた。

《講師》

土橋恵美子（同志社大学京田辺校地学生支援課 障がい学生支援コーディネーター）

長野留美子（関東聴覚障害学生サポートセンター）

中村友香（団体職員）

《ロールプレイ：教員役》

石原保志（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 教授）

《司会》

小林洋子（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 助教）

《企画コーディネーター》

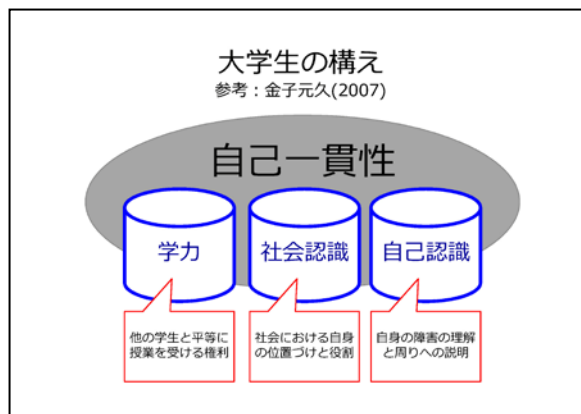
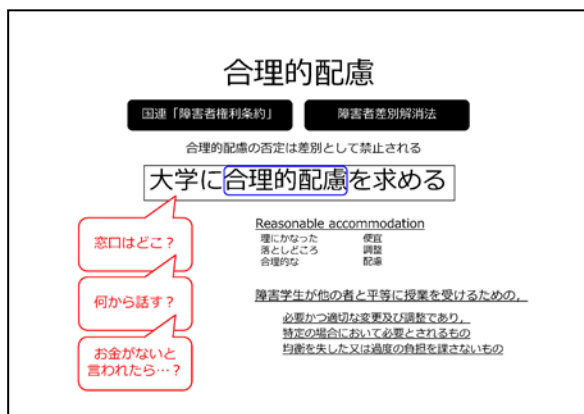
大杉豊（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 教授）

次に小林から、ロールプレイ前の導入として合理的配慮について説明を行った。

■合理的配慮と「構え」について（小林洋子）

2016年度から障害者差別解消法が施行されるが、大学の入試に情報保障が必要な場合、どこが窓口になるのか、また自分が必要な情報は何か、大学から予算がないと断われたら、どうしたら良いか。聴覚障害学生自身が、いざその場になって上手く対応できないことが実際は多いように思う。つまり自分自身のニーズが分からず、周りの状況も把握できないために意思表示できず、大学が合理的配慮を講じない恐れがある。

金子元久氏の著書「大学の教育力」に、大学の教育力は大学生の構えの影響を受けると書かれている。「学力」「社会認識」「自己認識」がバランスよくとれたとき、自己一貫性が高くなり、自己一貫性が高いと、大学生活に対する満足度が高くなるだけでなく、卒業後社会人になってからの生活にも良い影響を与える。一般的に提示されている自己一貫性の高め方は、障害学生にも当てはめることができるため、特に「社会認識」「自己認識」を念頭に置いてロールプレイを行ってほしい。



## 2. ロールプレイとグループディスカッション

ロールプレイ

### 大学のゼミに参加している時

- ・大学院の研究室、ゼミ参加者は毎回約10～15名で聴覚障害者は1名のみ
- ・後期から始まったゼミの4回目、情報保障はついていない
- ・ゼミは演習であり、単位付きとする
- ・ゼミ以外の授業では、情報保障(ノートテイク)を利用している
- ・ゼミ担当の指導教員及びゼミ参加者は全員手話が出来ず、聴覚障害に関する知識もほとんど有していない聴者
- ・今までゼミに参加したが、内容がつかめず追いつけていない状況にある
- ・担当教員役とのコミュニケーション手段は筆談ないし音声とする

何らかの配慮をゼミ担当の指導教員にお願いしたいと考えているが、どうしたら良いだろうか、何を伝えたら良いだろうか

図3 ロールプレイの場面設定（当日投影スライドより）

上図に示すような場面を設定し、ゼミ担当の指導教員になんらかの配慮をお願いするにはどうすればよいのか、何を伝えたらよいのかを、グループで討議を行い、グループの代表者が、筆談ないし音声によるロールプレイを実施した。

### 【ロールプレイ 1 回目の様子（C グループ）】

（※筆談による発言は「筆談」とし、ゴシック体で記述。その他の発言は音声による）

学生：聞こえないので、先生の話が分かりません。聴覚に障害があるので、音声の情報が入ってきません。普通の講義ではパソコンノートテイクを受けています。先生の話を書き取ってもらっています。ゼミでもつけていただいて、先生の話の内容を理解したい。情報保障をつけていただきたいです。

先生：話し合うのは構わないけど、何を？

学生：聞こえないので、書いてください。

先生：【筆談】話し合うのは構わないけど、何を？

学生：先生や他の学生が資料を使うときは、前もってレジメをいただきたい。私は手話を使って発言するので、手話通訳をつけるよう配慮をお願いします。他の講義ではパソコンテイクをつけているので、このゼミでもつけていただきたいです。

先生：【筆談】さっき二人で話しているときは、大丈夫だったよね。補聴器のボリュームを上げればいいのでは？

学生：小さいときは聞こえていたので話はできます。補聴器は音としては入ってきますが、言語としては入ってきません。話を聞くことは難しいです。補聴器だけでは話の内容は分かりません。文字による情報をお願いします。

先生：[筆談] さっき話していた時は、分かっていたでしょう。

学生：1対1で、周りが静かな時は聞こえますが、ゼミでは色んな人が話します。1人を集中的に見ることは難しいです。1対1なら、口話でも大丈夫ですが、それ以外では、音声だけでは難しいのです。

先生：[筆談] すべてをすることは、無理だと思う。

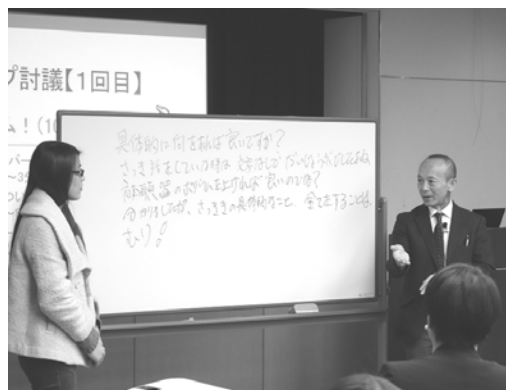


写真 ロールプレイの様子

#### 【ロールプレイ 1回目についてコメント】

学生：自分の大学では情報保障に関してはコーディネーターに任せている。自分で交渉するのは今回が初めて。知識がないので、要望の伝え方が難しかった。

石原氏：「補聴器のボリュームを上げて」と言ったが、社会に出たら必ず言われると思う。それから、私に「書いてください」と言ったけれど、あなたも（口話で話していたが）書いたほうがいい。そして手話通訳やノートテイクを挙げていたが、まず何を一番に要求したいのか、優先順位をつけて具体的にポイントを絞ると良い。

1回目のロールプレイの結果を受けて、問題点・反省点・改善方法について協議し、その後、2回目、3回目のロールプレイを続けて実施した。



写真 ディスカッションの様子

### 【ロールプレイ 3 回目の様子 (A グループ)】

学生：〇〇 (名前) です。ゼミのことで話したいです。ディスカッションについていけない状態です。聴覚障害なので、ノートテイクをしてほしいと思います。補聴器はあって音は分かりますが、言葉としては分かりません。ノートテイクや、資料を提示してくださるとありがたいです。

先生：A 君 (学生が名乗ったのとは違う名前) が、聴覚に障害があるのは支援室から聞いています。以前にも、私は聴覚障害学生をゼミで見た経験があって、その時は補聴器を使って参加できていました。A 君も、頑張ればできるのでは。

学生：対面での会話では大丈夫ですが大勢の話にはついていけなくて、理解が難しいので、パソコンテイクをお願いしたいです。

先生：パソコンですか？パソコンを用意すればいいのですか？

学生：(うなずく)

先生：それならできます。わかりました。

(話が伝わっていないと気づいた A グループのメンバーから「先生が言っているのは、パソコンは用意するけどテイカーはいないという意味だよ」とアドバイス)

学生：他の授業ではノートテイクがついているので、このゼミでもつけてくれると助かります。

先生：ノートテイクですね。では支援室への依頼は、A 君がしますね？

(5 分経過したため、ここでロールプレイ終了)

### 【ロールプレイ 3 回目についてコメント】

学生：自分の大学では事前に自分の聴覚障害に関する資料を作成して、教員に渡している。口頭だけで説明するのは難しいと思った。

石原：ロールプレイだから戸惑ったということですね。実際には自分の聴覚障害に関する資料を教員に渡しているとのことだったが、それは大切なことです。また、さっきのロールプレイでは、私があなたの名前を聞き間違えて、そのまま会話が進んでいた。これもよく起きることだから、やはり実際に書くことが大事です。また、「パソコンを準備すればいいか？」と聞いたが、最初は私の言った意味が理解できていなくて、同じグループの学生から助けってもらって、改めて「テイカーが必要」と伝えてくれたわけですね。方法を提案する時は、ただ「この方法が良い」と言うだけでなく、なぜその方法がゼミの場面であなたにとってベストな手段なのかという合理的な理由も、あわせて説明できるといい。社会に出てからもそういう説明の仕方のほうが話が通りやすいです。

### 3. 講師による助言

#### 【中村友香氏（当事者の立場から①）】

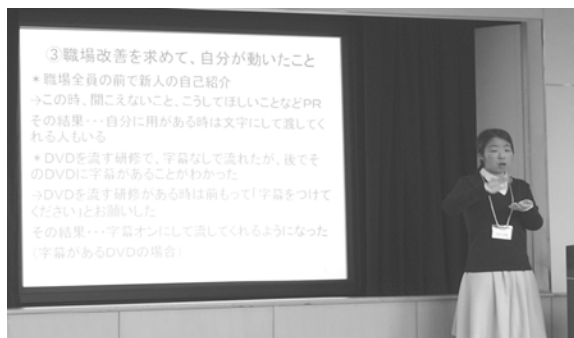
生まれも育ちも福岡で、ろう学校の幼稚部に通い、それ以降は一般学校に通った。基本的には口話で育ち、大学入学後に手話を学んだ。現在、日常生活・職場においては基本的に口話を使用しているが、必要に応じて筆談と手話も使用している。

まず、ロールプレイについて感想を一言。皆さんに聞きたい。聞こえないことを説明する時、どんなふうに聞こえないのか、どうやって相手の話を理解しているのかについて説明しないのか。私は、相手の口の動きを読んでいるが、全部は読み取れないのでゆっくり話してくださいと必ず伝えるようにしている。しかし、先ほどのロールプレイでは学生さんからそのような説明はなく、そこが気になった。

私はビデオに字幕をつけるボランティアをしていた母から、情報保障について教わった。大学で同じ学費を払うのにもかかわらず、聞こえる人は情報を十分に得られて聞こえない人は情報を得られずわからないままというのはおかしい、聞こえない学生には情報保障を求める権利があること、大学にはできるだけ情報保障を用意する義務があることを知った。大学には入学式の前に直接相談に行って、情報保障をつけてほしいとお願いし、幸い聴覚障害学生の先輩がいたので、要望はスムーズに伝わった。情報保障は、受講人数が多い授業にだけつけ、語学やゼミなど少人数の授業は、口話で理解しわからない時には友達に聞いてやっていけると判断し、支援はつけなかった。大学に入ってからの変化として、大学入学までは母に頼りきりだったが、「自分のことは自分でやりなさい」という母の言葉をきっかけに、自分から動くようになった。また、入学してしばらくは消極的だったが、全日本ろう学生懇談会で他の聞こえない学生との出会いがあり、「聞こえなくてもできる」と積極的に活動する姿に影響を受け、それをきっかけに様々な人と話せるようになった。

今、仕事を始めて 5 年目になる。入社当初は、聞こえないこと、口の動きを読むが半分くらいしか内容を理解できないこと、そして話しかけるときは、ゆっくり口を大きく開けてほしい、筆談もしてほしいということを説明した。上司と話をする時に、私が分からないことを何回も聞き返していたら、上司も伝わっていないことに気づいてくれて、文書にしたり話し方を工夫をしてくれるようになった。

社会に入って思うのは、自分から動かないと何も始まらないということ。上手くいかなくても失敗しても、繰り返し、様々な方法を試してみると、自分にとっても相手にとっても最善の方法が見つかると思う。



### 【土橋恵美子氏（コーディネーターの立場から）】

ロールプレイのあとに石原先生からアドバイスがあったが、聴覚障害学生にとっては大切なことだったと思う。筆談してくださいとお願いした時、「あなたも書いたほうがいい」と言われた。これは筆談の時にどう書いたらいいか、聞こえる人に書き方を教えることにもなり、また学生さんの誠意を見せることにもなる。また、音声で伝わらなかったことも書くことによって補えるものもあると思う。それから、具体的に何がほしいか伝えたほうがよい、というアドバイスもあった。手話通訳が無理なら次に何を求めるのか、優先順位をつけるようにとのアドバイスだったと思う。そしてこれは私からのアドバイスだが、こうしたポイントについて、聴覚障害学生の皆さんはぜひメモを取ってほしい。

次に用意した資料から話をしたい。「手話でいこう」という本はご存知だろうか。同志社大学では 2000 年に聴覚障害学生が入学し、ノートテイクの支援等、障がい学生支援制度が発足した。しかし、「学生同士の助け合いだけでは無理がある」と聞こえない学生が声をあげ、大学に要望書を出した。その要望書の内容はこの本の最後に載っているが、「聞こえないことはどういうことか」という説明や「ろう者のコミュニケーションの取り方・伝達方法、サポート体制を作してほしい」という訴えが、学生たちの連名で書かれている。大学はこの要望書をきっかけにその内容に向き合って、制度を充実してきたという経緯がある。また、要望書には「大学は、友達の善意によるサポートをあてにしないでほしい」「大学はきちんと聴覚障害者に向き合してほしい」と書いてある。今後は法整備がされて、大学はお金がないからできませんという時代は終わっていくので、学生の皆さんはそのことを受け止めて、要望を出すだけでなく、支援を受けることによって、自分に何ができるか、という気持ちを持って大学生活を送ってほしい。また、「聞こえないので支援してくれると嬉しい」「ゆっくり話してほしい」という要望だと分かりづらい。聞こえないことの説明資料として PEPNet-Japan が制作した DVD を配るというのもひとつ。沖縄の大学では自分の障害状況に関する資料を作成しているという話だったが、きっちりと伝えることが大事だし、教職員に必要性を気づかせるということにトライしてほしい。そして、聴覚障害学生のニーズは変化していくということも、お互いに知らなければならないと思う。ノートテイクがついているから大丈夫で済ませてはいけない。支援制度が整っていると素晴らしい大学と捉えがちだが、本人の要望を引き出し、応えられているのが重要。パソコンノートテイクの派遣があっても、ある学生にとっては本当は必要ない支援かもしれないし、ゼミでは、みんなでホワイトボードを囲んだほうが良いのかもしれない。そうした自分の要望を伝える力をつけて、社会に出てほしい。同志社大学の制度では、「自律的成長に着目する」という言葉を使っているが、自分で考えて判断するという意味で、「自立」ではなく「自律」を用いている。ぜひ自分で考え選択し、その判断に責任を持てる自律した大人になって頂きたい。

【長野留美子氏（当事者の立場から②）】

まずロールプレイを見ての感想をお話したい。学生役に出てくれた3人それぞれ自分で先生に説明したり、ふだんから自分の障害状況に関する資料を作成して渡しているという学生もいたが、自分が学生だった当時と比べると、私自身は今の学生たちのようにうまく説明ができていなかったように思う。学内に支援体制の整備があったり相談できる専門のコーディネーターがいたりすることによる差は、非常に大きいと感じた。また、グループディスカッションでは、学生同士で自然に役割分担ができていたのが印象的だった。経験のある学生が進んでリーダー役になり、ディスカッションの回を重ねるごとに意見交換が活発になり先輩に質問する人も増えていったのを見て、聴覚障害学生同士が集まって意見を言い合う場は大事だと改めて思った。



写真 長野氏の講演の様子

今日は当事者として、聴覚障害学生の心理の発達について話したい。まず、合理的配慮の提供とは社会的障壁をなくすことにつながるが、聞こえない学生から意思表示があることが前提であり、逆に意思表示がなければ大学に合理的配慮の提供の義務は生じないことになる。今日のロールプレイのテーマで、「自分のニーズを説明できる」という学生はどのくらいいるのだろうか。実際には、聞こえない学生にとって意思表示は難しく、私もそうだった。なぜ意思表示が困難なのか、その理由を考えてみた。大学入学前の「小中高」の時期は、情報保障を提供している一般の学校は少ないため、支援を受けた経験がある学生も少ない。また、聴覚障害者同士で集まって議論するような場がほとんどなく、聞こえる人との話し合いにも参加制約が出るため、「直接的体験」が少ない。さらに、聞こえる人は、先生からクラスメイトが怒られているのを見て自分も気をつけるというような「間接的体験」を積めるが、聴覚障害のある学生は、そうした情報が入らないまま育つ。その結果、

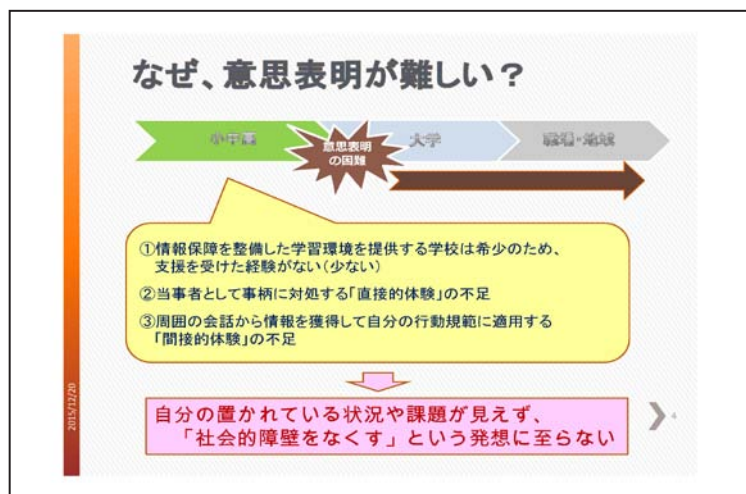


図4 意思表示が困難な背景（当日投影スライドより）

自分の置かれている状況や課題が把握できず、社会的障壁をなくそうという発想に至らない、そのため意思表示につながらないということが考えられるのではないかな。

今日は良い機会なので、自分のことを振り返り、自分の教育環境や家族構成、また、自分のアイデンティティ発達段階について考えてみてほしい。発達の

第1段階は「聴者の価値観を無条件に受け入れる」、第2段階「努力しても聴者になれず、混乱する」、第3段階「手話やろう者の価値観を発見し、それに傾倒する」、第4段階「ろう者、聴者の価値観をバランスよく受け入れる」という研究結果がある (Gilickman,1993,1996)。私もこの段階を経てきた。

次に、社会認識を深めるにはどうすればよいのか。学生時代は、様々な人との関わりがあると思うが、その人たちの役割は何か、そして自分の位置づけは何か考えてみてほしい。学生から社会人になるまでのあいだに、「セルフアドボカシー」「アサーション」「ピアサポート」というような自己変革から集団変革・社会変革へ移行してゆく段階を経ていけば、社会に出た後、周囲に要望を伝える力がつき、最終的に生涯を通した意思表示・決定のサイクルが出来上がるように思う。意思表示をした結果に対して問題意識を持ち、その後また、意見交換・情報交換を通して次の意思表示につなげるというサイクルで、これは学習環境改善、職場環境改善、地域での活動での環境形成にも活かされ、最終的には、政策への提案までつながっていくのではないかな。また、もうひとつ大事な人間関係形成にも繋がる。ただ支援を受けるのではなく、支援を活用しながら主体的に生きてほしい。

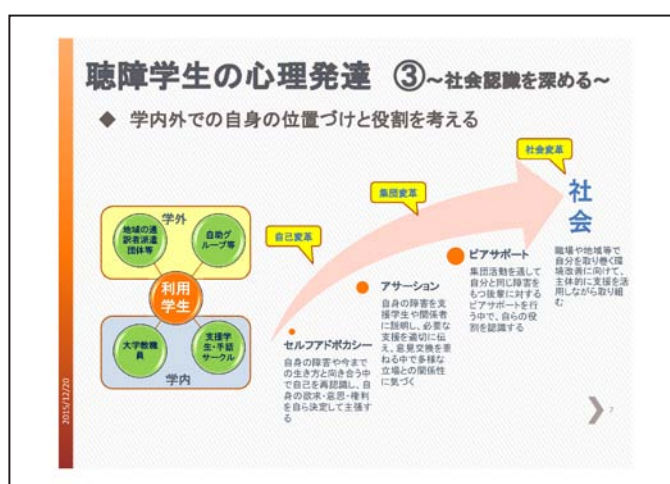


図5 聴覚障害学生の心理発達（当日投影スライドより）

## 全体ディスカッション

**参加者（情報提供施設職員）**／とても刺激的な分科会で勉強になった。学生さんは、支援を求めることに加えてまず「きちんと学びたい」という意志表明を明確に伝えることが大事ではないかと改めて思った。また、一般の人が聴覚障害のことをどう捉えているのかについてよく知り、誤解に対して論破していく方法をぜひ学んでほしいと思う。施設としても、そのための映像資料などを作っていかなければならないと感じている。

**参加者（聴覚障害学生）**／ロールプレイを見て、聴者の石原先生からは助言をいただいたが、聞こえない立場の講師からもアドバイスがほしい。自分としては、要望を一つにまとめて要望書を出すのがよいと考えたが、どうでしょうか？

**長野氏**／要望を1つにまとめるのが最も良い方法であるかどうかはわからないが、先ほどの発言にもあったように、学びたいから支援を求めているということを伝えるのが大切ではないか。そのうえで、必要な支援について周りの人と一緒に相談していけば、支援体制の整備にもつながっていくと思う。学生の本業は学ぶことなので、勉強がしたいと

いう気持ちを前面に出していくと良い。

**参加者（聴覚障害学生）**／気持ちを伝えることの他にも技術的に大切なことはあるか？

**長野氏**／その場ですぐに伝えるのが難しくても、懇談会などで聴覚障害のある先輩に相談して情報を得たり、PEPNet-Japan のサイトなどで他大学の支援状況を調べたりして情報を集めて、自分に必要な方法を探して提案することが大事だと思う。自分が動けば必ず道は広がっていくので、様々な人と交わり、情報を収集する力をつけることが大切だと思う。これは、社会に出た後、必ず生きてくる。

### 到達点と課題

学生からは「コーディネーターがいるので自ら説明するのは初めて。要望の伝え方が難しいと感じた。」「普段は事前に資料を作って渡しているが、口頭でお願いするのは難しい。」という感想が挙げられた。学生時代に自ら、自分の要望を直接教員に伝える機会を作っておくことは、卒業後の就労環境改善や地域の社会活動参加にもつながると考える。ロールプレイを通し、意思表示のポイントとして以下の点が挙げられた。

- ① ロールプレイを担当した学生は全員、口話で説明していたが、教員役との間でズレが起きていた例もあった。確実なコミュニケーションを取るためにも、自らも筆談していくことが大切ではないか。
- ② まず何が一番ほしいのか。（大学内の体制は）手話通訳を依頼できる状態なのか。それが無理なら次は何を求めるのか。具体的にポイントを絞って優先順位をつけて、説明する。
- ③ 要望を出してみても、断られることもある。それでわかったと終わらないように、前もって自分のニーズ・要望について整理しておく。
- ④ 方法を1つ提案する時、なぜその方法がその場面に適しているのかという理由も含めて説明できると、社会に入ってからその経験を活かせる。
- ⑤ 自分の聴覚障害の状況・コミュニケーション方法の説明をどう補足していくのか。

分科会全体としては滞りなく進めることができたが、ロールプレイやロールプレイ後のコメント及びフロアーからの質疑応答の時間を十分に確保できず、参加者との活発な意見交換にやや不足感が残った点が残念であった。一方、分科会の参加者にとっては、ロールプレイの中で聴覚障害学生がいかに意思を表明するのが難しいか知るよい機会になったのではないかと考える。今後、聴覚障害学生が意思を表明できるようにするにあたって必要な構えや技術についてさらなる議論が求められるだろう。

平成28年度から施行される障害者差別解消法に向けて、大学における聴覚障害学生への支援環境は改善されていくことが予想される。しかし法律は制度が整備されても、大学職員や聴覚障害学生自身の意識が変わるまでには、まだしばらくの時間を要するであろう。



## 【分科会 3】

### 一緒にスキルアップ Part2 ーノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳ー 報告者：筑波技術大学 萩原彩子

#### 企画趣旨

聴覚障害学生が高等教育機関で十分に学び、成長するためには、適切な合理的配慮の提供が欠かせない。聴覚障害学生への合理的配慮では、ノートテイク、パソコンノートテイク、手話通訳といった情報保障が用いられることが多いが、その技術を高めることは、聴覚障害学生の十分な学修保障につながり、非常に重要である。

本分科会は、第 6 回シンポジウムで実施した分科会「一緒にスキルアップーノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳ー」（2010 年 11 月、宮城県仙台市、企画コーディネーター：田中啓行氏）の第 2 弾として企画したもので、情報保障者のスキルアップに焦点を当て、手法ごとにグループに分かれて模擬通訳映像の観察・評価を通じて情報保障技術の向上を目指した議論を行うことを目的に企画した。また、あわせて情報保障者として求められる姿勢や大学教職員との協働のあり方を探ることを第 2 の目的とした。

#### 分科会の流れと使用教材

初めに司会から企画主旨と流れを説明したのち、高等教育機関における情報保障の特性や、聴覚障害学生が情報保障をどのように受け止めていくかの変化について、関東聴覚障害学生サポートセンターの吉川あゆみ氏よりお話いただいた。また、本分科会第 2 の目的である大学教職員と情報保障者の協働のあり方について、PEPNet-Japan モデル事例構築事業で取り組んだ成果をもとに、宮城教育大学の松崎丈氏にまとめていただき、参加者それぞれが自身の立場でどう高等教育機関における情報保障に向き合うべきかといった視点について提示した。お二人が当日投影したスライドは本報告の最後に掲載しているので参照されたい。

次に、参加者が事前に希望した 3 つのグループ（①手書きノートテイクグループ、②パソコンノートテイクグループ、③手話通訳グループ）ごとに、各手法の模擬通訳映像を観察し、意見交換を行った。

なお、模擬通訳で使用した講義映像は情報科学に関する講義の一部で、ネットワーク社会の発展について扱ったものを授業者の承諾を得て使用した。模擬通訳の協力者には講義映像を見ながら通訳を行ってもらい、その様子を撮影した。使用した講義部分の書き起こし文を以下に掲載する。

＜講義書き起こし文＞

IT 産業というので、今まではマイクロソフトというのが非常に巨匠でした。私が入社したところで、メインフレームで汎用機、ここ、わかりますよね。これが汎用機。一台で何でもやるという、大型計算機センターに置かれているコンピュータです。ここにみんな集まってコンピュータを使っていた。そういう時代から、コンピュータ技術の発展に伴って、第2世代で、要はパソコン、パーソナルコンピュータというのが出てきました。個人でもコンピュータを道具として使えるようになった。わざわざ計算機センターとか大学に行ってですね、コンピュータを使うことをしなくても、自分の部屋で、この時代はまだ自分の部屋でですね、パソコンを使えるようになってきたと。特に画期的だったのは、ウィンドウズっていう、ディスプレイの画面でですね、複数のプログラムを動かせると。この時代はまだプログラム。サービスとかコンテンツになっていないです。プログラムを動かせるというのが画期的だったんです。それで、皆さんの生まれた時代ぐらいからになって、ネットワークっていうのが非常に発展して、ネットワークでこのパソコンと大型コンピュータがつながるようになりました。そうすると、飛躍的にプログラムもデータも大きくなって、プログラムも大きくなっているし、それから取り扱うデータ量もこれは膨大になっているんですね。そうすると、ちょっと下手くそにプログラムを書いてもですね、それなりに大規模な計算っていうのはできるんです。皆さん習ったかどうかかわからないけれど、アルゴリズムというのが多少原始的で、高度でなくてもですね、かなりのたくさんの計算ができる。同じ繰り返しで、要はデータが膨大になりますし、プログラムも大きいですから、かなりの計算ができると。そういう時代になってきました。

それで、過去のマイクロソフトに今、取って代わりつつあるのが、グーグルですね。これは、だから、取って代われつつある。このグーグルが得意として持っている技術というのは、このアルゴリズムで、特に検索のアルゴリズムなんです。検索。検索のアルゴリズム。そうすると、皆さんが欲しい情報とか、欲しいサービス、欲しい結果というのを瞬時にデータの中から取り出して、皆さんに答えを返してくれるという時代になってきたわけですね。だから、下手に自分で考えなくてもよくなってきて、コンピュータができることはコンピュータにやらせようという時代になってきたっていうことですね。

なお参加者には、講義の書き起こし文とあわせて、PEPNet-Japan 情報保障評価事業等で作成した各情報保障手段のチェックシートを配布し、活用してもらった（チェックシートは第11回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム当日資料に掲載）。以下に各グループのディスカッション内容の一部を記す。なお、各グループには聴覚障害のある大学生、高校生の参加もあった。

ディスカッション

①手書きノートテイクグループ（講師：関東聴覚障害学生サポートセンター 田中啓行氏）

本グループでは模擬通訳2例を使い意見交換を行った。まずノートテイク1についてお互いに気づいた点を挙げ、その後ノートテイク2を提示し、2つを対比しながらディスカッションを進めた。以下に、参加者から挙げられた意見と講師のコメントの一部をまとめる。



<ノートテイク 1について>

参加者／「フク数」や「発テン」のように漢字とカタカナがまざっているところは読みにくいかなと思った。

講師／「フク数」のところは「フク」にしか下線がなく、文字も「ワク」にも見えてしまう。「発テン」のところのように「フク数」という言葉すべてに下線があれば1つの言葉のまとまりであることがわかるのでわかりやすくなるのではないかな。

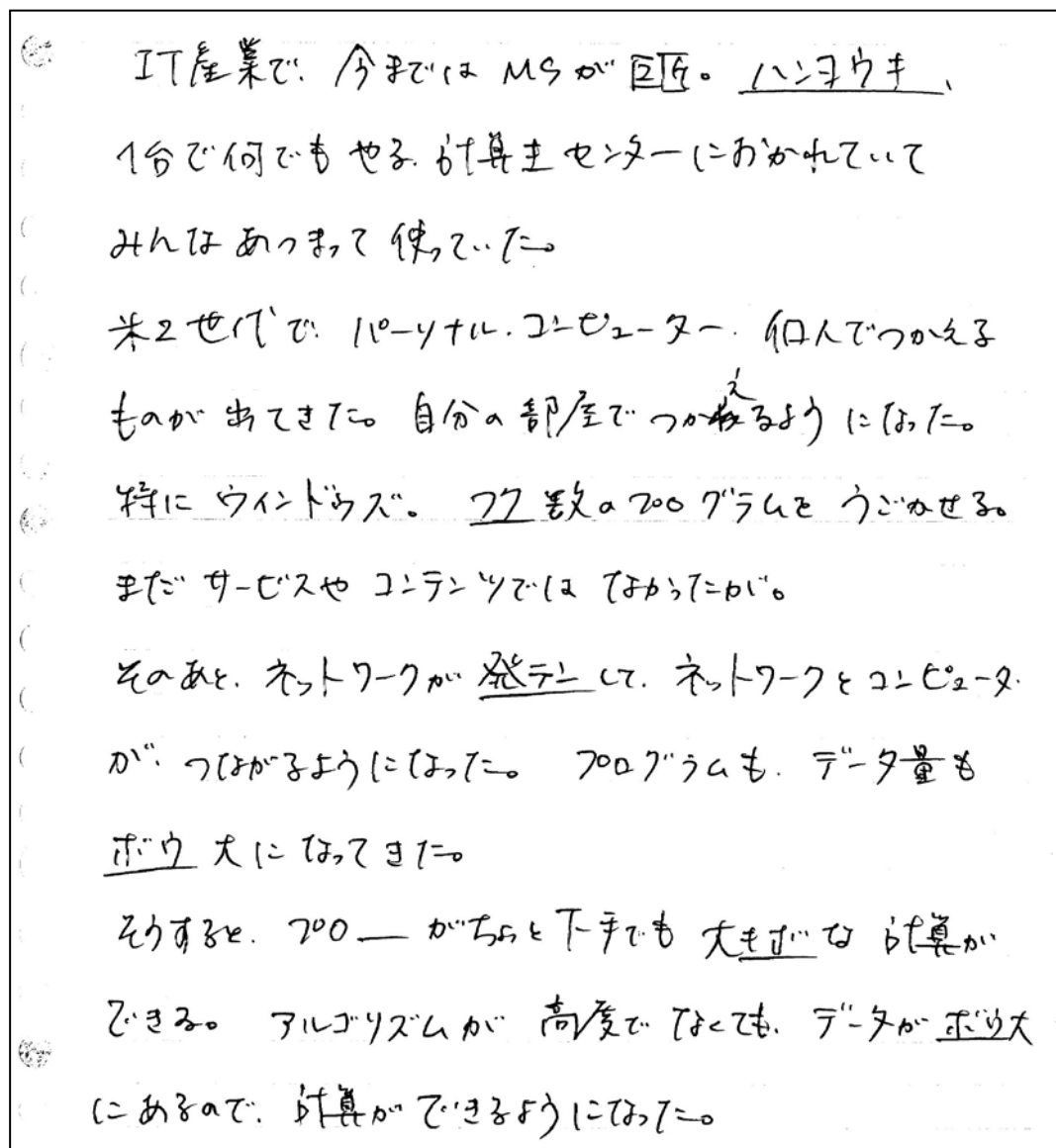


写真 ノートテイク 1 (一部抜粋)

参加者／初めの「MS が巨匠。ハンヨウキ。」は、汎用機の話が急に出てくる感じで前後のつながりがわかりにくいように思った。接続詞があるとよいのではないかな。

参加者／おそらくスライドに汎用機の絵があって、この時はスライドを指していたのではないかな。スライドを指していたことがわかるような書き方があったらよかったのでは。

**講師**／そのとおりだと思う。そうするとノートテイクだけの問題だけではなく、教員にも指示語を使わないで具体的に説明してもらうなどのお願いも必要になると思う。

**参加者（聴覚障害学生）**／そういった時に周りの学生が聴覚障害学生の肩をたたいて、スライドを指していることを知らせてくれるような方法もよいと思う。

#### <ノートテイク 2 について>

**参加者**／ノートテイク 1 と 2 を比較した場合、例 1 は落として欲しくない情報が盛り込まれていたと思う。ノートテイク 2 は文章だけでまかないきれっていない面があるので、自分で補いながら読まなくてはいけないと感じた。例えば大型計算機センターに置かれているコンピューターというところと、そこに集まって利用していたということが抜けていた。



写真 手書きノートテイクグループ

**講師**／私も同じようなことを感じた。ノートテイクの評価のポイントとして、文字の見やすさの他に、内容があると思う。内容的に大事な情報が漏れていると感じた。大型計算機センターの話が抜けているので、当初は集まって使う必要があったということと、最近では個人で使えるということの対比ができない。「自分の部屋で」と書いているが、そこと対比するためには初めに計算機センターに行って利用することが書いてないとわからない。

**参加者**／事前に略語を作っていたところがよかったと思う。

**参加者**／でも略語を作るのは最初から内容を知っていないとできないと思う。ただ、講義に継続して支援に入っていれば講義の内容がわかってくるので初めに略語として書ける。また、利用学生に聞くこともできる。

**講師**／大学の講義だと毎週のことなので内容も継続していて必要な略語を作ることができる場合もある。場合によっては大学の支援担当部署が教員に依頼して、協力が得られればノートテイク用の資料を事前にもらうということもある。

**参加者**／略語で「コ」に○をつけているが、まちがって「コン」に○をしてしまうと「コンテンツ」など似たような言葉も出てくるので混同してしまうのではないかな。

**講師**／この講義は情報系ということでカタカナも多いので気をつけて略語を使わないと意味がわからなくなる可能性がある。

**参加者**／パーソナルコンピューターで「PC」にしているので、コンピューターであれば「C」に○でもいいのではないかな。



産業 → ⑧, マイクロソフト → MS, ~~コンピュータ~~  
 パーソナルコンピュータ → PC  
 アルゴリズム → ⑦, google → ⑨ [ / ]  
 TeamACS

そのIT(⑧)というので、MSが今まで「モノ」だった。  
モノ 1台で何でもやるという⑧「モノ」-ターです。  
 この時代から⑧「モノ」でPCで生まれた。  
 個人でも、⑧を道具として使えた。  
 ⑧を使うとしても自分の部屋で使えるようになって  
 カッコよくしたのが Windows。それまでは  
 プログラム。サービスとかコンテンツではない。  
 皆が生まれた時からネットワークが「モノ」で発展して  
 大型PCとつながるようになって。そうすると、  
 データもプログラムも大きくなって、取り扱う  
 データも「モノ」に。下手にプログラム書いても  
 「モノ」でできるんです。⑧が「モノ」、サービス「モノ」  
 「モノ」でなくても「モノ」可能。  
 そういう時代になりました。今のMSに  
 変わりつつあるのが、⑨。これは、ネットと  
 しているのが「モノ」の⑨。すると、欲しい  
 ⑩、サービス、結果を「モノ」に「モノ」の中  
 取り出して、みんなに「モノ」を返してくれる。

写真 ノートテイク2 (一部抜粋)

## ②パソコンノートテイクグループ (講師：宮城教育大学 松崎丈氏)

模擬通訳は IPtalk を利用した連係入力で行われたもので、入力者間に技術の差があるものの1例を使用した (ログを以下に掲載)。参加者には入力者のバックグラウンドを伝えずに模擬通訳映像を視聴してもらったが、入力者間の技量の差があることから起きたトラブルとその対処に関する意見が多く挙げられた。以下に、参加者から挙げられた意見と講師のコメントの一部をまとめる。

その it 産業は今までは、そのマイクロソフトが巨匠でした。私が入社したころはメインフレームで汎用機、一大でなんでもやる大型計算機センターにおかれている、コンピュータです。ここに集まってコンピュータを使っていたそういう時代から PC 発展から第 2 世代で、パソコン、「パーソナルコンピュータ」が出てきた。個人でも CP を道具として使うようになった。わざわざ計算機センターや大学に行って、コンピュータを使うことをしなくても、自分の部屋でその時代はまだ自分のパソコンで、パソコンを使えるようになってきた。特に画期的だったのは、ウィンドウズのディスプレイの画面で複数のプログラムを動かせるということ。サービスとか、コンテンツになってない。プログラムを動かせること自体が画期的だったのです。それで皆さんが生まれた時代からネットワークというのが非常に発展して、ネットワークから大型コンピューターとつながるようになった。そうすると、飛躍的にプログラムもデータも大きくなって、プログラムも大きくなって、取り扱うデータ量も膨大になっているのですね。そうすると、)ちょっとへたくそにプログラムを書いてもそれなりに大規模な計算ができるんです、ようは。みなさん習ったかわからないけどアルゴリズムというのが、多少、原始的で高度でなくてもかなりたくさんの計算ができる、同じ繰り返しで、データもプログラムも大きいですから。google ですね。過去のマイクロソフトにとってかわろうとしているのが google。google が得意としているのが、検索のアルゴリズムですね。皆さんがほしい情報、サービス、結果が瞬時にデータの中から取りだして、みなさんに答えを返してくれるという時代になってきました。だから、下手に自分で考える必要がない。コンピュータができることは、コンピュータにやらせようという時代になってきたということです。

#### 模擬通訳（パソコンノートテイク）のログ

**参加者**／表示させる順序を前後させてしまった場面があったが、1 人は手が止まってしまっていたように見えた。ミスは誰にでもあることなので、それを修正する力や、戸惑わずに対応する練習も必要になると思う。

**参加者**／初心者と思われる入力者はキーボードを見ながらタイピングしているように感じた。そのため、A さんが打っていることに気づかず重複してしまっている場面があった。

**講師**／現場ではいろいろな問題が起きることと思う。現場で学べることもあるが、起こりそうなトラブルを想定したシミュレーションを事前に積んでおくのもいいと思う。

**参加者**／IPtalk の設定で、改行がされずにつながって表示されていた。本学では 1 文ずつ改行されるように設定しているが、見る利用学生によって考え方が違うので学生に合わせた対応が必要かと思う。

**講師**／表示については利用学生との確認が必要。改行の使い方をいろいろ提示して見比べるなどして利用学生と確認するのも良い。これ



写真 パソコンノートテイクグループ



も利用学生との「協働」の形である。

**参加者／入力者に技術の差があり、Aさんが長く打たざるを得なかった場面があった。その際入力部をはみ出して入力していたため、一気に多くの情報が表示されていた。**

**講師／入力部を超えてしまうとAさんがどこまで打っているのかわからなくなるので、Bさんも困る。利用学生の立場からしても、早く情報をつかむために入力部を見ている場合もあるので、そういったニーズがあることも念頭に置いておいて入力して欲しい。**

**参加者（聴覚障害学生）／入力に漏れが起きることに不安になり、授業に集中できない部分があった。利用学生の様子も確認しながら入力していただけるといいなと思う。**

**講師／利用学生の気持ちがよくわかる話だった。通訳に混乱が起きるとどうしても利用学生は不安になってしまう。入力者は講義の様子や入力部だけでなく、利用学生にも気を向けて欲しいとのことだったが、協働のためにはどうしたらいいだろうか。**

**参加者（支援学生）／本学は利用学生の周りに理解者が多く、指示語が出た場合に隣の席の学生がレジュメの該当箇所を指さしてくれたり、手話ができる学生も多く手話で補ってくれたりすることもある。情報保障者だけでなくそれ以上に周りの人の理解を得る活動が必要だと考えている。**

**講師／まさしくその通りだと思う。協働というと情報保障者にだけ目を向けがちだが、授業を一緒に受けている周りの学生との協働もある。**

**参加者（聴覚障害学生）／今回は書き起こし文が配布されていたので、入力のどこが間違っていたかわかったが、もし通訳だけを見ていたらどこが間違っているかわからなかったと思う。間違ったまま受け取って覚えてしまったかもしれないという不安を感じた。先ほどの話にもあったが、情報保障者だけでなく自分から周りの人たちに協力をお願いしていきたいと思った。**

**講師／とても大切な話をしてくれた。情報保障者ががんばっていても、どうしても間違ってしまうこともある。それを利用学生がそのまま受け止めてしまうこともあるので、周りの人の協力も得ながら確認していく。また、講義が終わった後に間違ったところがあるかどうかの確認をすることもできる。そのあたりも現場で気づいたことを積み重ね、情報保障者と利用学生が協働しながらよりよい方法を作っていければと思う。吉川氏の話にもあったが、聴覚障害学生もなんとなく「大丈夫」という受け身な態度だけでなく、それぞれが意見を出しながら作っていくことが必要。**

**講師／最後に、他に気づいたことを話したい。教員の立場からすると、話している言葉のニュアンスが変わっているところが気になった。「過去のマイクロソフトに今、取って代わりつつある」という部分を「過去のマイクロソフトにとってかわろうとしている」**

と入力していた。原文は現在進行中であることを表しているが、これだと「そういう方向性がある」という意味になってしまう。教員がどのように物事を認識して話しているかはとても大切であり、きちんと捉えながら情報保障を行って欲しい。

また「グーグルが得意として持っている技術というのは、このアルゴリズムで、特に原文の「検索のアルゴリズムなんです。検索。検索のアルゴリズム。」のところは、「検索」という言葉を繰り返し使い、強調している。しかし入力では「検索のアルゴリズム」とあるだけ。そのため教員が強調したい部分が伝わっていないように思う。強調していることがわかるように、ここはあえて繰り返して入力してもよいと思う。

このように、教員が物事をどのように捉えているかを的確に捉えながら情報保障を行ってもらいたいと思う。ログを教員が確認して、自分が伝えたかったことがきちんと反映されているかを確認してもよいと思う。

### ③手話通訳グループ（講師：関東聴覚障害学生サポートセンター 吉川あゆみ氏）

本グループでは2つの模擬通訳映像（手話通訳1、2）を教材として使用した。まず冒頭で、高等教育機関で求められる手話通訳について、講師から以下のような話があった。

**講師／**あくまで私の感想だが、手話通訳1、2とも基本的な手話通訳技術は持ち合わせていると思う。これまでさまざまな手話通訳を見たり、手話通訳について議論したりする中で評価が分かれやすいポイントがある。チェックシートでいうと「表現技術」と「論理や態度の伝達」で評価が分かれやすい。なお、「見やすさ」や「語彙選択」は基本的な手話通訳技術を持っていれば大きな差はないが技術が未熟な場合は評価に差が出がち。

基本的な「表現技術」ができた上でなければ、「論理や態度の伝達」はできない。「表現技術」ではCLや空間、RS（リファレンシャルシフト）等を的確に使い、誰が誰に言ったか、主体なのか受け身なのかといった深い表現が必要となる。それが「論理や態度の伝達」をもたらし、今の話は先生の考え方なのか、一般論なのかという判断を生み出す。それらが最終的には「全体像の把握」と「情報量・忠実さ」につながっていく。

続いて、通訳上のポイントが多数盛り込まれている部分を取り上げ、詳しく手話表現の分析をしながらディスカッションを行った。具体的には、手話通訳1と2の表現の該当箇所をそれぞれ視聴し、議論の材料とした。

以下にそれぞれの通訳の書き起こし文を記す。なお、表記にあたっては、「大学での手話通訳ガイドブックー聴覚障害学生のニーズに応えよう！ー」（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター発行）を参考に、以下のルールを用いた。



●用いた表記ルール

／○○／…手話の語彙裸別及び文法要素の 1 つの単位を示す

／nod／…うなずき。

／PT-3／…三人称への指さし。

<原文>

IT 産業というので、今まではマイクロソフトというのが非常に巨匠でした。

<手話通訳 1>

／IT 産業／中／（間）／以前／言う／MS（空書、口形「マイクロソフト」）／知ってる？  
／PT-3（右上）／会社／PT-3（右上）／本当／有名／とても／ですよ／nod／

<手話通訳 2>

／IT 産業／言う／（間）／以前／まで／マイクロソフト（指文字）／言う／会社／有名  
／広がる／nod／

参加者から出された意見と講師のコメントを以下に抜粋する。

**参加者**／手話通訳 1 は表現にメリハリがあった。また、手話通訳 2 は指文字で時間がかかっていたため、最後のところの「巨匠」が／広がる／だけの表現になっていたが、手話通訳 1 は／本当／有名／とても／と具体的に伝えていたと思う。

**講師**／「巨匠」の表現は私も迷うところ。もし手話通訳の他にパソコン通訳がついていのであれば「有名」だけでも良いが、手話通訳だけなのであれば、個人的には「巨匠」という言い方をしていることも指文字や口型で伝えて欲しい。具体的には、「／有名／nod／」のあとに「／巨匠（指文字）／言う／方法／」と付け加える。そのあたりは個人の好みもあると思うが、私としては先生独特の言い回しはぜひ知りたい。

**参加者（聴覚障害学生）**／専門用語でわからなかった表現があった。IT はわかったが「MS」だけではわからなかったので指文字があった方がよかった。

**講師**／専門用語の表現や指文字の使用については聴覚障害学生で評価が分かれると思う。ほとんどの講義は毎週連続するので、繰り返し出てくる用語であれば手話通訳 1 の「MS（空書）」のように簡単に表現してもよいが、初めて出てきた用語であれば指文字でも表現して欲しい、という聴覚障害学生もいるということだと思う。

**講師**／時間の関係で挙げきれなかったポイントについて話したい。これは手話通訳 1 と 2 のどちらがいい、悪いと言うことではなく、好みもある。その中でポイントを挙げる

とすると、まずはやはり間をはっきり表現して話の強弱をつける必要があるということ。「IT 産業と言えど」のところは何の話題についてこれから話すのかが提示されているので、さらっと表現してしまわず、間をとって強調等することがとても大事。

次に、「私が入社した頃」のところは RS が大事。「IT 産業と言えど」は一般論だが、その後主語が自分になり、入社した頃の話に移り変わる。RS を入れて主語が自分であることを明確にしないと論理がつかない。



写真 手話通訳グループ

「大型計算機センターに置かれている～」も、日本語で聞いていけば自然に理解できるが、手話で表現するとなると難しい。「センター『に』置かれている」を「／センター／置く（婉曲した両手を前に出す）／」とだけ表現してしまうと「センター『を』置いて」と見えてしまう。

「／センター／PT（センター）／加える／」などとして、センターの「中に」設置されていることをより具体的に表現する必要がある。手話通訳にはこういった翻訳の難しさがつきまとう。手話表現が想起させるものと日本語が想起させるものの違いを踏まえて、どう表現するのか考えながら手話通訳の技術を磨いていく必要がある。

また、論理を伝えるという意味では的確な指さしの使用が必要。RS も使って、何がどこに、ということをきちんと伝えていかないと論理を伝えるのは難しい。そういった目を磨くには、手話通訳されたものを一文一文細かく分析して、どこに指さしや RS 等が入るのかを知ることがおすすめ。冊子（大学での手話通訳ガイドブックー聴覚障害学生のニーズに応えよう！）に詳しく書かれているので参考にして欲しい。

最後に、言葉の使い分けについて。今回の講義では「パソコン」と「コンピューター」という言葉の使い分けがされていた。手話通訳としても表現を分ける必要がある。例えば大型計算機センターに置かれていたのは「コンピューター」であって「パソコン」ではない。このような言葉の使い分けも講義前の事前学習で補う必要がある。

## まとめ

今回は 2 時間という短い時間だったが、それぞれの手法について、より高等教育場面に即した技術を模索するためにはさらなる議論や研修の場が求められるだろう。PEPNet-Japan として、今後も引き続きこのテーマに取り組んで行きたいと思う。最後にまとめとして、講師の方々からいただいた総評を掲載したい。

田中氏／手書きノートテイクの評価において、字の大きさや見やすさについては利用学生も情報保障者も教職員にとっても分かりやすく評価しやすいと思うが、一方で内容に



についても評価することが大切である。教員の意図が十分に伝わっているかどうかといった視点を持って評価して欲しいと思う。先ほど2つのノートテイクを比較した際に片方のノートテイクでは大事なところが漏れているという意見があり、そのあたりはいい議論ができたのではないかなと思う。

**松崎氏**／議論の内容を簡単に述べたい。まず個人のタイピングの問題があった。タイピング技術という速く多く入力できるかと考えがちだが、ミスやトラブルへの対応、提示資料への対応など、周りの状況を見てそれと結びつけながら情報を提供できるかも大切で、そういった意味でもタイピングが重要と確認した。

ただし、情報保障者としても限界があるので、例えば利用学生が他の学生にも聞けるような、他の学生との協働も大切だ、という意見もあった。

また、入力者間で技術の差があったとき、どう連携するかという意見もあった。前もって予測できることは、練習会でシミュレーション的に協働のあり方を探ったりルールを作ったりすることも大切であると思う。

教員の立場から言えば、自分の伝えたい言葉の意味ができるだけそのまま伝わるように、教員もログを確認するなど、教員との協働も必要だと思う。

今回の分科会で、情報保障者が情報保障すべての責任を担うという雰囲気がまだあると思った。聴覚障害学生の学習保障を十分に実現するには、情報保障者だけではなく、教員や他の学生とも積極的に協働できるかが、非常に大事だと思う。

**吉川氏**／手話通訳グループの中で伝えきれなかったことを含めて話したい。グループの中で最初に通訳映像を見て、チェックリストで評価しようとしたところ「評価は難しい」という声が多かった。大学における理想の手話通訳とはどのようなものか、まだはっきり打ち出されていないため、通訳者側もどう評価していいか戸惑いがあるのだろう。

今回紹介した冊子「大学での手話通訳ガイドブックー聴覚障害学生のニーズに応えよう！ー」の作成でも、手話通訳をどのように利用学生に評価してもらうかでひと工夫もふた工夫も求められた。利用学生は、自身なりの評価の基準を持っているはずで、それを引き出すためにさまざまな通訳のパターンを撮影してそれらを比較してもらう方法で利用学生の評価基準を探った。なおかつ、1人だけで評価するのではなく、複数の利用学生で集まってディスカッションをすると意見が出やすい。これは手話通訳だけでなく、パソコンノートテイクなどでも使える手法だと思う。利用学生に単独で「どうだった？」と聞いても、ストレートな答えは返ってこない。

また、学部、修士、博士といった在籍課程によっても、聴覚障害学生が望む手話通訳は異なってくる。さらには聴覚障害学生自身が使う手話と手話通訳者に求める手話表現も違うことがある。その上、聴覚障害学生の成長段階で手話が変動することも多い。聴覚障害学生が使用している段階の手話を出すよりも少し先の段階の手話を表すことも、教育的に必要な場合があるかなと思う。

## 大学における情報保障

関東聴覚障害学生サポートセンター  
吉川 あゆみ

### 1. 地域通訳と大学通訳の違い①

	地 域	大 学
頻 度	単発	継続
情報量	少～多	多い
内 容	普遍的	専門的
対 象	成人	学生
通訳状況	受動的	主体的

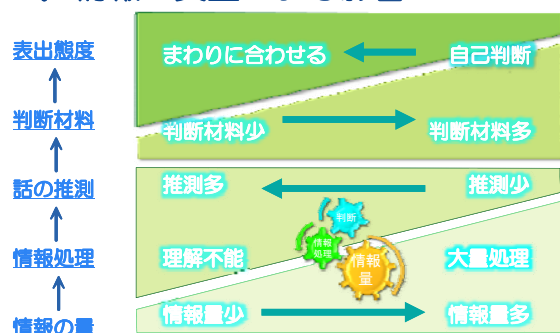
### 2. 地域通訳と大学通訳の違い②

	地 域	大 学
対人 援助 技術	関わり方	非常に重要
	守秘義務	非常に重要
	状況判断	非常に重要
通訳 技術	通訳技術	重要
	日本語力	重要
	論理構成	重要

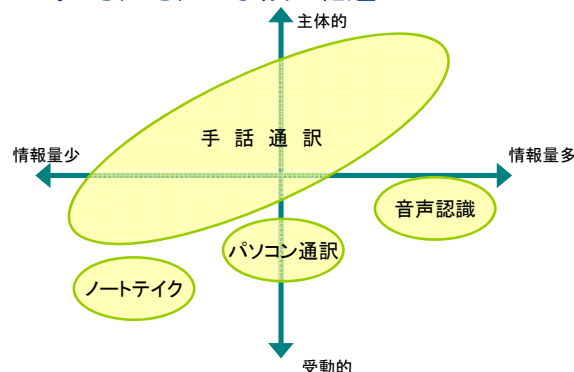
### 3. 情報の受け止め方

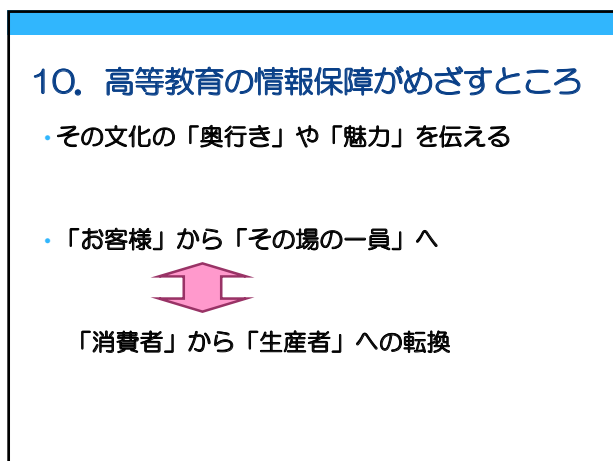
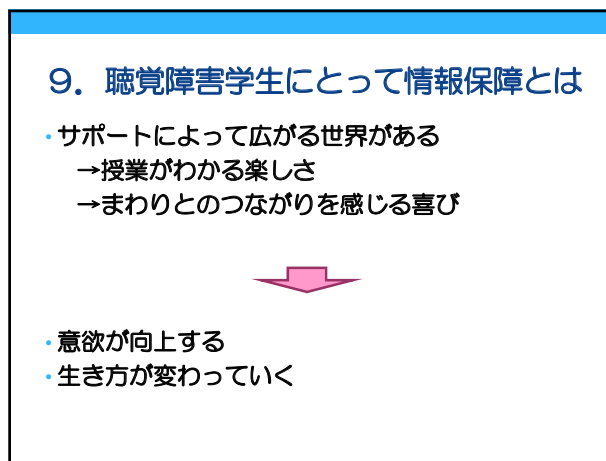
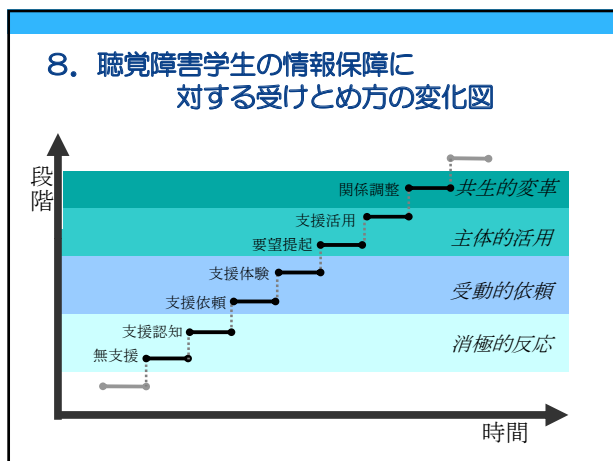
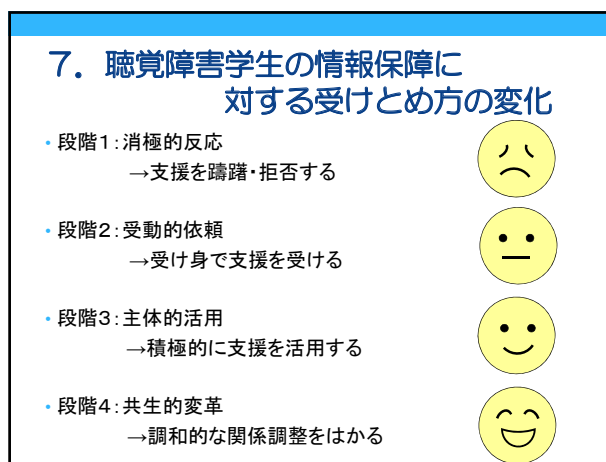
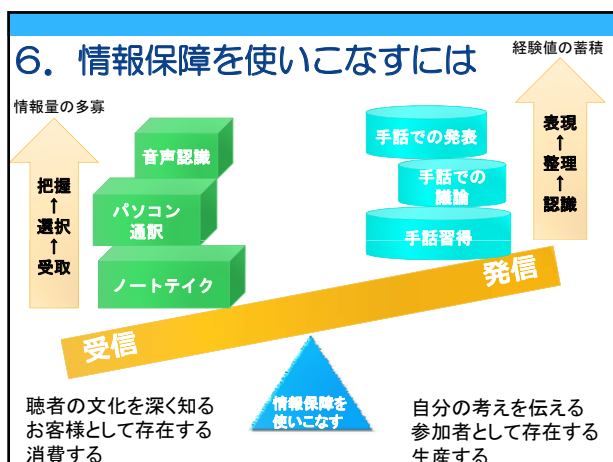
- 情報の量が多いか？少ないか？
  - 情報の取捨選択ができるか？
  - 話を推測する必要があるか？
  - 緻密な判断ができるか？
- 手話通訳にもNT型とPC通訳型がある

### 4. 情報の質量による影響



### 5. それぞれの手段の相違





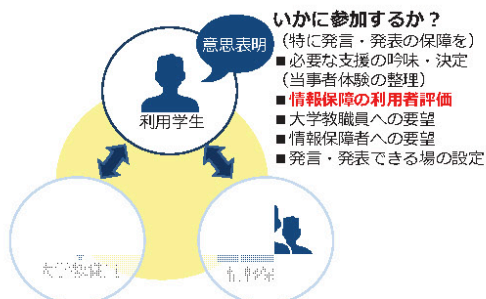
## 情報保障者と大学教職員 との協働について

宮城教育大学  
松崎 丈

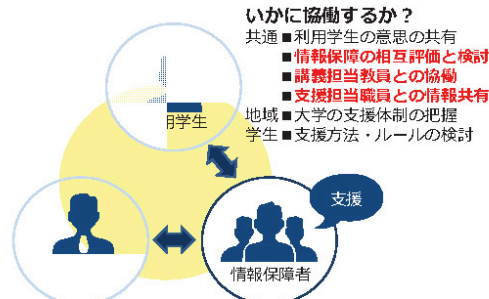
私たちが目指す「協働」とは？



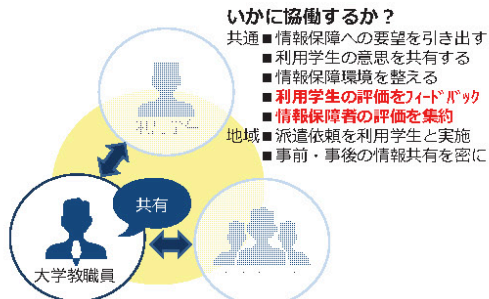
利用学生の「意思表示」が協働の出発点



情報保障者としての「協働」とは？



大学教職員としての「協働」とは？



## 大学教職員のための地域通訳依頼ハンドブック —よりよい連携を目指して—



本冊子は、大学での情報保障を地域通訳者に依頼する際の方法や、知っておくべき情報をまとめたハンドブックです。支援を担当される大学の教職員の方はぜひお役立てください。本冊子が大学と地域通訳者が協働し、聴覚障害学生も平等に参加できる情報保障支援体制を築く一助になることを願っています。

- <目次>  
はじめに  
本冊子の構成について  
1. 地域通訳者って？  
1) 自大学の学内支援体制の状況を踏まえて依頼を検討する  
2) 地域通訳者の養成や派遣を把握しておく  
2. 地域通訳をどのように活用していくか？  
1) 依頼の流れ、特徴を知る  
2) 依頼先担当者や協働して支援する  
3) よりよい通訳のために地域通訳者との情報共有を密にする  
4) 利用学生とともに支援を作りあげる

## 【分科会 4】

### チバリヨー！最初で最後の九州・沖縄開催としないために —地区の実践から学ぶ—

報告者：福岡教育大学 太田富雄

## 企画趣旨

2040 年までに 20%の人口減、消滅可能性のある自治体が 136 あると言われている九州・沖縄。大学進学率は短期大学も含めてようやく 40%を越える程度で、他地区に比べて低い上、大学の定員充足率が 100%を切っている。大学数や在籍数も減少する懸念がある状況で、負担の大きい障害学生支援はきちんと行われていくのだろうか。

本分科会では、①地域の大学間の連携、②地域の高校と大学間の連携、の 2 つを討論の柱に据えた。①では、大学間で情報を共有したり、支援学生の養成に取り組んだり、他大学への支援を行ったり、先進的な取り組みを行い成果をあげている大学からの報告をもとに、②では、聴覚特別支援学校が大学と協力して情報保障の研修会を行い、通常校の聴覚障害学生への情報提供に取り組んでいる特別支援学校からの報告をもとに、連携の意義や役割、課題等について議論を深め、九州・沖縄地区の実践から学ぶことを明らかにした。

## 内容（話題提供）

### 1. 横山正見氏（沖縄大学学生支援課障がい学生支援コーディネーター）

今日は、障害者差別解消法や組織体制よりも私たちが行っている支援活動の内容をお知らせしたい。まずは沖縄大学について。大学としてはありふれている規模・体制かもしれないが、沖縄にある大学ということに意味がある。必然的に社会問題に翻弄され、一方で積極的に取り組むことになる。その中で本学は地域、特に沖縄社会で必要とされる大学を目指し、さまざまなマイノリティ、社会問題に取り組んできた。聴覚障害について言えば、沖縄では 1964～1965 年に風疹の流行により多くの聴覚障害児が生まれたが、その内 10 名弱が沖縄大学に入学した。当時は聴覚障害学生が大学に入学すること自体が珍しかったことや支援技術が普及していなかったこともあり、サポートができなかった。この時の反省を生かし、2004 年から大学が責任をもって取り組むことになる。

聴覚障害学生への支援は講義での情報保障が基本だが、それ以外にも勉強系と交流系の企画を立て、学生が役割を担い企画を運営している。交流系の中心は定例会と他大学との交流で、聴覚障害学生と支援学生の日常的な関係づくりのきっかけを提供したいと思っている。これらの企画の目的は、個別の関係を強くし全体の関係を作ること。また、障害学生も支援を一方的に受けるのではなく、役割分担をしてお互いに役割のある関係にすることである。

また、コミュニティ作りを一番に考え、講義以外のさまざまな場面で情報保障がある状態を作り誰もが情報に取り残されないようにしている。スライドで紹介した企画（スポーツ大会、卒業パーティ等）、全てに文字通訳を用意している。そういった取り組みの積み重ねで、情報保障があることが当たり前の環境を目指している。

続いて、沖縄県内の状況について。県内 9 つの高等機関のうち 4 校で聴覚障害学生支援を



写真 横山氏

行っている。ただし大学間で聴覚障害学生の在籍には偏りがあり、支援学生も不足している。国公立と私立を比べると私立大学のほうが在籍が多い。県内の障害学生の在籍率を見ると、私立大学は約 0.5%、国公立では約 0.25%と、私立大学の方が高かった。つまり、障害学生支援のニーズとしては私立大学の方が高い。しかし、学内体制としては障害者差別解消法のこともあり、国公立の方が進んでいる印象がある。今後は沖縄県全体での聴覚障害支援のコミュニティづくりをしていきたい。

ただ課題もあり、現在は文字通訳が中心のため、新たな支援メニューとして手話通訳をつけることが今後の課題である。さらに、講義以外のプライベートな場面での情報保障にどのように取り組めるかも課題となっている。簡単な解決方法はないが、手話・筆談・手話通訳・文字通訳などさまざまなコミュニケーションが保障された拠点の整備、手話の普及、聴覚障害者のコーディネーターとしての雇用等、さまざまな試みからコミュニケーションの方法を広げられればと思っている。

最後に、障害学生支援は大学の特色や地域の特徴ともつながっているが、その際に当事者の課題や意見などに、新たな視点が含まれていると考える。担当者としては辛い話を聞くことになるかもしれないが、それをヒントと受け取れるようにしたい。大切なことは、当事者が活動の中心にすることである。そういった関係が学内で当たり前になれば、あらゆる構成員の過ごしやすい大学になると思う。支援活動は心を込めて行うことで、学生も私たちも成長する。支援活動は生き物のように伸びると感じる。大学の責任として取り組み、なくさないよう、継続できるようにする必要があると考える。

## 2. 木村素子氏（宮崎大学教育文化学部准教授）

私からは本学の取り組みの他、私立短大への支援事例について話したい。私立短大への支援は、大学組織というよりも、私個人の人とのつながりで始めたものではありまだまだではあるが、皆様からアイディアもいただきたいと思っている。

まず、宮崎大学について紹介したい。2007 年の着任以降の 9 年間、支援が必要そうな聴覚障害学生が 3 名入学し、うち 2 名の学生に支援をした。全学的な支援体制整備の契機となったのは、2011 年頃から、車いすユーザーの研究をしている工学部の先生の所へ肢体不



自由の介助度の高い学生が毎年入学するようになり、熱心な先生方のもと支援事例の蓄積がなされ、さらに障害者差別解消法施行に向けて障害学生支援室の設置や、今年度の専任教員の配置へとつながってきた。また、基礎教育科目として障害者全般と支援についての講義「障がい者支援入門」が開かれるようになるなど、基本的な体制整備は済んでいる段階といえる。しかし、これから話す他大学への支援については組織的に取り組んでいるものではない。



写真 木村氏

他大学への支援の概要について。ある私立短大に在籍する聴覚障害学生に対し、今年度5月からノートテイクによる支援をスタートした。本学の支援学生のうち比較的時間の融通がきく4年生3名が支援を担当し、車で15分かかる場所へ前期と後期とも週2コマ2名ずつ派遣した。支援を始めたのは、もともと面識のあった保護者、親の会とのつながりから。入学前に相談があり、本学からの支援学生派遣の可能性を伝えたところ、入学後に当該私大の教務担当教員から連絡があった。その後派遣科目やコマ数を調整した。

前期については、ノートテイクをつけていない授業ではFMマイクを使用した。やはり週2コマのノートテイクでは足りないため、後期は学外の要約筆記者にも依頼した。学外の要約筆記者については保護者が謝金を支払ったようだ。本学の学生については、当該私学が謝金と交通費を負担してくださった。

課題として、当該私大短大は授業のコマ数が多く詰まっており、学内でノートテイク要員を募集するのはほぼ不可能と感じられた。また、ノートテイクには講義内容の専門知識も必要であるが、支援をしていたコースは本学の支援学生と専門が異なっていたので初めは手こずっていた。一方、当該私大のように障害学生の支援実績がほとんどない大学の場合、どう支援するか知識もなく、支援に対する考え方の違いを感じた。私立大学の場合は合理的配慮の提供は努力義務であり、支援経験がなく支援に負担感のある大学の場合は、理解を促すための根拠として不足するよう感じている。

ノートテイクを始めて1週間後、関係者で面談を実施したが、認識のずれが大きく、保護者もコーディネーターも私も戸惑った。しかし、面談によって改善点がわかってよかったと思う。学生個人とも面談を5月、11月の2回実施したが、2回目には聴覚障害学生が支援の要望やその伝える方法が分かってきて、成長が見られた。聴覚障害学生に今後の要望を尋ねたところ、ノートテイクが当たり前になって欲しい、ノートテイクを全コマにつけて欲しいといった声が寄せられた。本当にその通りでどうにか方法を考えられないかと思っている。ここで支援を担当した学生から他大学で支援を行うメリット・デメリットについて手短かに話してもらいたいと思う。

＜支援担当学生の杉尾早紀氏／宮崎大学教育文化学部特別支援教育コース4年＞

本学から支援先の大学まで車で15分程の移動時間があり、その移動時間を支援学生同士の打ち合わせや反省に充てることができたのが、他大学で支援を行うメリットといえると思う。移動時間中に1つの目的に向けて一緒に考えることができるので、有意義な時間になっている。一方、デメリットとしては、短大のため休み時間が10分と短く、パソコン等のセッティング準備が間に合わなかったり、部屋の鍵が開いていなかったり、前の授業の学生がいたりして準備が終わらないまま授業開始ということがあった。今後はそういった点も含めて大学側の受け入れ体制が進むといいなと思っている。

木村／まとめとして。短大の場合は支援学生の確保が困難な状況がある。一方で国立大学は地域貢献も必要と言われているので、その1つとして位置づけられないかと考えている。

### 3. 佐々木順二氏（九州ルーテル学院大学人文学部准教授）

今回は熊本県における聴覚障害学生支援に関わる地域連携について報告したいと思う。まず、地域連携を以下の4つの場面に分けて報告したい。1つは聴覚障害関係団体との連携（連携①）、2つめが大学同士の連携（連携②）、3つめが大学を統括する組織としての大学コンソーシアム熊本としての連携（連携③）、最後に大学と小・中学校、特別支援学校といった他の教育機関との連携（連携④）である。

まず、連携①について。聴覚障害学生が入学した場合、授業に手話通訳を派遣してもらったり、養成講座の講師を依頼したりすることがある。熊本県は、熊本県聴覚障害者情報提供センターを中核として、大学が聴覚障害学生支援を進めてきたところに特徴があるかと思う。

次に連携②について。聴覚障害学生への支援は経験の継承も大切である。先行大学での経験の蓄積を次の大学の支援に生かすために、近隣大学同士で情報交換をしている。例えば熊本学園大学で支援に関する講座を開く際に、先駆けて支援を行っていた熊本保健科学大学の教員が講師を担当したり、本学でも聴覚障害学生を受け入れるにあたって、この二者の大学から情報提供を受け、それをもとに支援体制を整えたりといった連携が行われている。



写真 佐々木氏

次に本学が受けた支援を紹介したい。昨年度、熊本大学の先生が兼任講師を務める講義で、同大学のノートテイクの学生をゲスト講師として招き、本学教職員も参加してノートテイクとしての経験や実践について話してもらうことができ、実際の作業へのイメージを持つことができた。熊本大学には1名の聴覚障害学生が在籍している。そこで支援のサークルができ、学生主体で進めている。学生が自分たちの力で説明でき、すばらしいと



思った。

また、大学間連携として、本学が主催して障害学生支援についての講演会を開催した。2013 年度に本学に重度重複障害の学生が入学したが、入試から入学後の修学支援のプロセスで、体制が整っていった。それ以降大学主催で毎年講演会を開いて、学校関係の方々を呼び、障害学生支援の方法を知ってもらう機会としている。これまでは講演形式が多かったが、今年は、熊本県内の 4 大学と福岡教育大学の障害学生支援担当の教職員によるパネルディスカッション形式で情報交換を行った。

次に、大学コンソーシアムの連携について。2010～2011 年度に「聴覚障がい児童・生徒支援者育成事業」を行った（連携④）。大学間で連携して地域の難聴学級等に在籍する聴覚障害児童・生徒を支援するために実施し、参加者は 30 名程度だった。支援対象者は 1 名だったが、先進的な取り組みとして評価できると思う。また、「障がい学生支援連絡協議会」を 2015 年度から開催している（連携③）。この連絡協議会は、現在は発達障害学生への支援を中心としているが、今後聴覚障害学生支援においても重要な役割を果たしていくと思う。

最後に、熊本県での支援の特長について。1 つは、地域の聴覚障害関連団体の活動がとても活発で、大きな役割を果たしている。また、大学間連携のしやすさがある。コンソーシアムがあることもあり、大学同士の連携が取りやすい環境という状況もある。課題は、各大学の障害学生への支援システムを持続させることが挙げられる。大学としての支援は整備されつつあるが、聴覚障害学生本人のエンパワメントや支援者のスキルアップや聴覚障害のある方との深い関わりは今後の課題かと思う。このあたりはコンソーシアムや連絡協議会が基盤となって進めていければと思っている。また、小中学校や高等学校、特別支援学校への支援についても、大学からできることがあるのでは、と思う。

#### 4. 早川 就氏（福岡高等聴覚特別支援学校教諭）

今回は高大連携について話したい。「聴覚障害学生情報サポート講習会」を 11 年前から開催しているが、大学に送り出す側として、不安があったことから取り組み始めた。以前は聾学校から大学に進学する学生は福岡県にはほぼいなかった。当時の聾学校の生徒の意識は、努力すれば専門職に就けるという程度だったと思う。また、聾学校の先生方も大学進学は難しいと考えていて、福岡では能力があっても大学に行くという選択が困難な状況であった。

平成 10 年に特殊教育学会に参加し、関東聴覚障害学生サポートセンターの実践発表を聞いたり、筑波技術大学の大杉豊先生にお会いしたりしてカルチャーショックを受け、また、地域格差を感じた。そこで教師が情報を知らないのは、罪に等しいと強く感じた。生徒たちに情報提供をするために、この会を始めた。



写真 早川氏

第1回 PEPNet - Japan シンポジウムが開かれたのと同じ年に、この講習会を始めた。多くの人に声をかけ、手話通訳、情報保障に関わる人たちを集めた。太田富雄先生や、当時筑波技術短期大学の先生、四国学院大学の先生等の報告もしていただいた。とにかく聴覚障害学生の高等教育に関する情報を知らせようと思ったが、私もよくわからない中で、情報保障を得られる大学がどこなのかも知らなかったため一緒に学習していった。知っている人をたどって次へ進める手探り状態だった。当時文字通訳も一般的ではなかったが、講習会で紹介していただいた。

第2回以降は福岡教育大学教育学部と一緒にやっていく形となった。当時は通信機器も未発達だったが、会議室と別の部屋を遠隔でつないで手話通訳を試行的に行ったりもした。また3年目はネット会議システムを使い、熊本聾学校の先生方にもご参加いただいた。

その後徐々に PEPNet-Japan の活動が活発化し、大学が直接問い合わせるケースも増えていったように思う。また、本校の卒業生が NPO 法人障がい者相互支援センターMCP を立ち上げ、聴覚障害学生支援を始めたこともあり、この頃から、より地域での取り組みを紹介していく形になっていった。大学の関係者については、福岡教育大学を中心とした PEPNet-Japan を活用してもらった方がいいのではないか、本校の役割はまた別のところにあるのではないかと考えた。

そこで昨年から名称を「聴覚障害学生支援セミナー」と変え、高校生向けのものにした。今年は、本校卒業生を中心に、入試の情報や部活動についてなどについて、学生の立場からの話をしてもらっている。

最後に11年間を通しての成果について。学生の体験発表はやはり意味があると思う。また、なによりも本校の生徒にとっては、卒業後のイメージが明確になったことが挙げられる。結果、大学進学者が現在増加した。課題としては、本校の役割が変化してきたこと。大学進学者は聾学校よりもいわゆる普通校の卒業生の方が多いと思うが、聾学校でもそういった学生の在籍状況を十分把握しきれていない。今後はそういった生徒たちにも大学への道筋をつくるのが課題と思っている。最後に、人を通して、熱を込めた情報を伝えなければ、人は変わらない。今回参加できたよかったと思うのは、この場にいる皆さんと会えたことだと思う。

#### 質疑応答・討論（一部抜粋）

**木村（講師）**／熊本は地域の連携が非常に行き届いていることに驚いた。どうしたら、このように情報共有ができるのか。過去にどこでどういう支援実績があるといったことが分かっていたから、連携ができたのか。それとも、たまたま近所の大学に問い合わせたら、支援実績があつて情報が共有できたということなのか。

**佐々木（講師）**／十分な答えになるかわからないが、熊本県では、他の大学での支援実績に関する情報を情報提供施設が把握していた。本学でも他の大学でどのような支援実績があつたのかを情報提供施設を通じて得ることができた。また、大学が熊本市周辺に集中し



ていて大学関係者の連携もしやすい条件にあると思う。

**坂口（九州ルーテル学院大学学生支援センター）**／本学の学生支援センターは障がい学生サポートルームも兼務している。熊本では学生部の事務連絡会があり、そこで各大学の学生の悩み事への対応を考えたりといった、横の連携がもともとあったことも大きいと思う。

**横山（講師）**／早川先生に聞きたい。聴覚障害学生が進学したことがある大学とそうでない大学の差があると思う。沖縄では、沖縄大学と沖縄国際大学に進学する聴覚障害学生が多く、他の大学にも進学して欲しいと思っている。高校の先生立場としては、やはり環境が良い大学を紹介されることが多いのでしょうか。

**早川（講師）**／現在進路指導は担当していないが、まず必ずオープンキャンパスに行くように促している。その際教職員の対応や電話対応について見るように言っている。確かに情報保障が進んでいる大学はメリットがある。しかし、初めて入学する聴覚障害学生となる場合は、自分の力で切り開く必要があり、システムが出来る頃には卒業するとしても、その苦労は確実に本人の糧になっていると思う。その後の生きる力が確実に違ってくる。なので生徒によっては、初めて聴覚障害学生を受け入れる大学であっても勧めるかもしれない。その場合一番大きいのは、大学の中もしくは近隣にキーパーソンがいること。それであれば冒険させることがあるかもしれない。

**横山（講師）**／ありがとうございます。そうするとやはり大学の関係者が連携し、困った時に助け合えたり研修したりする機会がとても大事だと思う。

**太田（司会）**／沖縄での地域のネットワークでは、障害学生支援に関わる人だけではなく、事務官やFDの合同研修なども取り組んでいるのかうかがいたい。

**横山（講師）**／中心は担当者だが、その周辺の方にも来てもらえるようにしている。今年度PEPNet-Japanと地域支援に取り組んでいるが、2月に行う研修会では、合理的配慮や障害者差別解消法をテーマに文部科学省や他大学の先生方を呼ぶ予定。障害学生支援の担当者は各大学で1～2名程度で発言力もあまりないことが多い。障害学生支援の重要性を訴えるために、障害学生支援の担当者以外の学長や副学長などにも参加してもらえる研修会にしたいと思っている。

**参加者（支援団体スタッフ）**／主に東京で外部から大学等に対して聴覚障害学生支援に関する活動を行っている団体に所属している。以前熊本の要約筆記者から要請があり、大学での連携入力に関する講師を派遣したことがある。1つお聞きしたいのは、木村先生が、他大学へ情報保障者を派遣しているとのことについて。支援者の余剰がある大学、不足している大学でうまく連携したいと思っている。何がネックになるかというと、受け入れる側の手続きが難しい。保険や機械の準備、細かい連絡事項などが壁になっている。特に受け入れる側の大学の準備について、他大学から支援者を受け入れるにあたって、資料の用意

や休講の連絡、車移動の際の事故の保険などについてご紹介いただければと思う。

**木村（講師）**／ご指摘の通り、支援を始めるとき、特に保険については難しかった。支援学生が所属しているのが教員養成の学部だったので、学外で学習をする内容の必修科目があり、その範疇と考え、本学学生が加入している保険を使えと事務にも確認した。それを使わないとなると有償ボランティアが利用できるいい保険がなかなかなく、教職を取らない学生には保険を適用できなかったと思う。また、予算については先方の事務職員が確保してくれた。資料については各授業者が準備して当日配布したり、教科書のコピーをいただいたりした。担当者から、授業者への配慮願いが配布されていたようだ。連絡についてはまだ十分な体制が整っておらず、休校の場合も連絡が来ていなかったり、事務職員が休みで支援学生の連絡先が不明だったりということがあった。

**参加者（大学教員）**／木村先生のご報告について。私が以前所属していた大学でも8年ほど前に短大への支援を行っていた。やはり短大はほとんどが必修科目で、上級生が下級生の支援をすることはできない状況があった。そこで、本学の学生が支援に入ったが、学園組織であったため関連校の保護者や卒業生を含めて支援者を探すことができた。また、私大の合理的配慮は努力義務なため進まない、というのは表面的な理解だと思う。努力義務は「しなくていい」のではない。私立大学は努力する義務があるのが前提。努力義務だからと行わない場合は、行政処分として過料が科せられるようになる。以前FDが法的な義務となったときに、文科省の省令レベルでしかなかったため罰則がなかったが、障害学生支援に関してはまずは文科省から指導があり、それに対し虚偽の報告をした場合行政罰となる。障害者権利条約に日本は批准しているのだから、私立大学は努力義務だと安穩としてはいられないはず。この点については共通認識を持たなくてはいいと思う。

**参加者（大学学長）**／この分科会は九州・沖縄地域に焦点を当てたものだったが、関東圏でも進学率も低く大学の存立も危ういところが多いことから情報保障の負担をどうカバーするかそれなりの苦労があることが共通していると思う。そのような大変な中、ここまで至るまでのハンディにはどのようなものがあつたのかをうかがいたい。早川先生のご発表で、10年前は大学に進学する意識がなかったとお話だったが、本学では10年ほど前から近隣のろう学校から体験授業として10名前後の進学希望者が来て、ノートテイク等をつけて授業を体験してもらっていた。また私が担当するボランティア関連の授業でも障害のある高校生から自身の体験や将来の夢等を発表していただくような取り組みをしてきた。こう考えると関東圏と九州圏の差を今回の発表からはあまり感じないのだが、そのあたりはクリアしたとお考えなのか地域の環境条件についてどのようにお考えなのかうかがいたい。

**太田（司会）**／2つの質問があったと思う。まずは、これまでどのようなハンディを乗り越えたかについて順にご回答いただきたい。

**横山（講師）**／障害学生支援の初めは人による支援。動く先生、職員、学生で何とかでき



るかもしれない。しかし、異動や卒業で人が入れ替わるのが大学なので、どう組織化するかが大事だと思った。特に支援の中心になるコーディネーターの待遇も大事だと思っている。沖縄県内には正規職員のコーディネーターはいない。また支援技術の問題で、手話通訳は支援学生ではできないことが多い。しかし地域の社会資源がそれだけあるのかという問題もあるし、かといって他県から協力してもらうのも難いため、地域とのつながりも現在の課題だと思っている。

**木村（講師）**／本学の課題は、毎年聴覚障害学生が入学してくるわけではないので、支援技術、体制の深まりが不十分であること。逆に宮崎で進んでいるところもあり、県立高校では聴覚障害のある高校生にノートテイクがついている。宮崎市等でも小・中学校に支援者が派遣されている所もある。そういったところとも連携を深める必要があると思っている。また、私大について先ほどご意見をいただいたが、先生によって対応に温度差があり、相手への説明の仕方を考える必要があると感じている。

**佐々木（講師）**／本学も聴覚障害学生が継続して入学してこない状況がこれまでもあった。障害学生支援として広く考えれば各大学で体制は整いつつあると思うが、障害は一括にはできない。聴覚障害学生固有のニーズもあると思うので、そういったところまで丁寧に各大学で共有していくところに課題があるかと思う。聴覚障害や手話などについて学内で理解を深める必要があると思っているがなかなか難しい面もある。本学はミッション系があるので、比較的理解はされやすい土壌はあると思うが理解を広めていくのはまだこれからのところもある。課外で手話サロンを開いたりもしているが、ボランティアの延長として行っている程度である。昨日のアフタヌーンセッションで、ある大学では手話サークルがないことが特長で学生それぞれが手話ができる環境を長期間かけて整えてきたという発表を聞いたが、そういった環境にはやはり人が必要で、聴覚障害学生も継続的に入学してもらいたい。しかし、都市圏の大学であれば比較的學生が集まりやすいかもしれないが地方ではそれが難しいというのが厳しいところかと思っている。

**早川（講師）**／私からは 2 点目の質問にお答えしたい。昨日、アフタヌーンセッションでいろいろな情報をお聞きした。そういった情報を我々教員が活用しなくてはと思っている。今のところは筑波技術大学から来ていただき、模擬授業をやっていただいたり、本校の卒業生の入学実績のある大学に訪問して見学したり卒業生や担当の教員から説明を聞くことを行っている。また、夏休みに高等部 2～3 年生には積極的にオープンキャンパスに参加するよう促し、派遣通訳も自身で依頼するなど体験的な練習を学生にさせている。本学の生徒の過半数は就職組なのでまだ学校全体の取り組みとしてやりにくい面があったり、大学に協力を意識的に働きかけても話の持って行き方が若干難しいところもある。だからこそ人的つながりが一番大切だと思っている。

**参加者（大学職員）**／事務職員として障害学生支援に携わっている。木村先生に質問したい。2005 年 10 月から基礎教育科目として「障がい者支援入門の講義を開講されたとのこ

と。全学的な教養教育科目として開設されているのかと、卒業必要単位になっているか、また必修か選択かもうかがいたい。

**木村（講師）**／「障がい者支援入門」は、1年次の選択の全学部の学生が取れる講義となっている。卒業必要単位かどうかは、後日回答させていただきたい。

**太田（司会）**／地域のリソースを作るという話がありましたが、熊本ではろうあ協会との連携がスタートなんですよ。今回のシンポジウムも会場借用の際福岡県聴覚障害者協会の協力をいただいた。

**佐々木（講師）**／2004年度聴覚障害学生の入学が決まった際、地域のろうあ協会を通じて手話通訳者を週2コマ派遣してもらうことから始まり、その後まもなくして要約筆記者の配置も始まったと聞いている。それ以前にも、熊本県内で聴覚障害学生が入学したケースはあったと思うがそこまでは調べられなかった。

**太田（司会）**／これから地域のリソースを活用したいと思われる方は、聴覚障害者情報提供施設や聴覚障害者協会に連絡を取っていただければと思う。それから聴覚特別支援学校も支援対象から大学は除くとは書かれていないのでぜひ連絡をと思う。最後に先生方から一言ずついただきたい。今日は特に早川先生の「熱を込めた情報を与える」という言葉が印象的だった。福岡は、いつも熱意ある先生方が動かしているのだと思う。

**横山（講師）**／障害学生支援、聴覚障害学生支援は本当に横のつながりが財産だと思うので、PEPNet-Japanの協力をいただきながら県内で横の繋がりを育てていきたい。

**木村（講師）**／PEPNet-Japanのシンポジウムに初めて参加し、こんなにさまざまな所でさまざまな方が活動されていると知った。地方大学でできることは限られているので、こういった機会をうまく利用しなければと思った。PEPNet-Japanのシンポジウムだけではなく、沖縄のように自分の持ち場でイベントをするなどして人を集めたいと思う。

**佐々木（講師）**／最後に一言伝えたいことは「本人参加」と「主体性」というところ。昨日のオープニングセレモニーも多くの大学の聴覚障害学生たちが自分の言葉でアピールをしていたのが感慨深かった。やはり熊本もそうだが、聴覚障害学生が自分たちでやるという意識を持つことが大事だと思う。大学に勤めている立場としては大学で研究、教育していることを通し、地域の聞こえない人たちへの教育の充実や大学を選択肢の一つとして伝えていけるような取り組みをしたい。当事者だけでなく支援学生や教職員も主体となって一緒に作っていくことが少しでもできればと思っている。

**早川（講師）**／「熱を加える」のフレーズを考えたのは、例えるなら情報は冷凍されたピザと同じでそのままでは、学生も保護者も食べないし動かない。そこに熱を加えて温めて食べられる状態にして出すのが教員の役目と思った。自分自身も時々きちんとしたお店に行っても食べないと興味がなくなってしまう。今回参加して、さまざまな大学の状況に刺激を受けて、また活動につなげたいと思った。今回福岡で開催されるということで卒業生や3



年生にはほぼ無理矢理呼びかけて何名か参加しているが、実際にこのような場所に連れて行って、自分を通してだけではなく、直接触れさせて熱を伝えるのも教員の役目と思う。

### 到達点と課題

連携できている所とそうでない所の地域格差が改めて明確になったが、先進地の取り組みが参考になり、やる気を与えてくれたので、方向性が見えてきたと思う。制度や支援体制、予算が整ったとしても、実際には支援者である学生の意識・力量にかかってくるが、障害当事者や支援学生たちが明確な課題意識を持って自主的に取り組むようになってきている。今後は、支援技術に関する講義を遠隔学習の対象として単位互換できるようにするなど、教職員・学生の交流等を図り、連携を広めて深めていくことが課題である。



写真 分科会4の講師  
(左から、早川氏、佐々木氏、木村氏、横山氏、筆者)

【特別企画】

公開事例検討会

どうする？どうなる？合理的配慮—事例から読み解く障害者差別解消法—

報告者：筑波技術大学 白澤麻弓

企画趣旨・内容

障害者差別解消法の施行が平成28年4月に迫り、全国の高等教育機関でもその対応に向けた体制整備等が加速している。これまで関係者の善意で支えられてきた聴覚障害学生支援も法に基づいた実施が求められることとなるが、提供すべき「合理的配慮」には、すべての場面で画一的に用いることができる基準があるわけではなく、個別の事例にあわせて対応を検討することが必要とされている。これは、障害学生の個別の事情を反映した支援を行っていくために必要な体系であるが、支援を行う大学側にとっては難しさもつきまとい、「不当な差別的取扱い」、「合理的配慮」、「過重な負担」といった言葉が一人歩きしている現状もある。こうした問題を打開し、今後、法に基づいて効果的な支援を進めていくためには、法律に関する知識を普及させていくとともに、関係者間で十分に議論を積み重ねていく必要があると言えるだろう。

そこで本企画では、聴覚障害学生支援を進める上で、ありがちな事例を複数取り上げ、「どこからが不当な差別的取扱いになるのか」、「どこまでが合理的配慮で、どこからが過重な負担なのか」といった疑問に答えるとともに、判断が難しい問題について、事例に基づいてディスカッションを行うこととした。ここでは、聴覚障害学生支援の最前線で支援のあり方と向き合い続けている先生方の他に、法律の専門家である弁護士を講師に迎え、個々の事例に対してご意見を伺うとともに、障害者差別解消法を理解するためのポイントについて解説をいただいた。以下、当日の流れにそって、ディスカッションの概要を報告する。



写真 全体会の様子

障害者差別解消法を理解する上で重要なキーワードの一つに「不当な差別的取扱い」がある。これは、①障害者に対して正当な理由なく、障害を理由に財・サービス等の提供を拒否・制限することや、②障害者でない者に対して付さない条件をつけることで、障害者の権利・利益を侵害することを指す。こうした不当な差別的取扱いが問題になる事例として、以下のようなものがあげられる。

【事例1】 重度の聴覚障害学生から入学試験（面接）で手話通訳をつけて欲しいという要望がありました。本学は、聴覚障害学生の受け入れ経験がないため、受験を断ってもいいでしょうか？（大学職員）

【事例2】 重度の聴覚障害学生から入学試験（面接）で手話通訳をつけて欲しいという



要望がありました。自身で手配することを条件に受験を認める形でよいでしょうか？（大学職員）

このうち、事例1については明らかな「不当な差別的取扱い」であって、法律違反と判断される可能性が極めて高いケースである。藤木弁護士によると、こうした事例は「100%アウト」のことで、例えば学部等で協議の上、受験を断るといった判断が出たものであったとしても、また医学部や工学部など、受け入れ後の合理的配慮に難しさがともなうケースでも、「受験の機会さえ与えないというのは、違法と言えるだろう」とのことであった。



写真 村田氏

一方、事例2は「自分で手話通訳を連れてくるなら受験を認めますよ」と条件を課すものであり、やはり不当な差別的取扱いにあたる例と言える。これについて、村田氏からは「試験の公平性という側面から見ても、口頭試問などの場面で本人が連れてきた手話通訳者にそのまま依頼をする形は望ましいとは言えず、大学側が責任を持って質の高い手話通訳者を用意すべきだと思う」との意見も出されていた。ただし、本人から「自分に合う手話通訳者を連れて行きたい」との要望があった場合は話が別で、この場合は本人との相談でどのような形が望ましいか検討していく必要があるだろうとのことである。

村田氏によると「本来、障害学生の受け入れと、合理的配慮の提供は一本の線で繋がっているべきもの」とのことです。相談があった時点で大学側は「何ができるか？」を考えるべきものである。しかしこの事例では、文面を見る限り、そうした検討がないまま、単に「受験を断る」との選択をしているように見受けられ、やはり問題が大きいと言えよう。

障害者差別禁止法を理解する上で重要なキーワードの二つ目は「合理的配慮」である。合理的配慮とは「障害のある者が、他の者との平等を基礎としてすべての基本的人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための適当な変更及び調整」と定義づけられている。「聴覚障害学生が授業で情報を得られないのは、本人に聞く力がないからだと考えられがちである。しかし、必要な配慮がなされていないために、このような社会的障壁が生じるのであって、この社会的障壁を取り除くために提供するのが合理的配慮（松岡氏）」とのことである。合理的配慮にまつわる事例には以下のようなものがあげられる。

**【事例3】**私の授業を履修予定の聴覚障害学生から「ノートテイカーをつけて受講したいので、ノートテイカー2名も教室に入ってよいか」という質問がありました。受講生以外の入室は禁止にしているので、ノートテイカーも同様と考えてよいでしょうか。（大学教員）

**【事例4】**私の授業を履修している聴覚障害学生から「ノートテイカーのために、投影しているスライドの資料が欲しい」という要望がありました。聴覚障害学生だけに渡すと不公平なのでできないと断っていいでしょうか。（大学教員）

合理的配慮の内容を決定するにあたっては、①求められている配慮が「必要」かつ「合理的」と認められるか？、②授業の内容や目的の「本質的変更」にあたらないか？、③「過重な負担」にあたらないか？の3点を基本に判断することになる。松岡氏によると、今回のケースの場合、①この学生がノートテイクを利用することで社会的障壁を取り除くことができるなら「必要性」があると言えるし、②ノートテイクが入っても授業の本質がゆがめられるとは考えられない。また、③ノートテ



写真 松岡氏

イクが入ることで、教員に過重な負担が生じるとも思えないため、ノートテイクを入室禁止にすることは、「合理的配慮の否定」ととらえられても仕方がないであろうとのことである。同時に、藤木弁護士からは「ノートテイクの入室を禁止することは、『メガネをかけて教室に入ってはいけない』というのと同義」とのことで、違法と判断されるだろうとのことだった。

一方、事例4については、「資料を提供するという行為がノートテイクの実効性を高めるものになると考えられるため、合理的配慮の一部としてぜひとも実施をして欲しい内容（松岡氏）」とのことだった。パソコンノートテイクも手書きノートテイクも、それだけでは十分に情報を伝えられるというわけではない。このため、「資料があつてはじめて100%の情報に近づくのであれば、当然、資料を渡すことが合理的配慮の範囲に入ってくる」とのことである。これについては、池谷氏からは「本来授業というのは教員が学生に内容を伝えるべきものである。ノートテイクはこれを補助してくれているのであり、資料があることでノートテイクがスムーズに行われるのであれば、むしろ進んで渡すべきものではないか？」との指摘もあった。また、藤木弁護士からは「不公平ではなく、これこそが合理的配慮」とのことで、やはり実施すべき内容との見解が示された。ただし、教員の中には資料を配らない方針にしている方もいると思うので、ノートテイクに配布した資料の取り扱いについては、ルールを取り決めるのも一案とのことである。

さらに、合理的配慮の提供において難しいのが「過重な負担」や「本質的変更」に関わる判断であろう。これについては以下のような事例が考えられる。

**【事例5】** すべての授業に情報保障を付けてほしいと学生課に要望したところ、大学からは、これまで聴覚障害学生の受け入れ経験がないから難しいとの回答がありました。受け入れ経験がない大学に支援を依頼するのは、過重な負担なのではないでしょうか。（聴覚障害学生）

**【事例6】** 普段パソコンノートテイクによる支援を受けていた聴覚障害学生がゼミ形式の授業で手話通訳を希望してきました。手話通訳は外部団体に委託せざるを得ず、高額の予算がかかります。このような支出は本学にとって「過重な負担」になるので、断つてもいいのでしょうか。（大学職員）

このうち、「過重な負担」について池谷氏からは、『現時点における過重な負担』という



意味合いでとらえなければいけないだろう」との指摘があった。すなわち、「合理的配慮というのは基本的には実施することが前提にあるもので、大学に課せられた義務である。しかし、明日からすぐに実施して欲しいといわれても、どうしてもできないことも存在するため、これらが『現時点における過重な負担』になると考えられる。しかし、これをそのままにしておくのではなく、一歩でも実現に近づけるように努力することで、今日では『過重な負担』が生じることであっても数年後には当たり前に行うことができる可能性がある。こうした可能性を秘めた言葉とみるべきである」とのことである。



写真 池谷氏

このような考えに基づいて事例 5 を見てみると「受け入れ経験がないから支援ができない」というのは、そもそも合理的配慮提供に向けて前向きに検討をするという義務を怠っているものと言え、「過重な負担」の範疇には入らないことがわかる。池谷氏によると、「まず受け入れて、何ができるかを対話していくことがすべての始まりであって、この事例では検討すらしていないと見られても仕方がない。ただし、明日からすぐにすべての授業に情報保障を配置するのは難しいかもしれないので、これについては、ではどこまでならできるか？という点について協議する必要があるだろう」とのことである。

一方、事例 6 についても、そもそも断ることを前提に話が進められている時点で、問題がある。藤木弁護士によると、「合理的配慮の提供にあたり、大学がどの程度の予算を負担しなければいけないかという点については、未だ判例もなく日本では答えが出しづらい部分」とのことであるが、「大学全体の予算規模を考えると、一コマでも二コマでも負担できる範囲を増やしていくのが大前提で、予算が掛かるからすべてダメといった姿勢はとるべきではない」とのことであった。

これに対して学生の要望の中には、内容によって教育水準を下げることに繋がってしまったり、本来授業で目的としている内容を達成できなかったりと、教育上不都合が生じるものもある。村田氏によると「法律では、このような目的・機能の『本質的変更』には及ばないとされている」とのことだが、以下のような事例の場合はどうだろうか？

【事例 7】英文学科に在籍する聴覚障害学生から、英語のヒアリングおよびスピーキングを重視した授業（必須科目）を履修したいという申請があり、情報保障として手話通訳を希望している旨の連絡がありました。教員と学生のやりとりが多くなされる授業のため、即時性のある手話通訳を望んでいるようです。この場合、学生の希望通り手話通訳による支援を提供する形でよいのでしょうか。（大学職員）

【事例 8】一般校へ教育実習に行く予定です。発声が得意ではないので、授業をする時に手話通訳者をつけて欲しいとお願いしたら「授業は自分の力でするもの」と断られました。教育実習での手話通訳は、本質的な変更にあたってしまうのでしょうか。（聴覚障害学生）

このうち事例 7 について、松岡氏からは「日本語で話す部分は手話通訳で大丈夫だが、ヒアリングの内容を日本手話に置き換えるのは、授業の目的・機能の『本質的変更』と考えられるため不適當ではないか？」との指摘があった。では、どのような合理的配慮が適當かとの問いに対しては、「英文学科の学生であるため、むしろリーディングなどの授業に代替してシェークスピアの原著を理解できる力を高めたり、国際手話やアメリカ手話の授業を開講して、国際学会等で発表ができる力をつけたりする形が望ましいのではないか」とのことだった。また、池谷氏からは「同じような例でも、学生によってはリスニングにチャレンジしたいという場合もあると思うので、その場合は本人にとって聞きやすい方法や視覚的な手がかりを加えながら、一定のリスニング力を磨けるようにする方法なども模索していける可能性があると思う」との指摘もあった。同様に藤木弁護士からも「本質的変更については、個別の事例ごとに学生と支援者・先生の間でじっくり話し合って何ができるかを考えて欲しい」との意見が出された。

一方、事例 8 については、池谷氏より手話通訳の役割を明確に定めておくことが重要との指摘がなされた。すなわち、「意思疎通の部分のみを支援するのであれば、それは本質的変更にはあたらないと考えられる。けれども、この範囲を超えて支援者が子ども達に教育的な関わりを行ったり、本来聴覚障害学生が担うべき役割まで担ってしまったらすると、それは本質的なところで問題が生じる。このため、手話通訳者の役割を関係者と十分共有するとともに、支援者・聴覚障害学生の双方に研修を行っておくことが重要ではないか」とのことであった。また、藤木弁護士は「このような例の場合、裁判所は前例を重視する。他大学等で手話通訳を帯同して実習を行っている例が複数あるようであれば、それは前例として加味され、本質的変更とはとらえられないという判断になると思う」との見解だった。



## まとめ

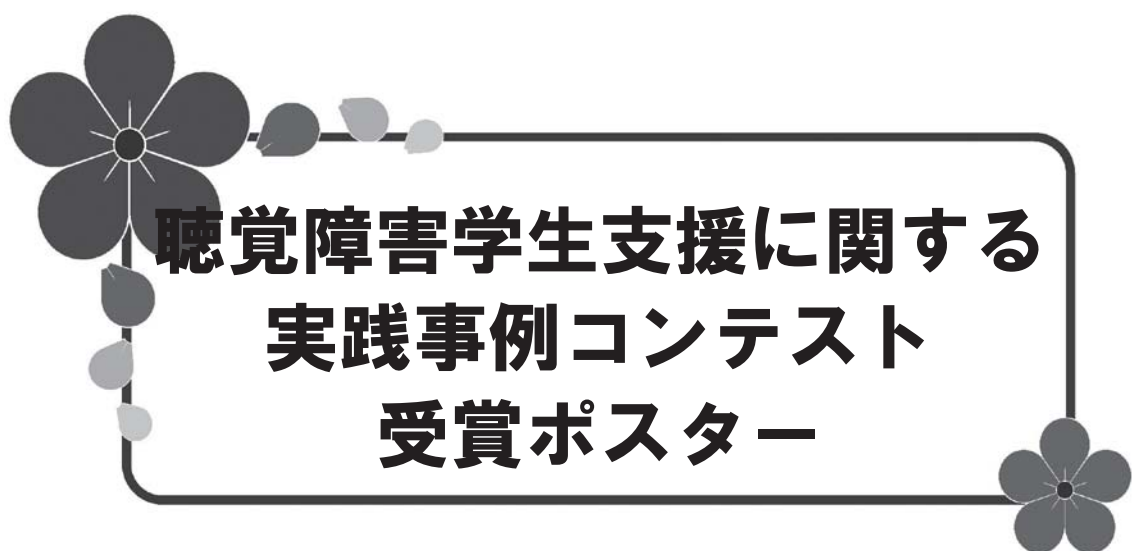
### 写真 講師陣

#### 本ディスカッション

(左から、藤木氏、池谷氏、村田氏、松岡氏)

では、障害者差別解消法によって規定されている不当な差別的取扱いの禁止や合理的配慮の提供について、事例を通して理解を深めることができた。藤木弁護士によると、「差別解消法ができたからといって、具体的に必ず手話通訳やパソコンノートテイク等の配置が保障されるものではない」とのことである。けれども、「法律の存在によって、障害者の受け入れが保障され、話し合いの土俵が成立する。つまり、受け入れてその上で何ができるか考えることがスタートラインになる」法律によって保障されたこの土壌を最大限に生かしていくためにも、今後、障害学生がより多くの情報を取り入れ、大学側と建設的な対話ができるようバックアップをしていくことが重要と考えられた。







# 大阪教育大学 障がい学生修学支援ルーム

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY

一歩目って不安、だけどワクワク。  
コースもペースもゴールも自分で決められるからこそ  
**はじめての一歩**を踏み出せる。



ひらめきも励ましも、日常から生まれる。  
憩う、出会う、語らう、**交流スペース**。



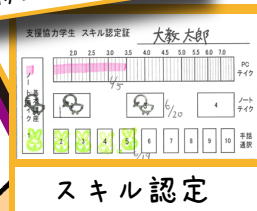
## 共 走



昨日はお弁当友達、  
今日はチームメンバー  
**「いいね！  
やろう！」**



研修合宿



自己レベルの実感  
×  
その道のカリスマ

「もっと上手になりたい！」  
**「任せろ！」**

設立4年目、当時の新人も4年生。

節目の今、たすきを確実に **繋ぎたい**。

発表者：伊藤愛里（B4）、森野宅麻（M1）、荒木航平（B4）、宮谷祐史（M2）、大前勝利（B2）、  
吉川美夏（B2）、寺西冬萌美（B2）、石田祐貴（専攻科）、萩原萌（B1）、小林千紗（B1）  
大阪教育大学障がい学生修学支援ルーム TEL:072-978-3479 E-mail: sienroom@bur.osaka-kyoiku.ac.jp

# 支援体制が整うことから矛盾に挑む!

## 支援の整った後にある問題

- ・テイクは必要、でも友達ができない…
- ・友達はある、のに空気のように扱われる…
- ・友達が手話を覚えた、でも話し合いに参加できない…

知識 ≠ 意識

## 支援が整う

## 友達と楽しい学生生活を送れる

### 解決方法

## ろう難聴学生と聴学生

### ■聴覚障害学生

- ・自らの障害について聴学生に伝える (エンパワメント)
- ・全部出来ないで誤解されたまにせず、どういう条件だったら出来るかを提案
- ・困っていることとその解決策を提案

### ■大学側

- ・オリエンテーションで自身の障害について話す場の設定
- ・先輩聴覚障害学生から周囲とのコミュニケーションの取り方について話を聞く場を設定
- ・講義「手話とろう文化」「障害者と共生社会」や専門教科

知識

+

経験

が

### ■聴覚障害学生

- ・グループ活動等での交流
- ・情報保障を通して聴学生と関わる
- ・講義やゼミ、サークルなどいろいろな場で聴学生と関わる
- ・テイクと交換日記を行う
- ・テイク後、テイクにお礼を言うよう努め、聴学生と関わる機会を増やす

### ■大学側

- ・聴学生とろう学生の交流の場を提供

聴覚障害学生と深くかかわる為には…

知識

+

経験

+

意識

が必要

意識

### ■聴学生

知識 + 経験

↓  
意識

を育てる

高い意識が  
ろう学生を  
孤独から救う

## ろう難聴学生同士

- ・ろう難聴学生で手話を思いっきり使って会話ができる。そこにいるのは、少数の仲間の前でこそ引き出せる本当の自分。そして、仲間の前でこそ言える愚痴や本音が、解決への道筋を作る。



## 難聴学生とろう学生

- ・同じ聴覚障害学生との出会いが、自分の障害観を変える

聞き辛さからくる  
仕方なさ、恥ずかしさ、隠したさ

↓

障害と向き合い、  
障害の先を見据えるようになる

聴学生への  
適切な働きかけが  
行える

2015 年発足!

つながぎ隊



もっと積極的に「てくてく」のために活動したい利用学生と支援学生で結成!!

～今後の活動～

## 内部の向上

### 支援技術練習会

テイク(PC、ノート)スキルや連携能力の向上とてくてくメンバーの交流を図るため



平日での定期開催  
実践的なテーマで練習  
相談室のフィードバック

利用学生

授業

### 困ったときの相談室

よりよいてくてくを作り、てくてくメンバー全員が過ごしやすい環境にするため



てくてくメンバーからの相談受付  
てくてく新聞発行(2ヶ月に1回の発行)  
てくてく HP、SNS 開設

利用学生

支援学生

### 支援データの収集・活用



初回の授業から授業形態を把握し、十分な支援を行うため

### 支援学生の情報共有

支援をする前に相手の支援学生のことを知り、スムーズな支援を行うため



タイピング速度、所属学科  
学年、支援経験等を共有

## 外部への発信

### 理解啓発研修会の開催!

愛知教育大学の中でも、まだ「てくてく」の活動を知らない学生や教員がいるのが現状です。そこで、今年も私たちの活動を知ってもらうために、理解啓発研修会を開催します!



(昨年の様子 講演者: 今村氏)

今年度は1月に開催予定!

講師は現役の聾学校教師



KANAZAWA SEIRYO UNIVERSITY

金沢星稜大学

障がい学生支援チーム

～ろう学生も「安心」して過ごせる「学生生活」を目指して～

### 【手話サークル】

日常会話レベルの手話を楽しく学んでいる。  
ノートテイクに使える手話講座も行っている。



### 【金沢大学との交流会】

講義だけが学生生活ではない！！  
信頼できる仲間がいることも大切！！



### 障がい学生支援SJP ノートテイクー39名所属

ろう学生の入学に合わせて、聴覚に障がいのある学生でも、  
安心して学生生活を送ることができるよう、3年前に誕生！！  
2015年度現在では3名の聴覚障がい学生が在籍している。



### 日本代表選手として、世界大会へ！

本学ではろう学生(2名)が

「アジア太平洋ろう者競技大会 陸上競技」に出場！

- ・森光佑矢(スポーツ学科2年次)(右) 1500m **優勝**
  - ・沖田耐芽(スポーツ学科3年次)(左) 800m 6位
- 目指すはデフリンピック出場！！**



### 【今後の課題、目標】

授業によって、教員の話が速かったり、  
「ノートテイク」について理解されているのか？  
⇒聴覚障がい学生に対する、情報配慮が必要

どのようにしたら効率よく、  
確実な情報を伝えられるか？  
ノートテイクのスキルを熟知する必要がある。  
⇒ノートテイクマニュアルの作成・改善

【CONTACT】 金沢星稜大学 学生支援課

ADDRESS：石川県金沢市御所町丑 10-1

TEL：076-253-3925

E-mail：gakusei@seiryo-u.ac.jp



# 亜細亜大学 FDグループ

## 手話表現研究会（半期に1回程度）

2006年度から行われている聴覚障害学生支援の取り組みです。

ろう学生が在籍している学部の教員の講義の中で、よく使われている専門用語を10個取り上げて、教員がその意味を説明します。

手話通訳者にとって通訳しやすいか、ろう学生にとって手話を見て意味を理解しやすいか、また、教員は手話表現と専門用語の意味が同じであるかを確認し合いながら、最終的に一つの専門用語の手話表現を決めていきます。



教員・手話通訳者・ろう学生で話し合っています。

### 以前は

通訳者は自分の話を全て手話通訳できていると思い込んでいた。  
通訳されている内容がろう学生にしっかりと伝わっているか不安だった。

### 現在は

手話通訳者も努力して勉強をしていることが分かった。  
資料や教科書などを手話通訳者のために前もって渡すことの意味が分かった。  
通訳しやすいように講義で話すスピードをゆっくりにするようになった。

### 以前は

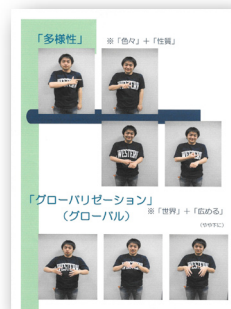
聞いたことが無い専門用語をどうやって表現すればいいのかわからなかった。  
専門用語の手話表現があいまいで、ろう学生に伝わっているか不安だった。

### 現在は

専門用語の意味を分かった上で、伝わる手話表現ができるようになった。  
教員に専門用語の意味を確認しやすい関係を作ることが出来た。



手話表現と専門用語の意味が同じかどうか確認し合っています。



みんなで話し合って決めた手話はこのようなプリントになります。

### 以前は

手話通訳者の手話が分からないことがあった。  
講義や自学だけでは理解出来ているのか不安なことが多くあった。

### 現在は

手話通訳者が通訳するために、自学自習していることがわかった。  
教員と手話通訳者との距離を縮めることが出来た。

専門用語の手話表現を決めるだけでなく、  
教員・手話通訳者・ろう学生が一つの場所に集まり  
お互いの関係を深めるきっかけになりました。

## 亜細亜大学の特徴ある取り組み

### ・全学共通科目「手話入門Ⅰ・Ⅱ」

学外のろう者と一緒に、手話だけではなくろう文化やろう者への理解を広げることが出来ます。

### ・全学共通科目「ボランティア・ワーク」

ノートテイク、PCテイクなどを45時間程度行って、レポート作成と面接で1単位取ることが出来ます。

### ・生涯学習課「手話基礎講座」

主にろう者の文化や生活について学んでいます。社会で活躍しているろう者の講演会も行われています。



### ・ノートテイク講習会（半期に3回）

### ・ノートテイク反省会（半期に1回）

### ・手話通訳者との意見交換会

大学・手話通訳者・ろう学生で半期に1回反省を行っています。

### ・パソコンテイク講習会

### ・パソコンテイク自習会

来年度から本格的に活動を始める予定で、現在は有志を集めて試験的に開催しています。



## 第11回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 実行委員

大会長	寺尾 慎一	福岡教育大学	学長
実行委員長	石原 保志	筑波技術大学	副学長
事務局長	白澤 麻弓	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
幹事	萩原 彩子	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
実行委員	須藤 正彦	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
	佐藤 正幸	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
	小林 正幸	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
	大杉 豊	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
	山田 重樹	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
	三好 茂樹	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
	河野 純大	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
	磯田 恭子	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
	中島 亜紀子	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
	石野 麻衣子	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
	五十嵐 依子	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター
	平田 哲史	福岡教育大学	
	相澤 宏充	福岡教育大学	
	太田 富雄	福岡教育大学	
	牛尾 憲一	福岡教育大学	
	柴田 和巳	福岡教育大学	
	松永 亜矢子	福岡教育大学	
	内田 佳織	福岡教育大学	

## 第11回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 報告書

発行：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）事務局

〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター



※本事業は、筑波技術大学「聴覚障害学生支援・大学間コラボレーションスキーム構築事業」の活動の一部です。

デザイン原案：中島理恵（筑波技術大学産業技術学部総合デザイン学科 学生）





PEPNet-Japan

